太宰府市の文化財　第14集

太宰府・佐野地区遺跡群 I

－向佐野・原口遺跡－

1989

太宰府市教育委員会

太宰府・佐野地区遺跡群 I

―太宰府都市計画事業佐野土地区画整理
に伴う埋蔵文化財調査報告書（1）―

1989

太宰府市教育委員会

原口遺跡C区地盤土層写真

昭和36年当時の佐野地区周辺

序

このたび、太宰府市西郊の佐野地区において96haにも及ぶ土地区画整理事業が太宰府市によって計画され、昭和63年度から本格的な工事が実施され始めました。

これに先立ち、太宰府市教育委員会では昭和62年度から埋蔵文化財の発掘調査を実施する運びとなり、本書はその報告の第一冊目であります。

この佐野地区一帯は早くから宮ノ本遺跡をはじめとする文化遺産の宝庫であることが知られており、開発に先立つ調査とは言え広域に発掘調査が実施されますと今までほとんど知り得なかった太宰府市西郊の歴史が具体的に解明されるであろうと考えております。

その最初の調査として実施いたしました原口遺跡は今まであまり知られていなかった遺跡でありますが、調査の結果、弥生時代の住居址をはじめ中世に至るまでの遺構が存在する複合遺跡であることが明らかとなり、今後の周辺地帯の調査にも期待を抱かせるものとなりました。

佐野土地区画整理に伴う第一冊目の報告書といたしましては誠に拙ないものではありますが、地域研究や文化財の保護と理解への一助にでもなれば幸いに存じます。

最後になりましたが、本書をまとめるにあたり御指導、御鞭撻いただきました諸先生方をはじめ、発掘調査及び整理作業に従事していただきました作業員の方々に対し、厚くお礼申し上げる次第であります。

太宰府市教育委員会
教育長　藤　　　壽　人

例　　　言

1．本書は太宰府市教育委員会が昭和62年度に実施した太宰府都市計画事業佐野土地区画整理に伴う向佐野（むかいざの）・原口（はるぐち）遺跡の埋蔵文化財発掘調査報告書である。

2．調査は昭和62年12月9日から翌年3月29日まで実施した。地番は太宰府市大字向佐野字原口529他で、開発対称面積は17,000㎡、調査面積は9,510.4㎡である。

3．調査関係者は第Ⅱ章に記したとおりである。

4．検出遺構の実測及び写真撮影は、山村信榮・藤城　泰・瀬口慎司、出土遺物の実測は、狭川真一・城戸康利・中島恒次郎・山村、出土遺物の写真撮影は岡紀久夫、検出遺構の全体写真撮影は㈲空中写真 稲富が行なった。検出遺構の全体図作成は大成測量設計株式会社に委託した。

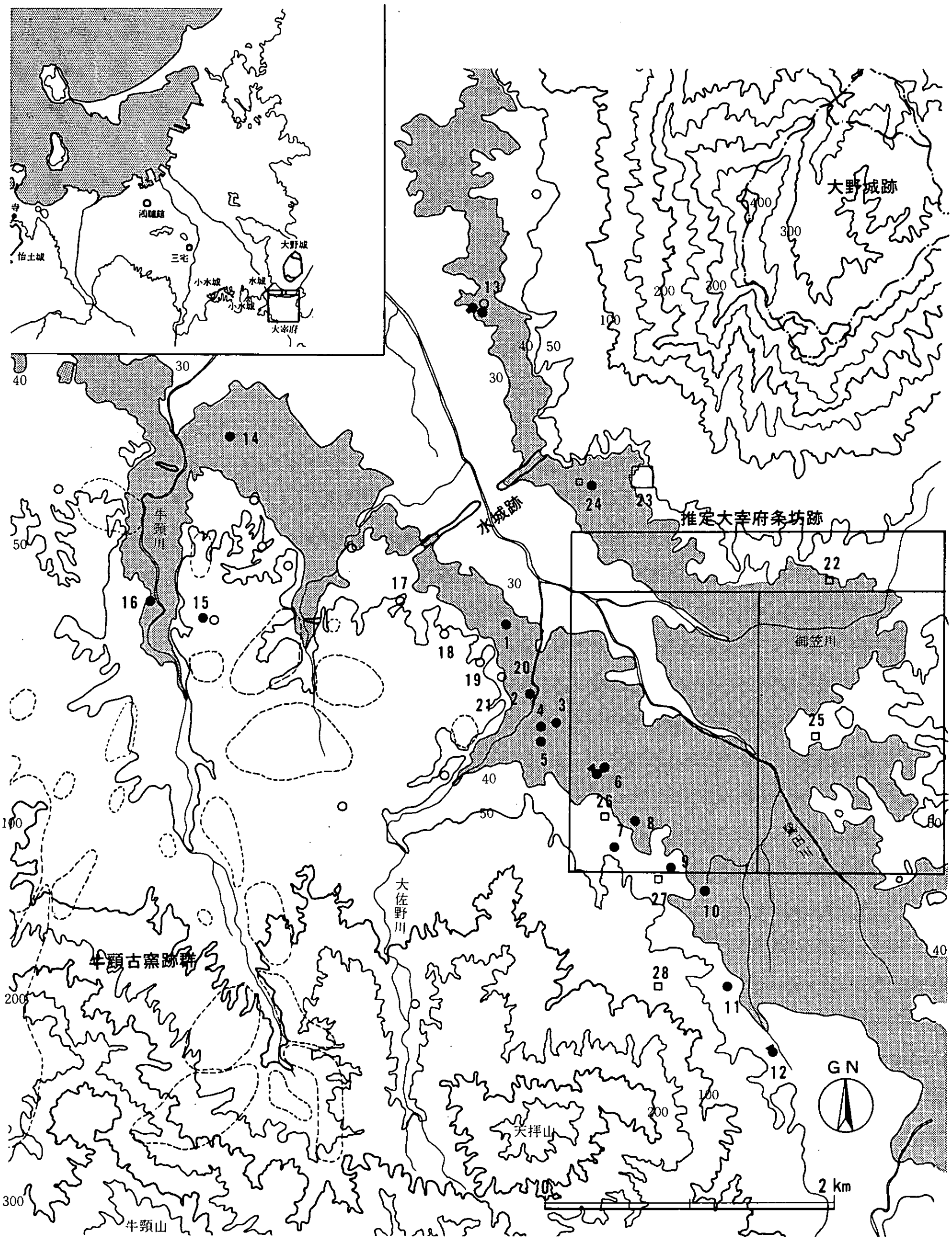
5．遺構実測図及び遺構全体図は全て国土調査法第二座標系を基準としている。よって図中に示される方位は特に注記のない限り座標北（G.N）を指している。

6．調査地区内の土壌中にみられる火山灰分析は㈱京都フィッショントラック（代表 檀原　徹）に委託し、京都大学竹村恵二先生にその成果を基として玉稿をいただいた。

7．本書の執筆は目次に記載したとおりであるが、第Ⅳ章［2］⑴と第Ⅶ章については文末に（　）で示した。

8．本書の編集は、狭川・山村が担当した。

目　　次



(凡 例　●…集落跡　○…須恵器窯跡　◌…窯跡群　□…寺院跡　前方後円墳)

1. 原口遺跡	2. 前田遺跡	3. 雛川遺跡	4. フケ遺跡	5. 尾崎遺跡	6. 剣塚遺跡
7. 脇田遺跡	8. 唐人塚遺跡	9. 塔の原遺跡	10. 桶田山遺跡	11. 道場上遺跡	12. 原口古墳
13. 裏の田遺跡	14. 九州大学筑紫キャンパス内遺跡		15. 平田遺跡	16. 円入遺跡	17. 神ノ前窯跡
18. 篠振窯跡	19. 長浦窯跡	20. 向佐野窯跡	21. 宮ノ本遺跡	22. 観世音寺	23. 筑前国分寺跡
24. 筑前国分尼寺跡	25. 般若寺跡	26. 杉塚廃寺跡	27. 塔原廃寺跡	28. 武蔵寺跡	

Fig.1　周辺地形及び遺跡分布図（1/5,000）

Ⅰ．は　じ　め　に

地　形　概　要

太宰府市は福岡平野を限る南北方向に延びる600～800ｍクラスの三郡山地と、東西に延びる600～1,000ｍクラスの背振山地の会合部である平野南深部にある。

河川は宝満山と天拝山とが迫る所で分水嶺となり、北は福岡平野、南は筑後平野へと流れる。北流する御笠川、鷺田(さぎた)川、大佐野川、牛頸川等の小河川が合流し、二級河川御笠川となり博多湾へ注いでいる。（流域総面積約100㎢）

本市域の中心地は前記山塊から脈生する50ｍクラスの小丘陵と、これらを前記小河川が開析して作った小谷及びそれに続く低位な段丘面・沖積面とからなり、それは北西－南東方向の溝状低平地を呈し、福岡平野と筑後平野に通じる唯一の開析地となっている。この地理的条件は当地太宰府の原始・古代から現代に至る地域史において大きな意味を持ち続けている。

標高30～40ｍ間に広がる平坦面は（Fig. アミ部分）水域以南の東西南北に近い規格を持つ水田面の広がりと一致し、古代、中世の遺構の残存も良好で、約２㎞四方と推定される。大宰府の条坊もほぼこの中に納まる。また、過去調査された主要な弥生、古墳時代の集落跡もこの中で展開している。

今回の土地区画整理事業の対象地である佐野地区は、太宰府市の西南部約960,000㎡であり、牛頸山から脈生する丘陵と河川の開析作用による大小の谷地と、平坦面とを有し、地形上変化に富んでおり、それに伴い遺跡の表情も多様である。

地　質　概　要

福岡平野を限る山々のほとんどは地質年代にいう中生代白亜紀の中頃から後半にかけて、それまであった古生層や関門層群が底盤となり貫入、隆起し、前記上位層が洗われて出現した花崗岩からなり、現在その表面は地表下のかなり深い所まで風化作用が進行し真砂土化している。

佐野地区に見られる丘陵のすべてはこの花崗岩からなり、その前面に広がる谷、平坦面（段丘面）、沖積地にはこれら丘陵が開析される過程に流された２次真砂土の堆積輪廻によってできる砂層・粘土層が複雑に堆積している。

本遺跡調査中に発見した黒色粘質土層(1)はＡＴ火山ガラスを含むことが明らかとなったが(2)、その後の調査から同層は市域の現標高30～40ｍにある平坦面下に限って見られ、それ以下のレベルには見られないことが分っている。この層以降の沖積層はこの層をトレースする形で形成され、現在の標高30～40ｍの平坦面（Fig. アミ部分）を作り出し、それより低レベルの河川本流周辺は完全な沖積層へと移行していると考えられる。

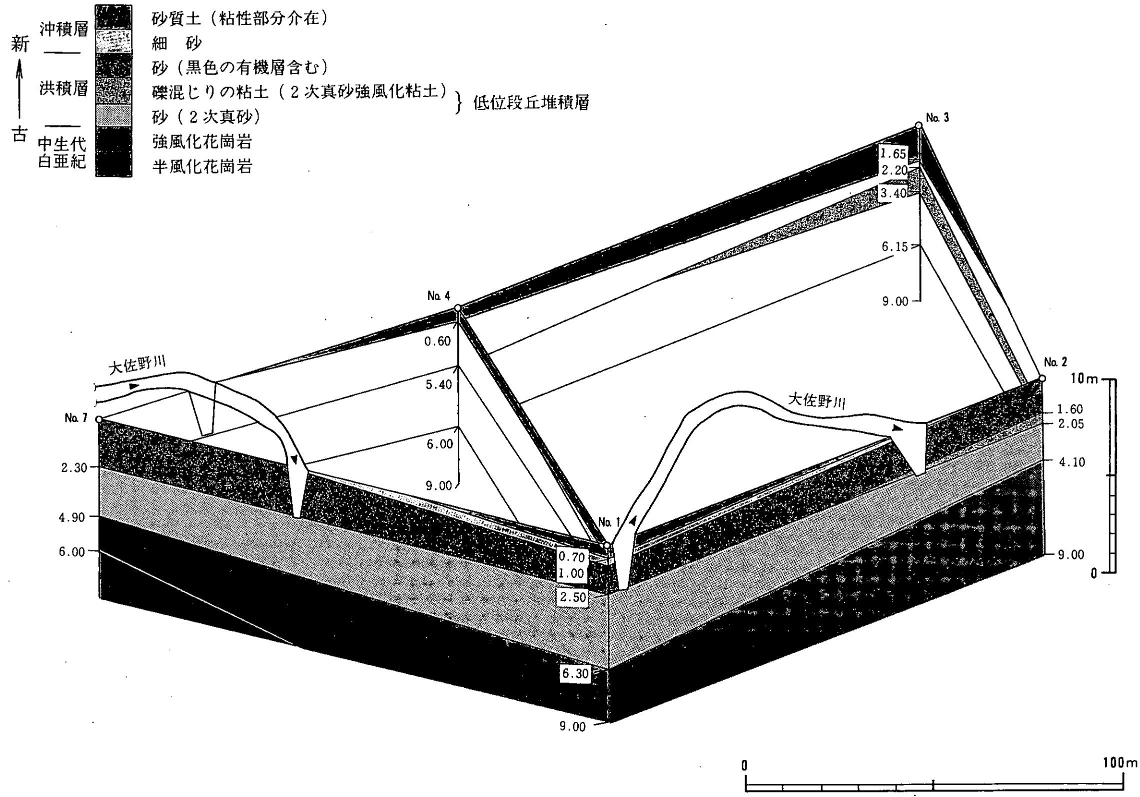


Fig. 2　向佐野字前田地域土層模式図（距離：高さ＝１：５、単位はｍ）

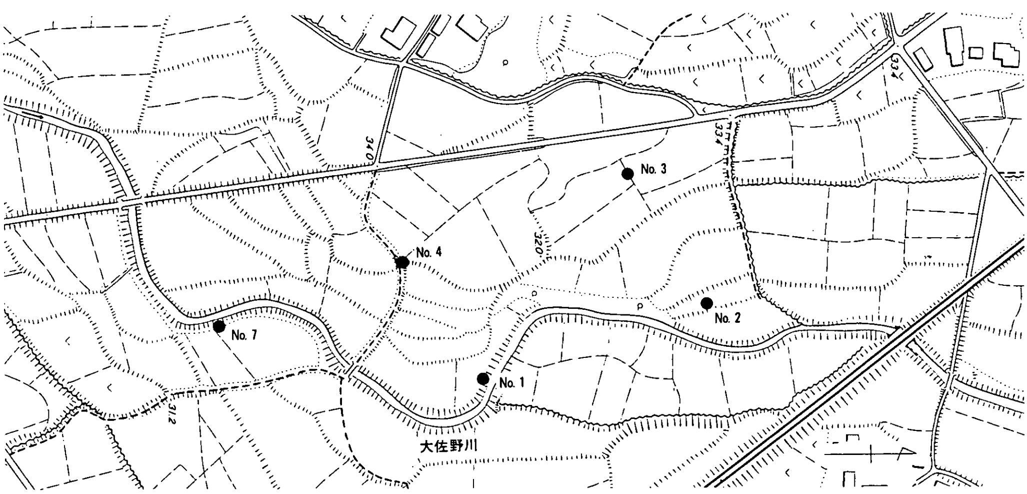


Fig. 3　向佐野・前田地域ボーリング地点位置図（1/4,000・地図は『大宰府条坊跡Ｖ』の転載）

このような花崗岩の風化、侵食、堆積を繰り返す輪廻現象は、花崗岩に含まれる石英・長石・カオリナイト等を微粒子化し、多量の粘質土を生み出す結果となっている。当地に於ける古代の須恵器生産、近世高取焼の採土等はこれらの豊富な粘土の存在に由来する。

なお、本原口遺跡に隣接する前田遺跡のボーリングデータ[3]による土層模式図を呈示するので参照されたい。(Fig. 2, 3)

歴 史 的 環 境

地名について

原口(ハルグチ)遺跡は太宰府市向佐野に所在する。向佐野という地名はすでに16世紀後半に編された『天正年間指出前之帳』という石高帳中に「迎佐野村」という文字で記載され、江戸期の石高帳になり「向佐野村」となって、明治23年に水城村に併合されるまでこの村名称が用いられてきた。その後も同一地域をもって大字向佐野となり、現在も市内47ある行政地区名の一つとして使用されている。

小単位の特定の土地に対する名称は現在行政上番地(数字)によって示されるが、水利権が存在する農地等においては現在もなお小字名が使用されている。またさらに、小字の下の最小単位として、水田一枚相当の土地に対しホノケが存在している。現在向佐野地域において使用されている小字やホノケのほとんどが江戸時代の文化年間に成立した『太宰府旧蹟全図』に見られ、近世後半期にあった特定の土地に対する名称が、細々ながら今も保存され継続使用されていることが

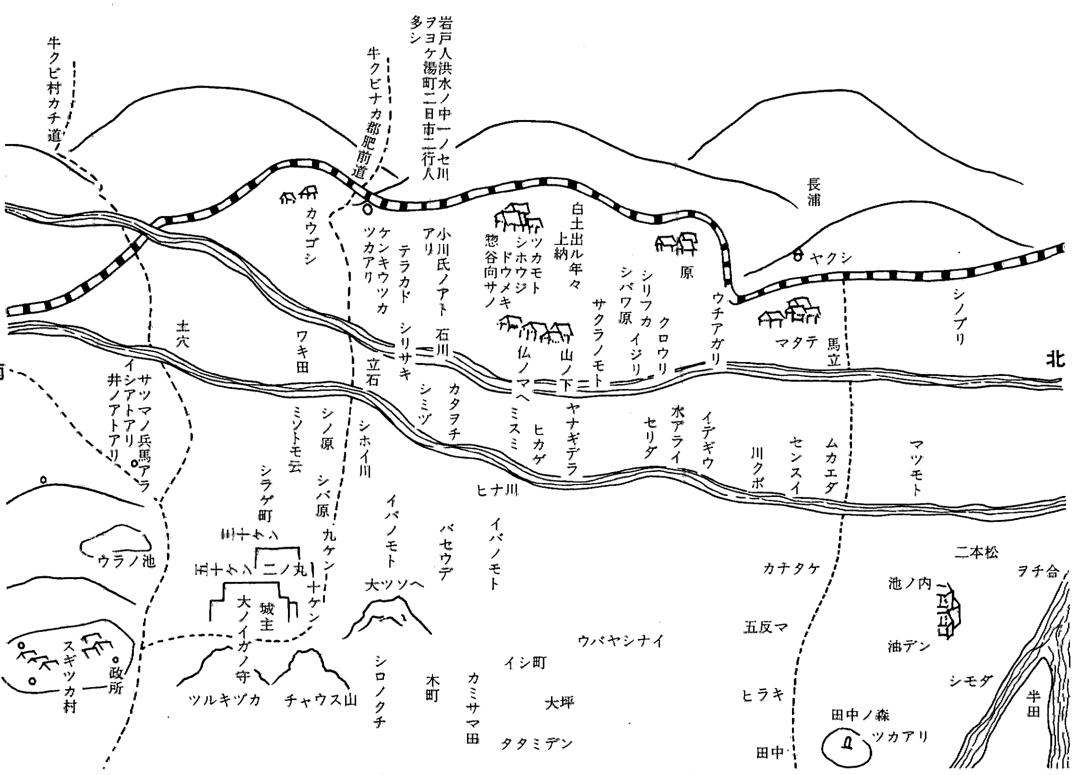


Fig. 4 『太宰府旧蹟全図』にみる佐野地区周辺

分かる。[4]（Fig. 4）現在、石高帳、近世近代の地誌、絵図、地図を含めた文書調査とそれらの成果を基にした聞き取り調査をして、最終的に区画整理事業によって消滅してしまうであろう字、ホノケの記録保存作業を継続的に実施している。その成果については今回提示するには至らなかったが、[5]「原口」という地名についてのみ以下で簡単に触れておくこととする。

小字原口の名称は前記『太宰府旧蹟全図』中に見られ、聞き取り調査によれば、現在では今回報告の遺跡調査区C区の北側を中心として使用される名称であるらしい。ところが今回の区画整理対象区内には向佐野と大佐野に１つずつ原口という字名がある。この両者の地理的類似性を掲げれば、それぞれ山から平地（耕地）へ変換する所で且つ主要道が通り、旧村境（大佐野原口は牛頸村平田に接し、向佐野村原口は水城村吉松に接す。）に存在していることが共通する点であり、そうした地点をもって「原口」と呼称したと考えられる。

周辺の遺跡

原口遺跡の所在する御笠川左岸地域の遺跡調査は、昭和30年代から40年代にかけての幹線道路建設（県道福岡筑紫野線）や大規模な宅地造成（大野城市牛頸、南ヶ丘等）に伴って削平され、露呈した山肌に須恵器を焼いた窯跡が不事発見されたケースに対応する形で始まる。その後、昭和５・60年代へと移行すると、山の造成はさらに大規模化し、それに伴う埋蔵文化財の調査が地元自治体である太宰府市や大野城市によって始められるようになった。この時期には、文化財サイドからの開発チェックや調査体制が整っておらず、人知れず消えていった遺跡も多いと思われる。この様な経緯により、古代日本の三大古窯跡群の一つである牛頸窯跡群の様相が明らかにされだしたのであるが、昭和60年代前後に始まる大野城市側と太宰府市側の区画整理事業に伴って始まった。平地における大規模調査により、ようやく墳墓や生産遺構とは異なる生活関連遺構（集落等）の調査に至ったのである。

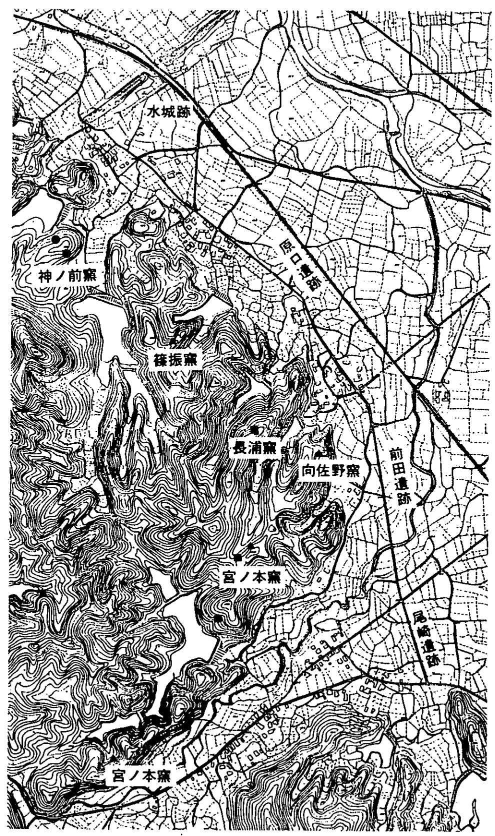


Fig. 5　佐野地区における窯跡と生活遺跡

（地図は『大宰府条坊跡Ｖ』）
1：10,000

太宰府市に於ける、その具体的な遺跡名を掲げれば生産関連遺跡として、ここでは須恵器生産の

窯跡に限られるが、７世紀前半から中葉にかけての神の前窯、７世紀中葉から後半にかけての長浦窯宮ノ本窯、８世紀代の篠振窯、向佐野窯、宮ノ本窯、大佐野野ロ窯等、集落関連遺跡としての原ロ遺跡（本報告）、前田遺跡、尾崎遺跡、雛川遺跡等が掲げられる。（Fig．５参照）

〈参考文献〉

・『福岡県遺跡等分布地図（筑紫野市・春日市・大野城市・筑紫郡編）』　福岡県教育委員会　1980年

・『九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告－Ⅵ－』　福岡県教育委員会　1975年

・『神ノ前窯跡』　太宰府町教育委員会　1979年

・『宮ノ本遺跡』　太宰府町教育委員会　1980年

・『篠振遺跡』　太宰府市教育委員会　1987年

注(1)　植物性腐食による黒色化土。学習院大学の放射性炭素年代測定結果は次の通りである。12、440±190 (Gak － 13876)。データは九州大学理学部地質学 下山正一氏の御教示による。

(2)　第Ⅵ章参照

(3)　『佐野土地区画整理事業（地質調査）報告書』　1988　第一復建株式会社を基に作成する。

(4)　近世から現代に至る行政上の地名史については、次の論巧に詳しい。

山村淳彦「御笠地区小学集成図解説」『筑紫野市文化財調査報告書　第15集』1986.

(5)　調査の一部は『都府楼』６号（古都大宰府を守る会）より順次報告している。

Ⅱ. 調　査　経　過

太宰府市西郊の佐野地区（大佐野・向佐野）一帯に土地区画整理事業の話が持ち上がったのは昭和57年６月であった。当初計画では総面積70.6haがその対象地として提示された。その後昭和61年度に事業計画の決定がなされ、その時点において96.1haの事業域に拡大され実施されることが公示された。併せて本体工事着工も昭和63年７月と決定した。昭和63年度に実施計画の一部変更があり、最終的には96.9ha が事業施工面積として決定された。事業主体は太宰府市である。

埋蔵文化財に対する事前協議は事業の話が持ち上がって後、昭和60年３月に実施された調整会議において一応の調整がなされた。その後実際の調査年度に至るまでの間に幾度となく協議され、昭和62年度から発掘調査に着手する運びとなり、昭和62年５月15日の第７回佐野土地区画整理審議会に於て調査方針の概要を報告した。この時点で全ての調査費用は市の単独費で負担することとなった。調査着手直前になって建設省から発掘調査の一部に対して補助金を公布する旨、指示があり、実際の調査は補助金と市単独費を併用して実施することとした。これに伴い昭和62年８月25日付で佐野土地区画整理事業施工者太宰府市（代表 太宰府市長　伊藤善佐）と、太宰府市教育委員会（教育長　藤壽人）との間に埋蔵文化財発掘協定書が取り交わされた。

昭和62年度における調査対象地は原口地区（1.7ha)、篠原地区（5.6ha)、宮ノ本地区（2.3ha）の３地区で計9.6haにおよんでいた。しかし、この時点で佐野地区土地区画整理事業に伴う埋蔵文化財の調査を担当する専門職員は１名（市３名）しかなく、不可能としか言いようのない状況であった。昭和62年９月に至りようやく嘱託技師１名を採用すると共に、新たに文化財調査用の事務所も新設され、佐野文化財調査事務所として昭和63年２月に使用を開始した。上記３件の発掘調査の実施については協議の結果原口地区を佐野地区遺跡群の最初の調査とすることとし、62年12月から実際の調査に着手することとなった。これと並行して篠原地区の表土除去及び試掘を実施し、さらに併せて宮ノ本地区の調査の準備も行なった。

原口地区は、太宰府市大字向佐野字原口530他に該当するところから、原口遺跡第１次調査として実施した。調査は昭和62年12月９日から昭和63年３月29日まで行った。

この時点での調査組織は以下のとおり。

調査主体			太宰府市教育委員会
	総　括	教育長	藤　壽人
	庶務担当	社会教育課長	花田勝彦
		文化財係長	鬼木冨士夫
		〃　主事	岡部大治
		〃　〃	白水伸司

文化財技師　　山　本　信　夫
〃　　　　　　狭　川　真　一（調査担当）
〃　　　　　　緒　方　俊　輔
〃　（嘱託）　山　村　信　榮（調査担当）

調査参加者（順不同・敬称略）

早田　正弘	福岡　義光	萩尾　　昇	萩尾　泰祐	岩男　澄子
川原田美千代	早田ミツル	中嶋　幸子	中嶋さなみ	宮田　恵子
米原　峰子	大田　茂子	太田ヤス子	高鍋キミヨ	古川トミ子
古川　民子	古川ヨシ子	宮原ハナエ	山本　洋子	岸　　邦子
大田　敬子	三上　智久	佐藤　正光	斉藤　徳美	田中　平助
藤原　重登	田部　澄博	松島　順子	萩尾万寿子	平島　優子
花園美千子	山下　澤子	渡辺ひとみ	楠林　静香	吉田　正子
高良改良子	白木ハルミ	江島スミエ	戸渡　洋美	萩尾須磨子
萩尾カネ子	田中テル子	船越　孝典	山内淳一郎	本村　英知
田中　康裕	八柳健之助	竹林　義之	柴田ツキエ	藤城　　泰
瀬口　真司	山田　富美	中島タキノ	中島タカ子	中嶋はじめ
中島ウメノ	白水いせの	田原智恵子	徳永モモエ	

松田造園土木（代表　松田廣美）　　㈲白石興業（代表　白石浅雄）
古川重機建設（代表　古川　勲）

整理参加者

横山美津子	高橋アイ子	堤　登美代	田崎　笙子	狭川　麻子
城戸　康利	山田　富美	中島恒次郎		

調査及び整理にあたって次の方々から貴重な御指導、御教示を受けた。記して感謝の意を表したい。（順不同・敬称略）

下　山　正　一（九州大学理学部地質学教室）
竹　村　恵　二（京都大学理学部付属地球物理学研究施設）
西　　　健一郎（九州大学文学部）　　赤　崎　敏　男（八女市教育委員会）
中の子　勝　美（陶芸家）　　中　島　秀　雄

また発掘調査を実施するにあたって快く承諾いただいた地権者の方々は次のとおりである。記して感謝の意を表したい。（順不同・敬称略）

簑原　義和	熊田　茂文	簑原　義己	簑原　道徳	中嶋　勝之
簑原　英行	簑原　義雄			

Ⅲ．調　査　方　法

太宰府市では、大宰府条坊跡という広域で且つ計画的に造営されたとみられる遺跡を調査している関係から、当初より一貫した調査方法を用いて発掘調査を実施している。今回の佐野土地区画整理事業に伴う発掘調査も10年余の間に96haにも及ぶ広域を継続して調査するため、一貫した調査方法を用いて実施することにしている。以下にその概略を記すこととするが、これは太宰府市における基本的な調査方法と特に異同のあるものではない。

1．表　土　除　去

短期間で且つ広域な調査区になるところから表土は原則として機械力を用いることとする。今回の事業の場合、造成後は水田に復旧される所が多いため耕土については別に集積する必要があり、二度手間がかかる。畦については道路として活用されているもの以外は全て除去することとしている。

2．試　掘　調　査

表土除去後、ほぼ土地一筆単位で数本のトレンチを設定し遺構の遺存状況を確認する。この折の所見に基づいて調査範囲が決定される。

3．発　掘　調　査

調査の必要な範囲が決定されると各所に分散している耕土を機械力で調査区外へ移動する。この場合、区画整理事業の実施個所や工事着手個所にも左右される時があり、協議が必要であるが、発掘調査が１年度先行しているため順調に進行すれば当初の計画通りに実施できる。しかし、調査に遅れが生じる（天候、遺構の遺存状況、土地所有者の承諾、予算、調査員・作業員の人数他）とやむを得ず当初の計画を変更しなければならない事態もあり得る。

調査区も決定し、機械力による表土除去も終了すると測量を実施する。測量は調査区内に３ｍ方眼の地区杭を設置することに始まる。この方眼は全て国家座標を基準として配置するが、遺物取り上げや遺構の位置を把握し易くするため、遺跡隅（多くは調査区外）を仮の０点とし、Ｘ軸を南から３ｍおきにＡ・Ｂ・Ｃ…（Ｚを除く）、Ｙ軸を東から３ｍおきに０，１，２…と仮称し、それによって表わされた方眼の一桝をＡ３，Ｂ６などと呼称する。この場合Ｘ軸を南から、Ｙ軸を東からというように固定して捉える理由は国家座標の太宰府市域における在り方に起因し、Ｘ値は常に正、Ｙ値は常に負であることによっている。またアルファベットについては数が限定されているのに対し、南北に広い地域を調査するので佐野遺跡群の場合、最初のアルファベット一

行分をＡ，次をＢと仮称し、ＡＡ，ＡＬ，ＢＫ等のように表記せざるを得ない。また各ブロックに４本の地区杭が該当するが、東南の隅の杭をもってそのブロックの代表番号としている。(Fig. 6)

このようにして設置された地区杭は調査終了まで活用される。遺構の検出が開始されるとこの地区杭を用いて１：100の略測図を作成する。(遺構掘り下げ前 Fig. 7）この略測図には遺物取り上げに伴う遺構番号や遺構の埋土状況、切り合いなど検出段階で得られる情報を書き込む。これと並行して遺構番号台帳（Fig. 8）に各々の所見を記入してゆく。調査時点において遺構の性格を決定し難いものも多いため、最初に記される遺構番号はＳ－50、Ｓ－87などのように遺構個別の性格を表記することを避けている。後述するが遺構の性格を含めた最終的な番号は整理及び報告書作成の段階において決定される。

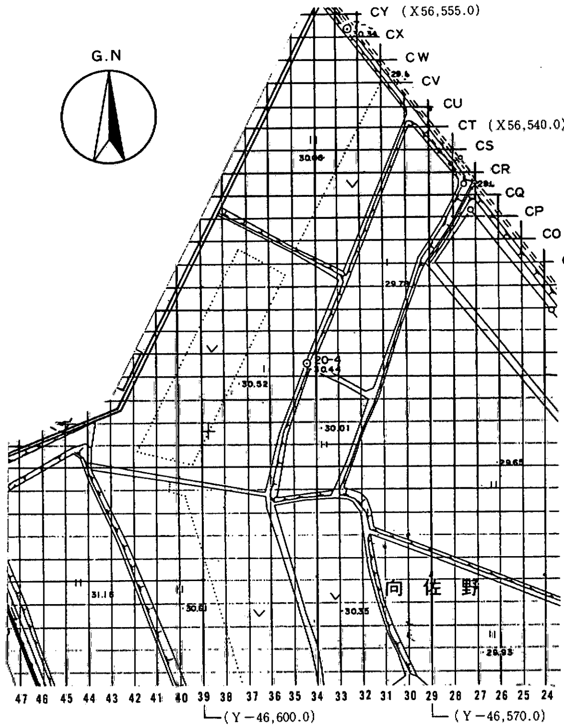


Fig.6 原口遺跡地区割図（部分、１：1,000）

完掘すれば遺跡全体図の作成に入る。佐野地区遺跡群の場合、全体図作成は航空写真測量図化によっている。これを使用する利点は、調査後遺跡が消滅又は埋没しても３時限の空間によって再び情報を得ることができる点が我々にとって最大の利点と言える。事業的に言えば広域の図化を遣り方を用いて測量するよりも短時間ですむ点と、平板のように誤差の大きい測量方法を用いることがないという点がある。航空測量が全て国家座標を用いることは我市の場合当然とも言えるものであり、この点でも活用の幅は大きい。

次に完掘又は調査途中において作成する１：20等の個別遺構の実測の必要性について述べる。個別実測を要するものは原則として切り合いにより古い遺構を完掘する時点において消滅する新しい方の遺構が中心となる。しかし、住居址（床貼りのある場合は２面作成）や古墳主

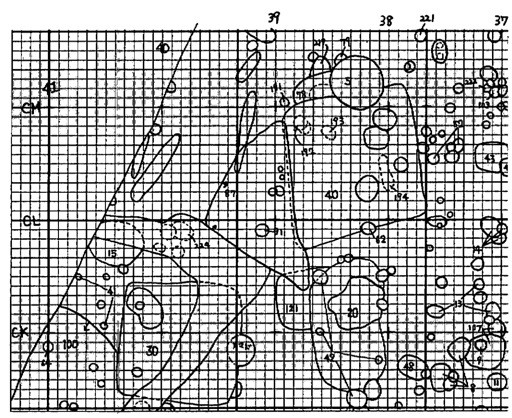


Fig.7 「略図」の一例（1/2、方眼は2.5mm）

体部といった重要遺構、甕棺や貯蔵穴など前述の写真測量の欠点とも言える状況を呈する大きくオーバーハングした遺構については随時、調査に並行して実測している。当然のことながら遺物出土状況もこの範疇に収まる。これら個別遺構実測を最終的な航空写真図化に重複させる手段として次の2とおりの方法を用いている。1つは、実測基準点を全体図化時点まで残し、図化写真撮影直前に対空標識に置き替え、全体図中に入れる方法である。これは現地実測と写真図化の精度検査の一つとしても活用できる利点を保有している。今一つは実測基準点に直接国家座標を与える方法である。遺構が複雑に重複し、古い遺構を調査する時点において基準点の消滅を余儀なくされる折に最大の利点がある。こういう状況下におかれずとも作業中に過失による基準点の消滅もあり得ると判断すればこの方法によるのが望ましいと考えている。

1 遺構番号台帳　　2 遺跡名 原口遺跡 オ1次調査

S一番号	遺構番号	種別	地区
31		ピット群　弥生　弥カメ(中・前葉)	CG41
32		〃　奈良　土、須	〃
33		ピット　白磁片	CG40
34		〃　青磁片 貼床エ?	〃
35	1SB035	掘立柱建物 (S-8.11.13.14. 44.49.106)　中世?	CK36,46
36		ピット　土製紡錘車	CE41
37		〃　奈良　土、須	CF41
38		〃　須カメ	CG37
39		ピット群　奈良　須、土	CI36
40	1SI040	住居址　7c後	CL38
41		ピット群　奈良　須・弥	CK40
42		〃　42←20	CJ38
43		ピット　奈良.	CL37
44		〃	CL36
45	1SB045	掘立柱建物 (S-8.11.43 49.108.113)　中世?	CK36,16

太宰府市教育委員会　文化財係

Fig.8 「遺構番号台帳」の一例（原本はB6版）

次に遺構写真について述べる。遺構写真は原則として次のカットが要求される。検出時、土層観察、完掘時を最低条件とし、場合により遺物出土状況や調査中のものも含めて撮影している。本市の場合、主要遺構についてはローリングタワーや高所作業車を用いて個別に撮影している。使用フィルムのサイズと種別は、4×5、ブロニー、35m/m共にモノクロとカラーリバーサルを併用している。最も多く撮影されたものは6種のフィルムにより記録されている。また、必要に応じて、8mmカラーフィルムでの映像記録も行なっている。

遺構全体写真については高所作業車やローリングタワーを用いる事もあるが、原則として気球による写真撮影を行なっている。撮影高度、位置、角度などの上で、多彩で活用範囲も広い。さらに人間が直接カメラを操作しないので、安全性においては他に越えるものは無いと言える。航空写真図化用の写真も使用できないではないが、対空標識や遺構指示用の白線といった遺跡写真にとってノイズとされるものが多く写っているため、遺跡全景写真には不向きと判断している。

こうして作成された図面や写真は調査担当者全員が検査することとし、統一を計っている。この過程が全て終了し必要のあるものは断割とその記録をして埋め戻される。埋め戻しは、機械力によることが多い。

4．遺　物　整　理

出土遺物の整理は次の手順をふむこととしている。

土器洗浄・乾燥 → 選別（記録）→ ラベリング → 詳細メモ → 接合 → 実測 →復原（色塗り等）→ 写真撮影

以下主要なもののみ略述する。

選別は次のラベリングへ移行するまでの間に全ての出土遺物を調査担当者全員が調査所見に基づいて実見し、Fig．9に示す出土遺物台帳に各遺構、各土層ごとに全ての遺物が記録されることを言う。この作業過程において遺構の時期はおおむね決定され、それに基づいて復原、実測される重要遺物が抽出される。他の遺物については、遺構、土層単位に整理し直され収納される。

詳細メモは先のFig．9の台帳を完成させるもので、抽出した主要遺物の多くは現段階において何らかの形で分類され、記号化されている。特に輸入陶磁器においてはそれが顕著であり、仔細に記録する必要がある。この過程を軽視すると後々二度手間をかけることとなる。

太宰府市で使用している各々の分類基準は各報告書中に記すことで対応している。（P．54参照）

復原は実測の後に行なうことを原則としている。重要遺物の場合、復原は特に慎重に行なわれなければならず、復原の段階で誤った形状を呈さないためにも必要と思われる。これらの作業終了後、報告書作成過程において問題が生じた折は収納した遺物について再び選別以降の手順を繰り返す。

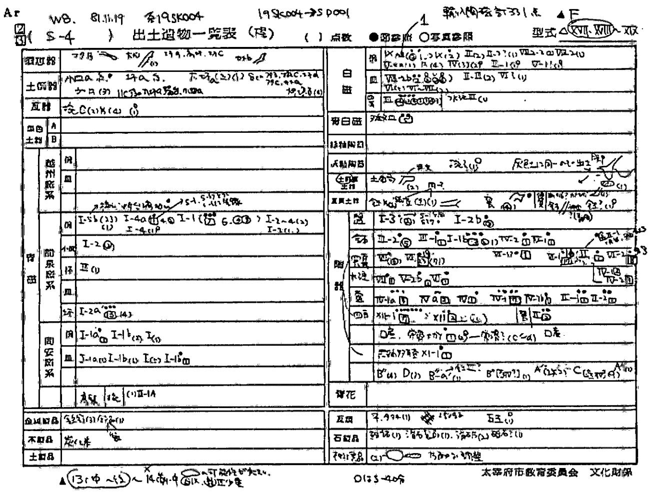


Fig. 9　「出土遺物一覧表」の一例（大宰府条坊跡第10次分・原本はＢ６版）

以上の作業工程のうち、選別、詳細メモは調査担当者が実施することを原則とし、実測においても調査担当者が最終的には全てを検査することによって完了することとしている。写真撮影は委託する場合もあるが、必ず調査担当者が立会い、遺物の方向や撮影角度を指示することにしている。

５．報　告　書　作　成

上述の作業過程を経る間に充分に調査担当者が検査するので、この段階で遺構の性格、時期は決定されている。このうち遺構を報告するためには全て記号化することを原則としている。遺構略号はおおむね奈良国立文化財研究所提示のものに従っているが一応次に揚げておく。（tab. 1）

遺構の表記については、現場で取り上げた仮番号と報告書の番号が同一になることを原則と

し、遺跡名、調査次数、遺構番号が報告書と収納ケースにおいて同一になるよう考慮している。仮に、大宰府条坊跡第50次調査において検出したＳ－80が、整理の結果井戸と判断された場合、次のように表記される。

$\underset{①}{\underline{条}}\ \underset{②}{\underline{50}}\ \underset{③}{\underline{SE}}\ \underset{④}{\underline{080}}$

①は遺跡略称、②は調査次数、③は遺構種別、④は遺構番号である。報告後、調査担当者の異動や収納場所の変更があっても、必要な遺物はすぐに検索できると考えている。なお、報告書の遺構図に表記する折には①は除外している。また、この方式は昭和58年度以降実施しているためそれ以前の分と混乱するようにも思われるが、以前の分についても上述の表記方法に置き替えて捉えれば問題なく整理し得ている。

略号	遺構種別	略号	遺構種別
ＳＡ	柵	ＳＧ	池
ＳＢ	建　物	ＳＩ	竪穴式住居
ＳＣ	廊	ＳＫ	土　壙
ＳＤ	溝	ＳＴ	墳　墓
ＳＥ	井　戸	ＳＸ	性格不明遺構
ＳＦ	道　路		

Tab.1　遺　構　略　号

以上の過程を経て調査事業は一応の完了をみるが、市民や研究者への情報公開となるとその施設や人員、予算等多くの面で未だむづかしい側面をもっている。しかし、上述の過程で整理さえしておけば、活用の場を与えられさえすればいつでも活用し得る段階まではきているものと判断している。

各々の遺構・遺物の整理については仔細な問題を多く残していると思われるが、太宰府市の現状における調査方法を略述することで、当市の刊行する報告書の活用に少しでも役立つことができれば幸いである。

なお、佐野土地区画整理事業に伴う発掘調査で出土した遺物の整理、保管、管理については当面、佐野文化財調査事務所（太宰府市大字向佐野244-581　☎092-921-2322　〒818-01）で行なっている。活用されたい。

※　太宰府市における遺構・遺物をはじめとする様々な項目の情報整理については、次の文献を参照されたい。

山本信夫「太宰府市における情報整理」『第２回　考古学におけるパーソナルコンピューター利用の現状』1989　帝塚山考古学研究所

Ⅳ 遺跡の調査

[1] 層　　序

土層の観察は便宜上A・B・Cの大地区ごとに分けて行なった。遺跡全体の地形の傾斜が南西から北東方向に向かって落ちているため、隣接するA・B区は同一の土層を共有している。

Fig．10は各地区の土層を概念的に示した図である。各層位の出土遺物から想定し得る年代等の所見は次のとおりである。

C区（Fig．11）

①～③層は現代。④層は近代から現代のもので沼状を呈していた頃の埋土であると思われる。⑤層は13、4世紀のもので、⑥層とは同色土層であるが地形上の高低差があるため便宜的に分けた。⑦層は1 SG 060の埋土であり、

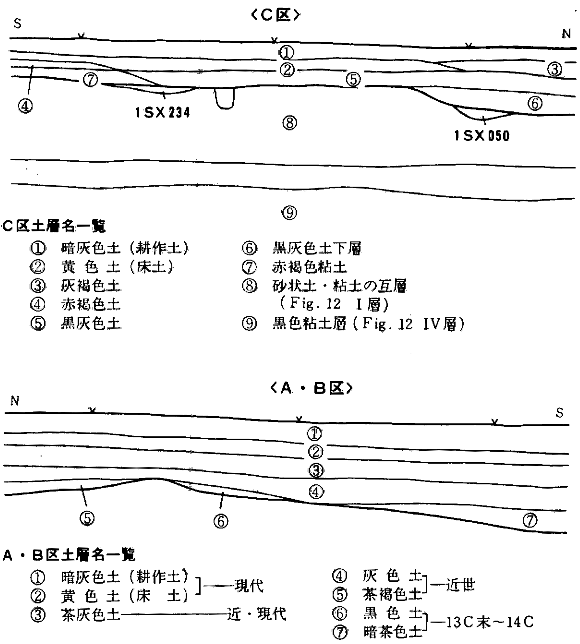


Fig.10　原口遺跡土層模式図

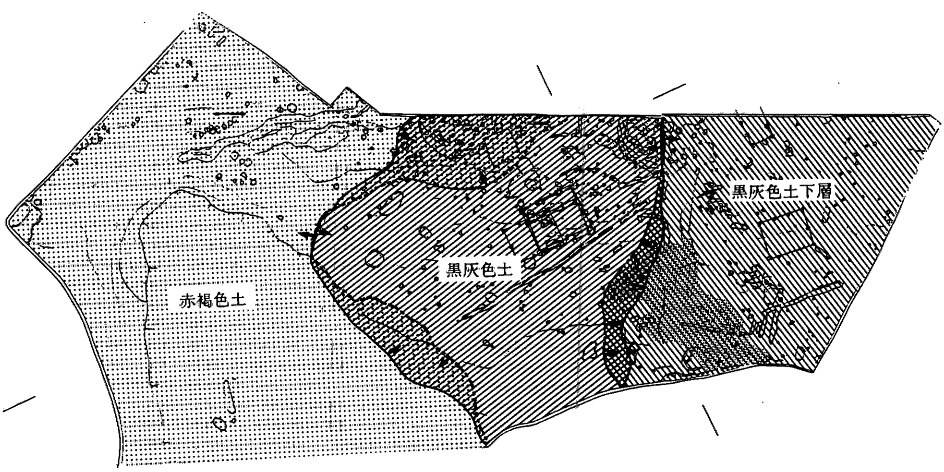


Fig.11　原口遺跡C区土層分布図（1/800）

永らく湿地状態だったものが古代末から中世頃に一旦固まったものと思われる。（本文参照）⑧層以下は俗に「地山」と呼ばれる無遺物層であるが、⑧層は花崗岩の堆積輪廻作用によって形成された砂と粘質土の混在する沖積層である。⑨層は植物腐食土層である黒色粘土層であり、この層位からサンプリングされた資料により求められた^{14}C年代は12440±190年（GaK－13876）であるという[1]。

A・B区

①、②層は現代。③層は近代～現代。④、⑤層は近世。⑥、⑦層は13世紀末～14世紀頃である。それ以下の層位の状況はC区と同様であるが、ごく局部的に縄文土器を包含する層が存在する。（1 SX 230）

なお、Fig. 12はC区（1 SK006付近）で設定したトレンチの土層図である。（巻頭カラー図版参照）Ⅱ層以下の各層位から土のサンプリングを行ない、その一部について鉱物レベルでの分析を実施した。（第Ⅴ・Ⅵ章）

注(1) 九州大学理学部地質学教室の下山正一先生の御教示によるデータである。

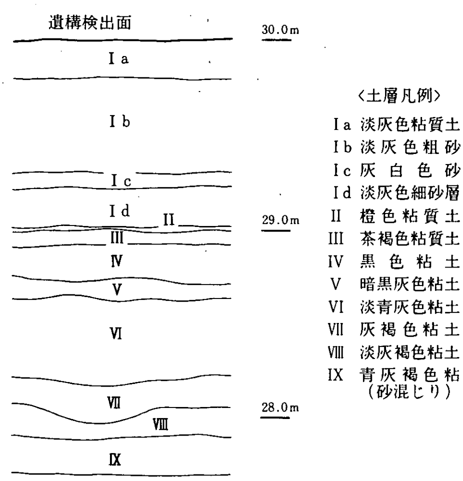


Fig.12　C区地盤土層図

[2] 遺 構 と 遺 物

遺構は南側のA・B区で、中世～近世の溝、C区で弥生時代と古墳時代の住居跡、中世の掘立柱建物をはじめ土壙、ピット、溝などを検出した。（Fig. 13, 14 付図1）

(1) 住 居 跡

原口遺跡で検出した住居跡は弥生時代中期の2棟と古墳時代後期の2棟との計4棟であり、これらは全てC区北東部の水はけの良い微高地部分に位置している。この微高地の中心は調査区の西に隣接する場所にあるものと思われ、今回検出した4棟はそれぞれの時期の集落の縁辺部分に当たるものと想定している。

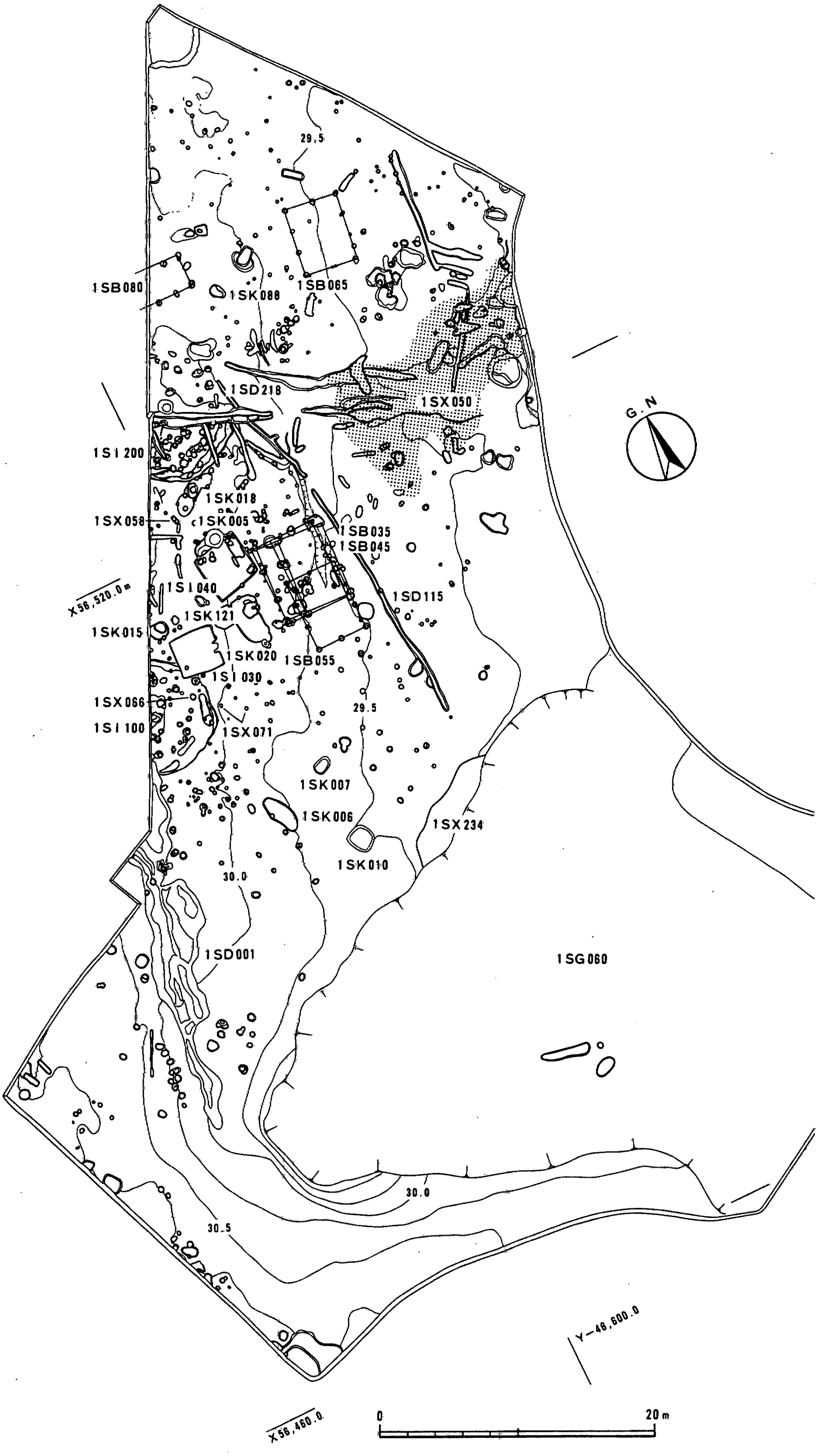


Fig.13　原口遺跡C区遺構配置図（1/500）

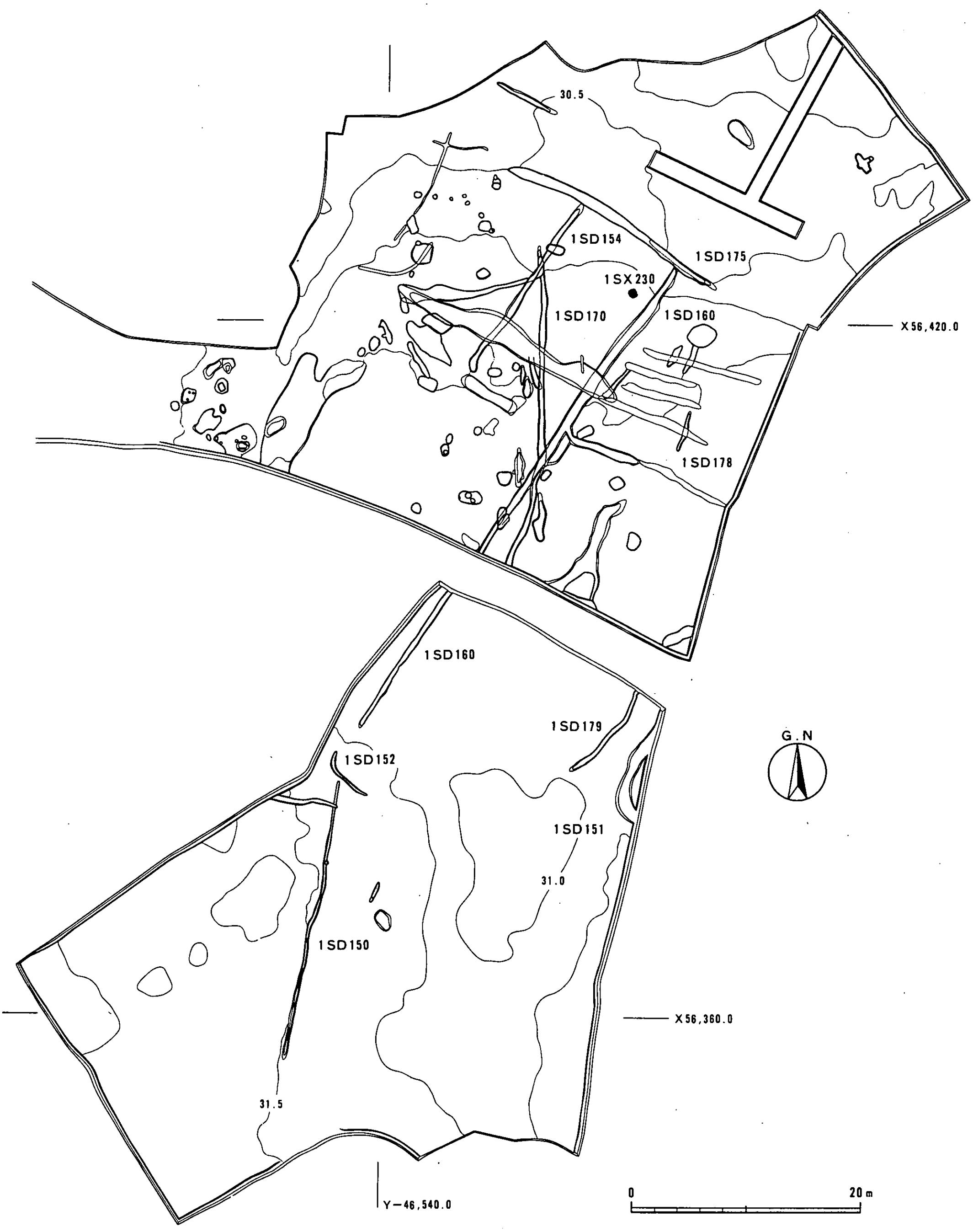


Fig. 14　原口遺跡Ａ・Ｂ区遺構配置図（1/600）

① 遺　構

1 SI 100（Fig. 15　Pla. 4）

1 SI 100は東側の一部を1 SI 040に切られ、プランの西半分は調査区外に延びている。

掘方のプランは円形で、直径が約8.2mの規模である。残存状況は、床面までの深さが0.1m以下という状況であった。

埋土は全体に灰褐色の土があり、中央の長楕円形のピット中に限り炭のまじったやや粘性を帯

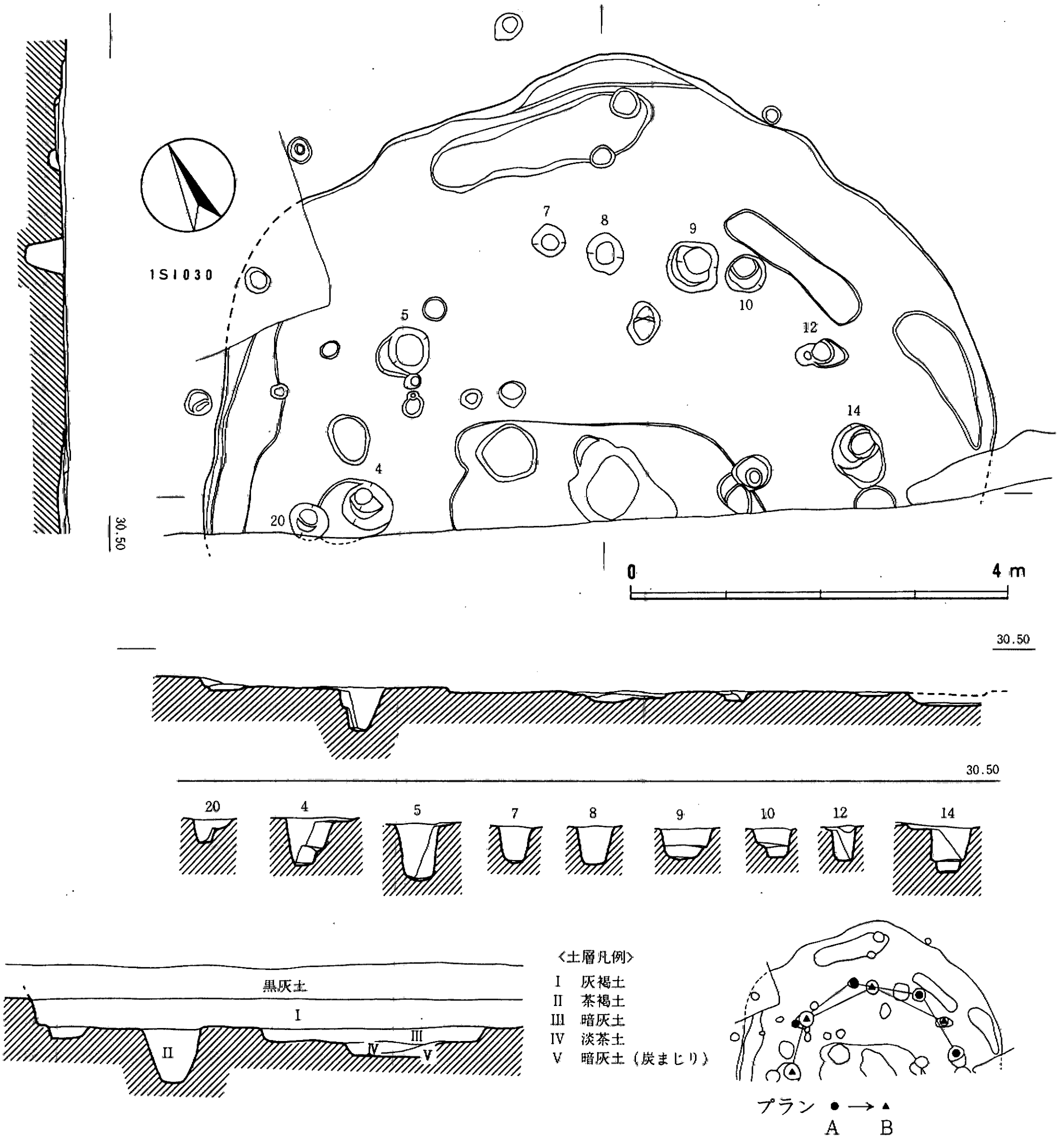


Fig. 15　原口遺跡1SI100実測図（1/80）及び土層模式図及び建替え想定図

びた土が見られる他は、近似した土色を呈している。

建物構造については、中央の２段からなる楕円形のピットを中心にその外側に深さ0.2〜0.3m程の柱穴群９個が囲み、そのすぐ外側に浅い溝状のものが切れぎれに廻っている。炭が入る中央ピットの壁面はやや焼けており、炉としての機能を考えている。柱穴と思しきピットは９個検出したが、その配列よりA・Bの２プランを想定している。調査がプラン全体の半分に止まっているので建て替えによるものとは断じ難いが、掘方のラインが東側で乱れておりその可能性を残している。両プランの柱間の長さの平均は、Aプランが2.1m、Bプランが2.2mと数値上では近似している。(Tab－２参照）床面は張床などの調整は見られず、壁溝もない。

	ピット番号	距離（m）
Aプラン	5－7	1.9
	7－10	2.1
	10－14	2.3
Bプラン	4－5	1.7
	5－8	2.3
	8－12	2.5

Tab.2　1SI 100　柱間計測表

埋土が薄く、出土した土器が少ないので時期を決めるのは難しいが、下限を弥生時代中期の初頭と考えている。

1SI 200（Fig. 16　Pla. 4）

1SI 200は1SI 100の北東約10mにあり、プランの西半分は調査区外へ延び、さらに検出した北半分は後世の削平を受け、柱穴のみの存在となっている。また、プラン中央を北東方向に現在の水田の水路が流れていた。

掘方のプランは円形で、復原される直径は約10.5mの規模である。深さはよく残存する南側で、プラン検出面から床面までが約0.1m程度しか遺存していない。

埋土は淡茶灰色土一層で、柱穴には色調が近似した淡灰色土が堆積していた。

建物構造は、No.31、32のピットを中心に深さ0.3〜0.5mのピット（柱穴）群が円形に広がり、その外側に深さ４〜５cm程の浅い溝状のものが廻っていた。掘方の外側には関連するようなピット等の遺構は認められなかった。中央にあるピットNo.31と32は、直径0.8m、深さ0.2m程の浅いピットの下層にNo.32が、また、それらを切るようにNo.31が作られている。これらピットから焼土、炭等は検出されなかった。この他に28個の主要なピットを検出しているが、それぞれの配置を考え15個のピットを用いA・B・Cの３つのプランを想定してみた。Aプランの柱間距離の平均は2.7m、Bプラン2.7m、Cプラン2.7

	ピット番号	距離（m）
Aプラン	37－23	2.3
	23－25	2.3
	25－38	3.1
	38－9	3.0
Bプラン	29－25	2.7
	25－1	2.9
	1－6	2.5
	6－11	2.7
Cプラン	28－24	2.5
	24－26	2.7
	26－4	2.7
	4－10	2.8

Tab.3　1SI 200　柱間計測表

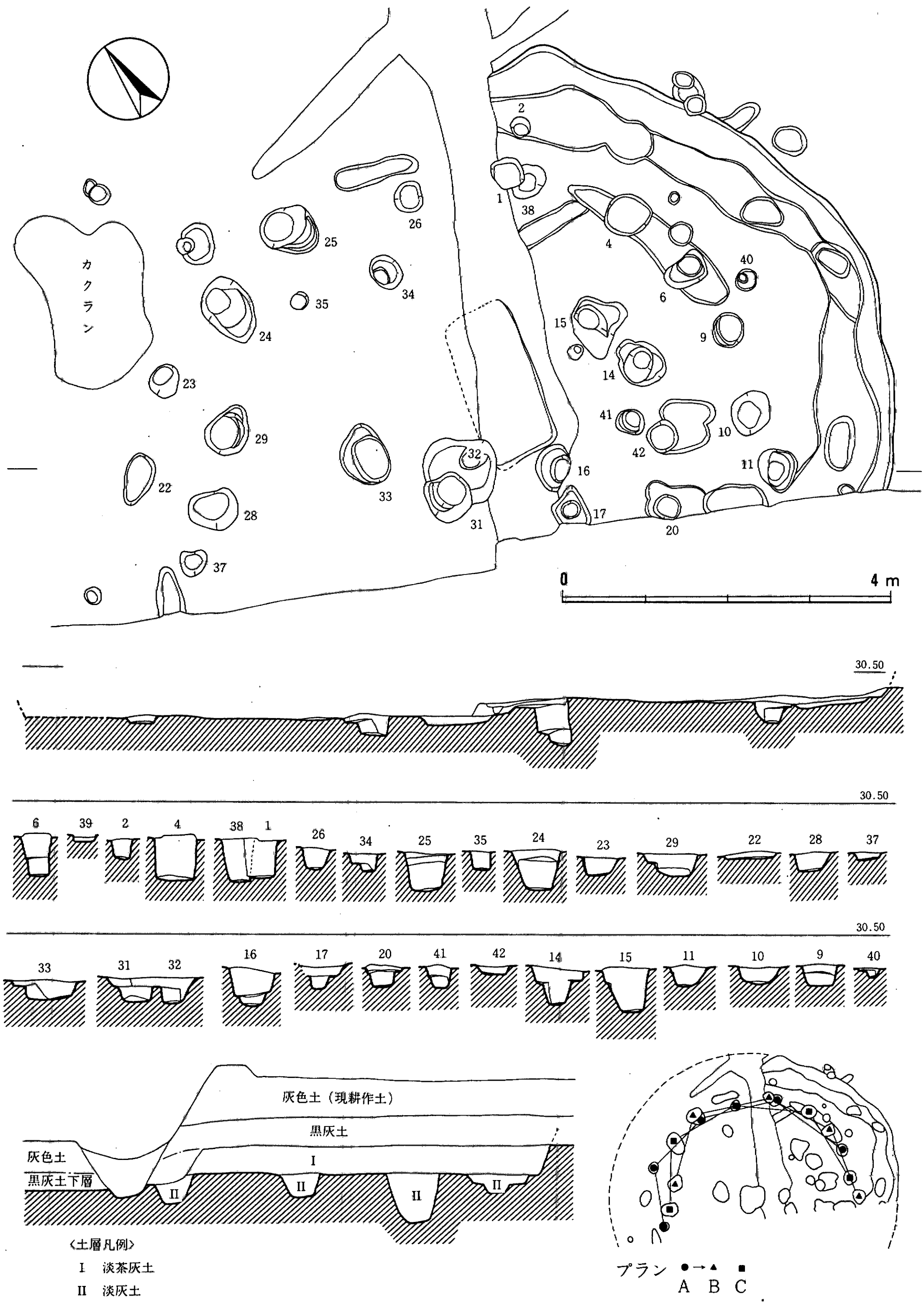


Fig.16 原口遺跡1SI200実測図（1/80）及び土層模式図及び建替え想定図

mで奇しくも近似した数値を示している。(Tab. 3) センターピットに切り合いが認められることから建て替えを意味するものなのかもしれない。この場合、切り合いからAプランはBプランに先行するものである。そのほか、貼床等の床面の調整はない。壁溝はそれと考えられるものが床面の残存する部分に廻っているが、幅広で浅く、既知のいわゆる壁溝とは異っている。

出土した土器より、この住居の存続の下限は1 SI 100と同じ頃の弥生時代中期初頭頃と考えられる。

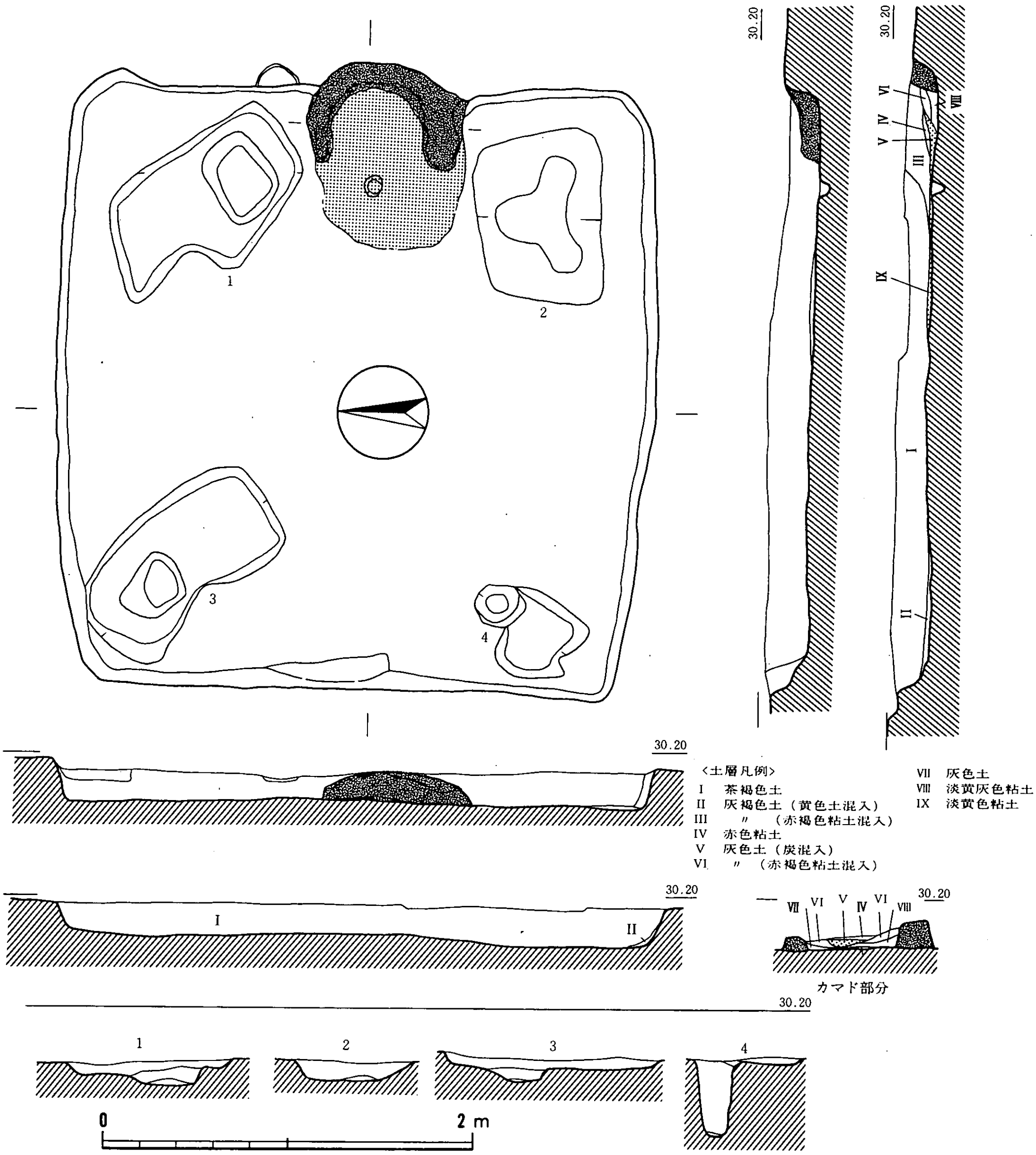


Fig.17 原口遺跡1SI030実測図（1/40）

1 SI 030（Fig. 17　Pla. 5）

1 SI 030はC区の北西部にあり、1 SI 040に近接している。

掘方のプランは方形で、規模は南北3.2m、東西3.2m、床面まで最高0.30mの深さを残している。東辺の中央に竈が設けられている。本遺構の掘方は弥生時代の住居跡1 SI 100を切っている。

埋土は大きく3つに分けられる。まず竈本体のある東側からゆっくりと崩壊が始まり（Ⅲ～Ⅷ層）、その後西側から早いスピードで赤褐色土（Ⅰ層）が流入し、一揮に掘方が埋っている。

建物構造については、主柱穴と思われるような明瞭なピットは検出されず、床面では四隅に深さ10cm程の浅い窪（Fig. 17　1～4）のみが検出されている。床貼り等の床調整は特に認められないが、西側壁面の中央に掘方整形時の掘り残しが認められる。

竈は東側壁面の中央に掘方から少し張り出すように設けられ、検出時には体部のみが馬蹄形に残存していた。前庭部中央に直径約10cm、深さ10cm程の小ピットがある。竈の体部は黄褐色の粘土で築かれ、その崩壊土は床面の広い範囲にわたって散乱していた。（Fig. 18）

出土した遺物は須恵器の坏のみで、そのほとんどが竈の崩壊土中で検出した。

この住居跡の時期は、出土した土器群から7世紀後半を下限としてそれに近い頃と考えられる。

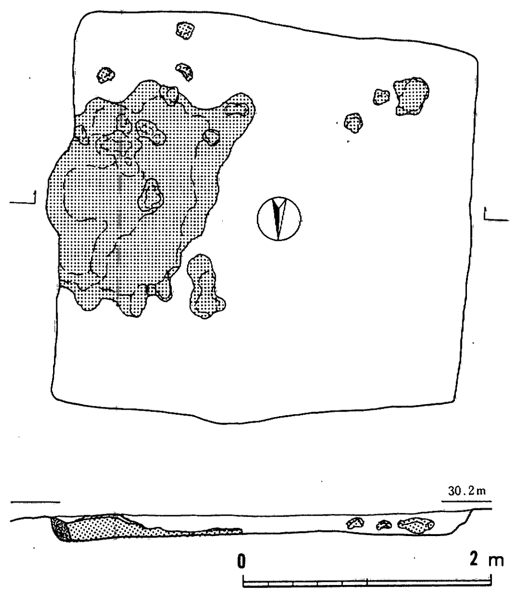


Fig.18　SI030カマド崩壊状況実測図

1 SI 040（Fig. 19　Pla. 5）

1 SI 040は、1 SI 030の北東約3mに隣接する。

掘方のプランは方形をなし、規模は南北3.7m、東西3.7m、床面までの最大の深さは約0.4mである。

堆積は大きく5つの段階を過て、西から東へ向ってゆっくりと埋没した状況を示している。北壁を1 SK 005などの土壙やピットに切られている。

建物構造は、主柱穴については四隅に浅い窪み状のピット（Fig. 19中の1～6）はあるものの、深さが10cmに満たないものもあり、にわかにこれらをもって主柱穴とは断じ難い。床面は張り床などの調整は認められない。

竈については、本体は残存していなかったが、北壁に近い床面で炭層とそれに乗る薄い赤褐色土を検出し、これら2層の広がり方から北壁やや東寄りに竈があったものと判断している。

出土遺物は土師器の甕形土器と須恵器の坏形土器が前記の炭層と赤褐色土から集中して検出されている。

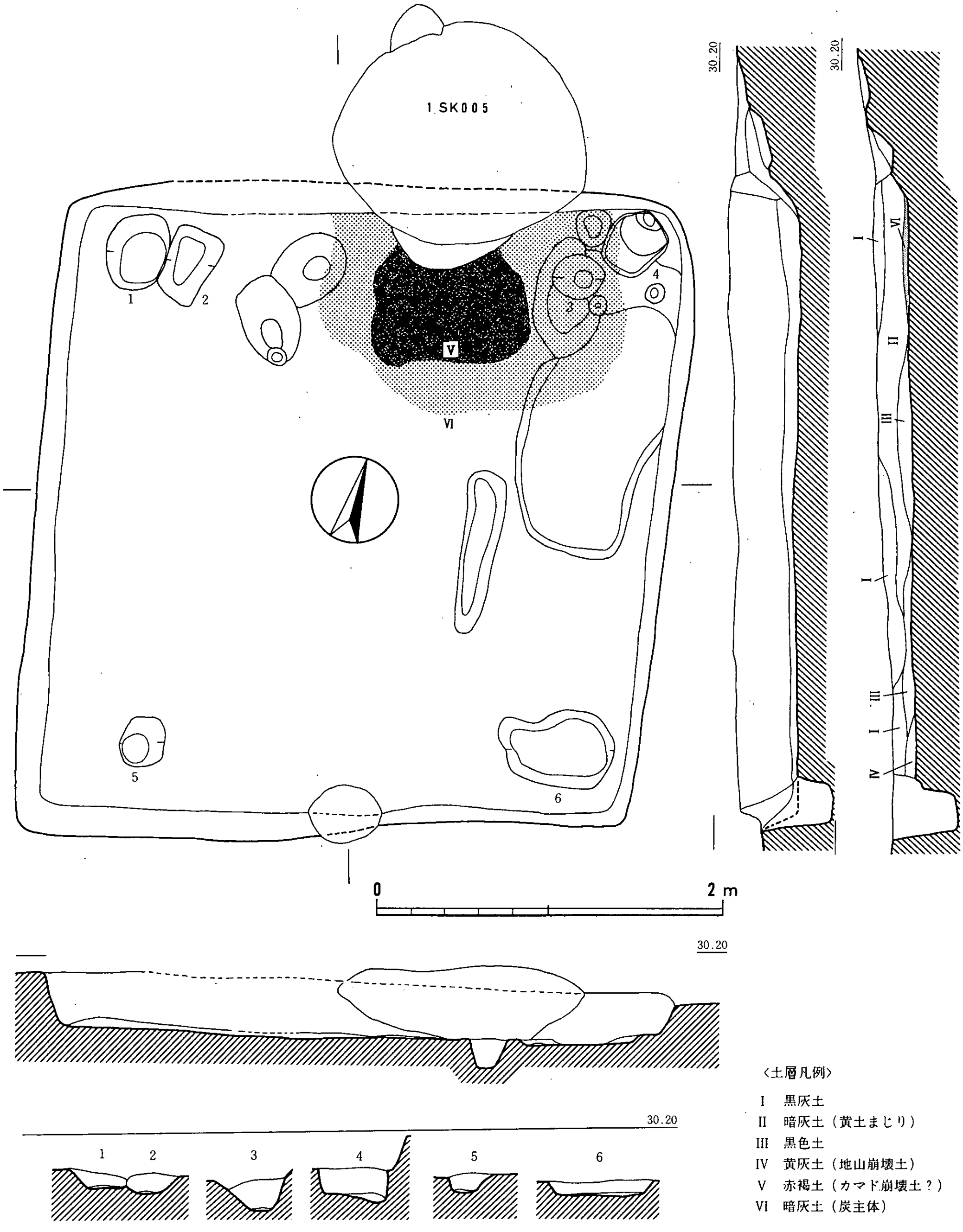


Fig.19 原口遺跡1SI040実測図（1/40）

この住居跡の時期は７世紀後半代に位置付けられる。（山村）

② 出 土 遺 物

１SI 100 出土遺物（Fig. 20, 21　Tab. 4　Pla. 13）

弥 生 土 器

出土した遺物、特に土器については図示し得るものはないが、土器片には肉眼で見る限り、器壁が薄く、砂粒が小さく褐色を呈すものと、やや器壁が厚目で、大きめの砂粒を多く含み、橙色系統の発色が見られる２種が認められる。後述する１SI 200同様、板付Ⅱ式から城の越式の両型式の土器を含むものと思われる。

土器片加工品（Fig. 20　１～７）

土器片加工品として７点図示したが、どれも縁辺の摩耗は著しく、明瞭に打ち欠き状況や使用による擦過状況を示すものはない。２、３、７については、研磨によるものと思われる擦過痕らしき部分が土器片の側面に見られる。

石　器（Fig. 21）

打製石器１点、磨製石器２点と30点近くの黒曜石や安山石のフレーク、チップ等が出土している。

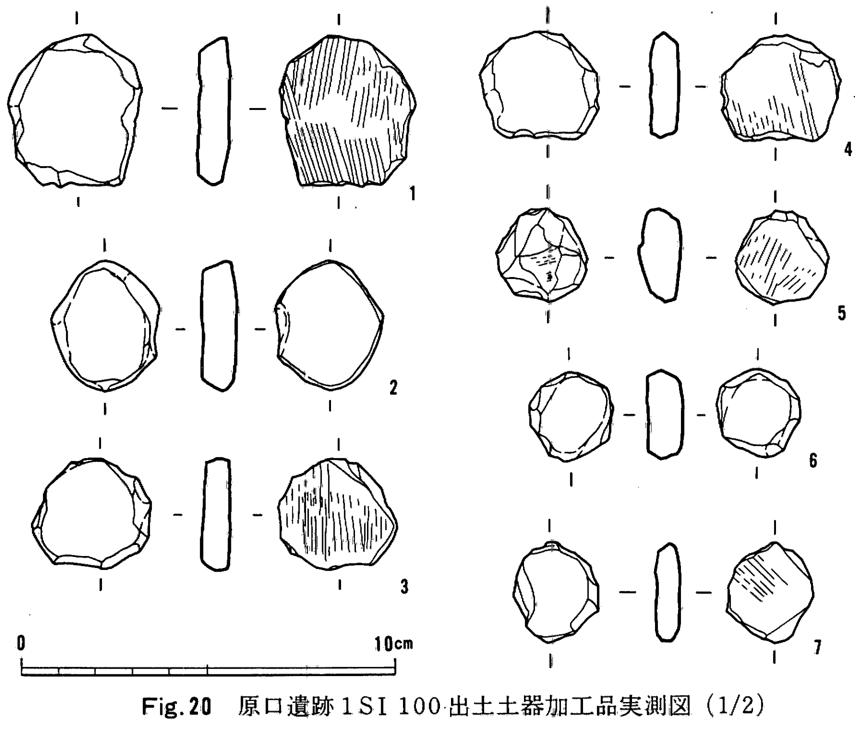


Fig.20　原口遺跡１SI 100出土土器加工品実測図（1/2）

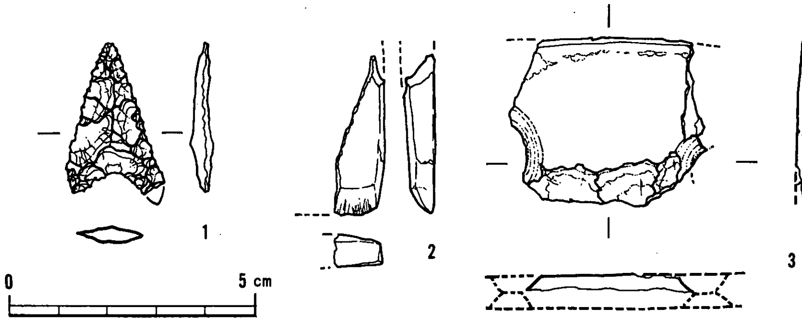
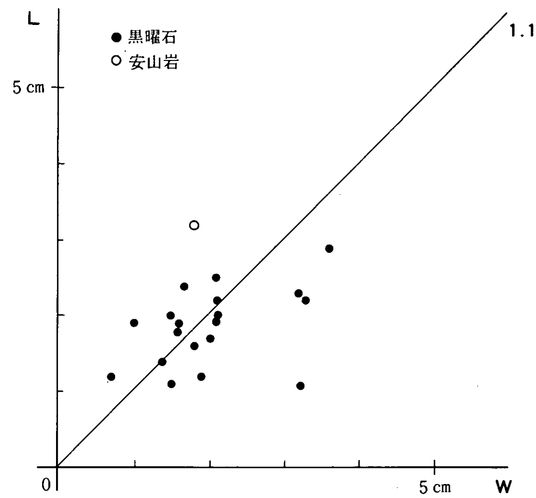


Fig.21　1SI100出土石器実測図（2/3）



Tab.4　原口遺跡1SI100出土剥片長幅比

打製石器（1）　安山岩を用いている。加工上の特徴としてフレークの大きな剝離のある面の縁辺を、石鏃完成時の左右どちらかの縁辺に利用している。仕上時の小剝離が多い辺と少ない辺という対比となって観察される。本例の場合、大きな剝離面が利用されている側は、図の左側に当る。

扁平片刃石斧（2）　圭質泥岩製。刃先に使用によると思われる擦過痕が見られる。

石庖丁（3）　頁岩を使用しているので水平に剝離欠損している。残存している部分は、紐穴間の背部を含む上位部分であり、背部は平面形で若干カーブを持っている。紐穴間の距離は約4㎝とやや広めである。図示した他に黒曜石と安山岩のフレークとチップがある。使用痕が明瞭に残るものや2次的な加工のあるものはない。これらのうちの打点が確定し得る20点の資料の長幅比を Tab. 4 に示した。黒丸は黒曜石、白ヌキ丸は安山岩である。　（山村）

1SI200 出土遺物（Fig. 22, 23　Tab. 5　Pla. 14）

弥 生 土 器（Fig. 22）

壺形土器（1）　最大径は胴部中央にあり、頸部がしまり肩がやや張る。口縁端部は短く屈曲し、丸く肥厚している。全体に器壁が厚く、特に底部は上げ底をしたように厚い。調整は内面は指圧痕が残り、外面及び口縁内面に12～15本/㎝の目の細いハケ目調整があり、胴中位から底部にかけて擦過に近いナデが施されている。器高14.8cm、口径9.7cm。器形を見る限り、板付系の要

素（肩張り、短く外反する口縁部等）は認められるが、器壁、特に底部が厚く調整もハケ目を用いるなど、単純に同列とは言い難いものがあり、また城の越式に出現する普遍的な形状をした壺形土器とも異なる。類例として、小郡市北内畑遺跡10号貯蔵穴、志摩町北新町遺跡Ⅱ－11トレンチ3層出土のものが掲げられる。

甕形土器（2～4）　2はいわゆる如意状口縁を持つもので、胴部上位に一条のヘラ描沈線を施している。口縁端部下に連続する浅い刻み目を有す。調整は内面上位に9本/cm、ハケ目調整が施されている。口径19.8cm、器高5.0cm＋α。1SK018出土の甕形土器（Fig. 31）と同一個体である可能性が大きい。3は口縁断面が鍬先形に近い三角形状を呈すもので、調整は外面に9本/cmのハケ目調整を施している。口径19.8cm、器高5.7cm。4は口縁部の外側上端部に刻目を持ち、断面形が方形に近い三角形を呈し、上部に平坦面を有す。胴部上位にヘラ描の一条の沈線を施している。2・3に比して器壁が厚く口径も大きい。調整は押圧形成後ユビナデをし、7～8本/cmのハケ目調査を施した後一条のヘラ描沈線をつけている。口径29.2cm、器高8.2cm。

縄 文 土 器（Fig. 22）

6は黒褐色を呈し口縁上端部に連続する刻目を有し、外面に三条のつまみ上げによる隆起線をもつ土器片である。形状的特徴より、縄文時代前期の轟式土器B－1類の範中に納まるものと考えている。混入遺物である。

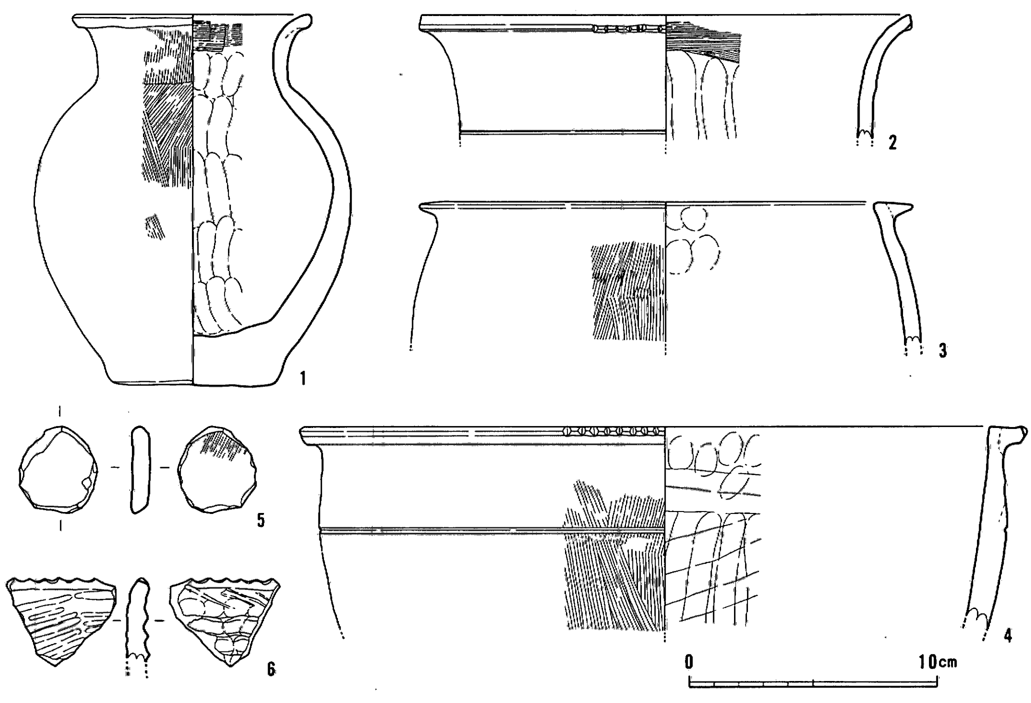


Fig.22　原口遺跡1SI200出土土器実測図（1/3）

土器片加工品（Fig. 22）

５は甕形土器の胴部の破片を打ち欠いて円形に加工したものである。割れ口に顕著な擦痕等は見られない。

石　器（Fig. 23）

紡錘車（２）　緑色の片麻岩を用いている。上面、縁辺部ともに研磨により形成されている。復原径5.2cm、厚さ0.5cm。

打製石斧（１）　緑色片岩の縁辺部に相当回数の打ち欠きを施すもので、選択使用された石材より所謂打製石斧である可能性を持つものである。長さ4.2cm、幅4.6cm、高さ1.3cm。

用途不明石器（３）　棒状の圭化木片であるが、両側のエッジには擦過のためと思われる光沢を帯びる部分が長く続き、両端の折断面はつぶれている。これは人為的に使用された結果と見なされるが、使用の目的は不明である。長さ24.7cm、幅5.0cm、厚さ2.5cm。

その他、多数の剥片が出土している。そのうち打点を特定できる14点については、Tab. 5に表で示した。　　　　（山村）

1SI030 出土土器（Fig. 24 Pla. 15 Tab. 7）

須　恵　器

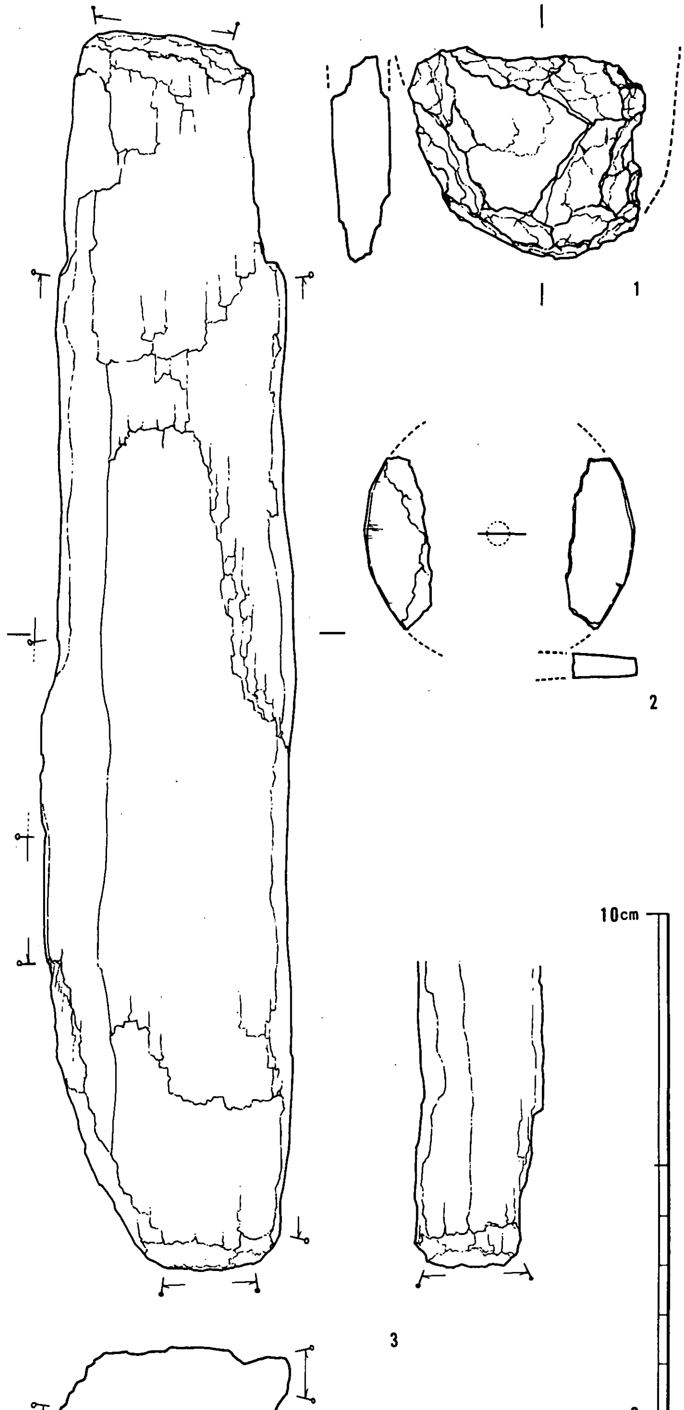
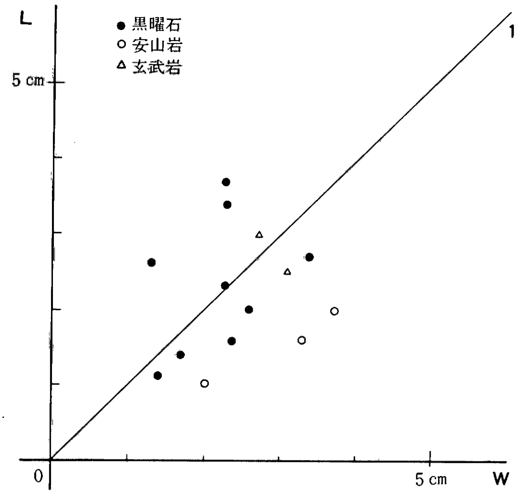


Fig.23　原口遺跡1SI200出土石器実測図（2/3）



Tab.5　原口遺跡１SI２００出土剥片長幅比

蓋ａ（１）　口径14.4cm、器高2.4cmを測る。天井部はヘラ切り後未調整で、体部はヨコナデである。天井部中央にヘラ記号がある。

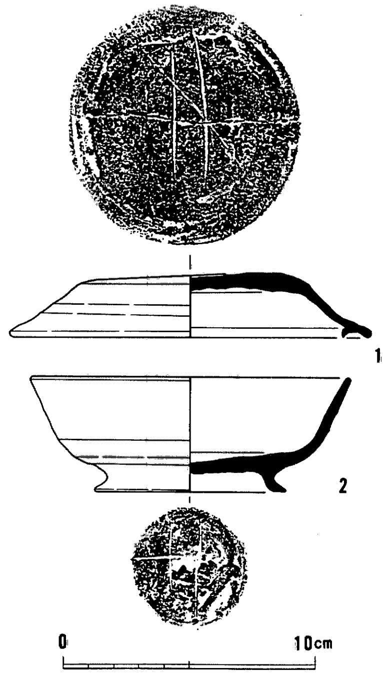


Fig.24　１SI０３０出土土器実測図（1/3

坏ｃ（２）　大きく歪んでいる。復原口径12.9cm、同器高4.5cm、高台径7.7cmを測る。底部外面にヘラ記号を有している。

（狭川）

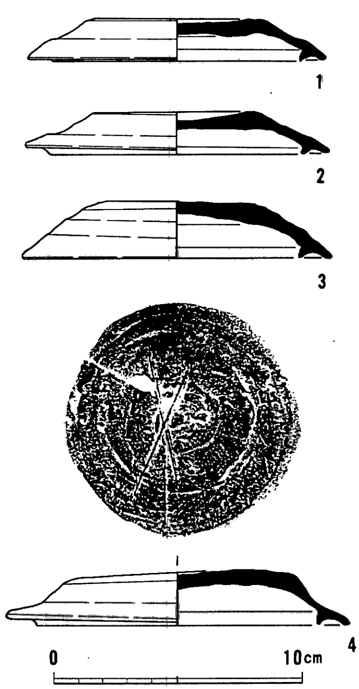
１SI040 出土土器

（Fig．25　Pla．15，16　Tab．７）

須　恵　器

全て歪んでいる。

蓋ａ（１～６）小型で、体部から口縁部にかけて真



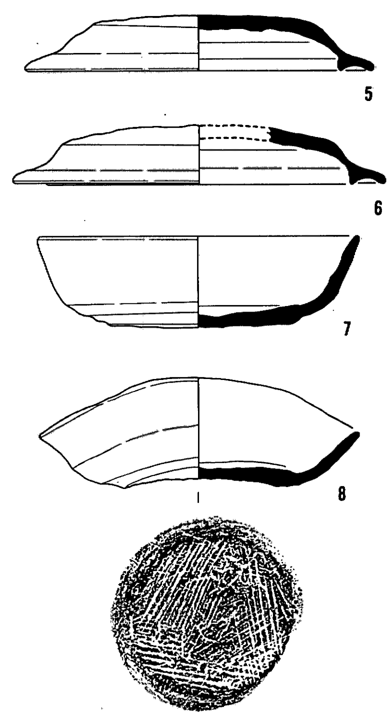


Fig.25　原口遺跡１SI０４０出土土器実測図（1/3）

直に作るもの（1～3）と、中型で口縁部の返り部付近で外方へ屈曲する体部を有するもの（4～6）の2タイプがある。小型のものは口径11.8～12.4cm、器高1.7～2.2cmを測る。天井部はヘラ切り後未調整、体部はヨコナデである。中型のものは口径13.6～14.8cm、器高2.1～2.2cm程度を測る。天井部はヘラ切り後未調整であるが、全てヘラ記号を有している。体部はヨコナデである。

坏a（7・8）　7は口径12.8cm、器高3.6cmで底部はヘラ切り後未調整である。8は大きく歪んでいるため正確な法量は得られないが、口径約10.5cm程度に復原し得るものである。（狭川）

(2) 掘立柱建物

① 遺　構

1SB035（Fig. 26　Pla. 2，3）

西側に庇を有する南北棟の建物で、南北3間（約5.80m）、東西1間（約3.60m）、庇1間（約1.50m）である。柱間は、南北列中央の1間が2.0m、両側は1.75mである。建物の南北軸はN－3°0′－Eである。柱穴は大きいもので径0.5m、深さは0.1～0.4m程度である。柱穴の埋土は黒灰色土。

1SB045（Fig. 26　Pla. 2，3）

1SB035とほぼ同規模の庇付建物で、南北3間（約6.0m）、東西1間（約3.30m）、庇1間（約1.50m）である。柱間は、南北列南端がやや広く2.10m、他は1.95mである。建物の南北軸はN－0°0′－Wである。1SB035と切り合っており1SB035が新しい。建て替えの可能性もある。柱穴は一部重複するが、その柱穴は2段を呈している。柱穴の規模は大きいもので径約0.5m、深さは0.1～0.4m程度である。柱穴の埋土は黒灰色土。

1SB055（Fig. 27　Pla. 2，3）

南北3間（約5.30m）、東西2間（約3.85m）の南北棟建物である。建物の南北軸はN－0°10′－Wである。柱間は一様ではなく1.60m～2.00mである。柱穴は径0.4m前後で、深さは北東隅の一穴を除きほぼ0.3m程度である。柱穴の埋土は黒灰色土である。

1SB065（Fig. 27）

南北3間（約4.90m）、東西2間（約4.00m）の南北棟建物である。建物の南北軸はN－8°10′－Eで、柱間は一様ではなく1.60m～2.20mである。柱穴は南辺の中央に径0.15cm内外、

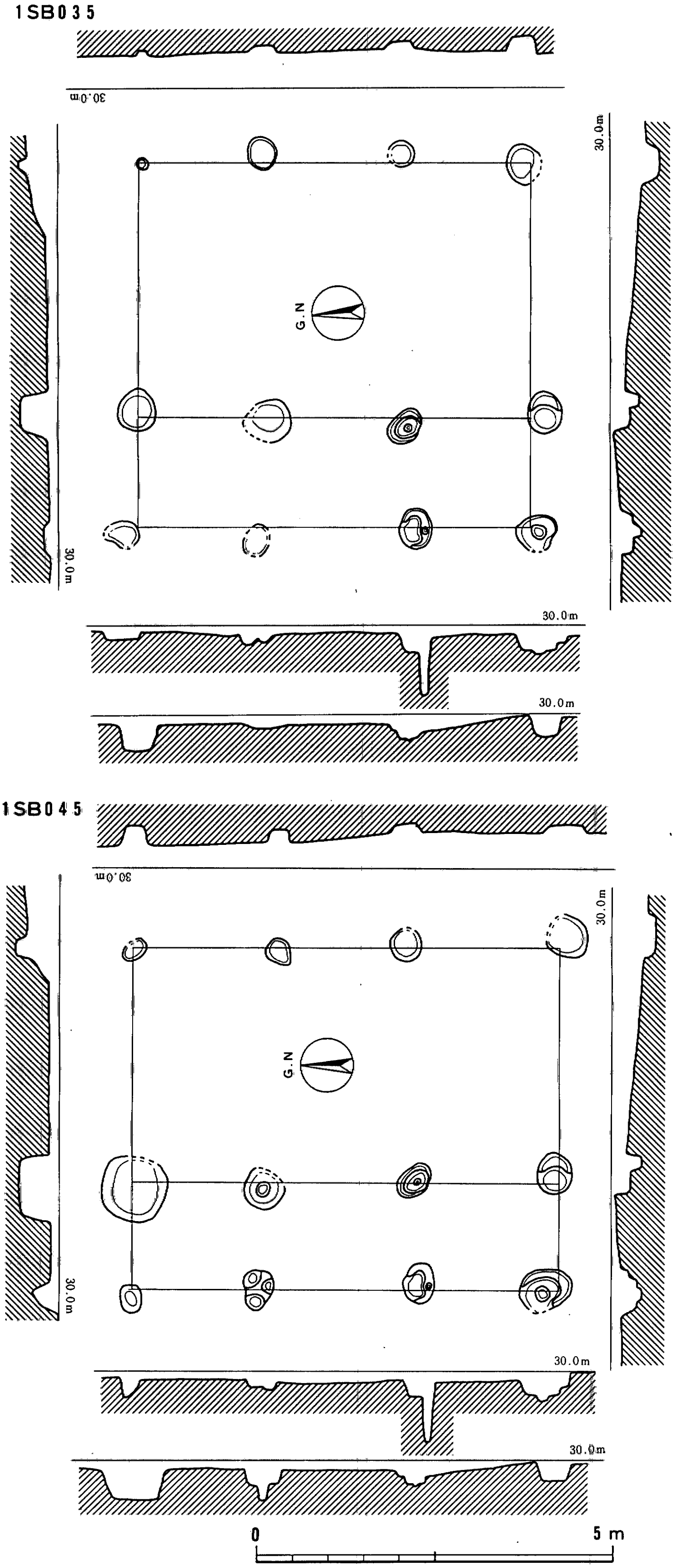


Fig.26　原口遺跡掘立柱建物実測図 I　(1/100)

深さ0.1〜0.15mの2個の柱穴を保有している。いずれか片方を用いていたか、両方の柱穴を用いていたのかは決定し得ない。他の柱穴は径約0.35m、深さ約0.2m程度であり、埋土は黒灰色土である。

1 SB 080 (Fig. 28)

南北1間（約2.50m)、東西2間（約2.80m）以上の東西棟建物である。建物の南北軸はN－1゜0´－Wで、東西方向の柱間は東から1.30m、1.50mである。柱穴は径約0.3m、深さ0.1〜0.3mを測る。埋土は黒灰色土である。

② 出土遺物

各建物の柱穴から少量の須恵器、土師器などの土器片を検出しているが、時期を決定できるような資料は見出されていない。

(3) 土　　　壙

検出した土壙状の遺構も住居跡群と同様C区に集中している。ここでは時期比

定の可能な9基について解説する。

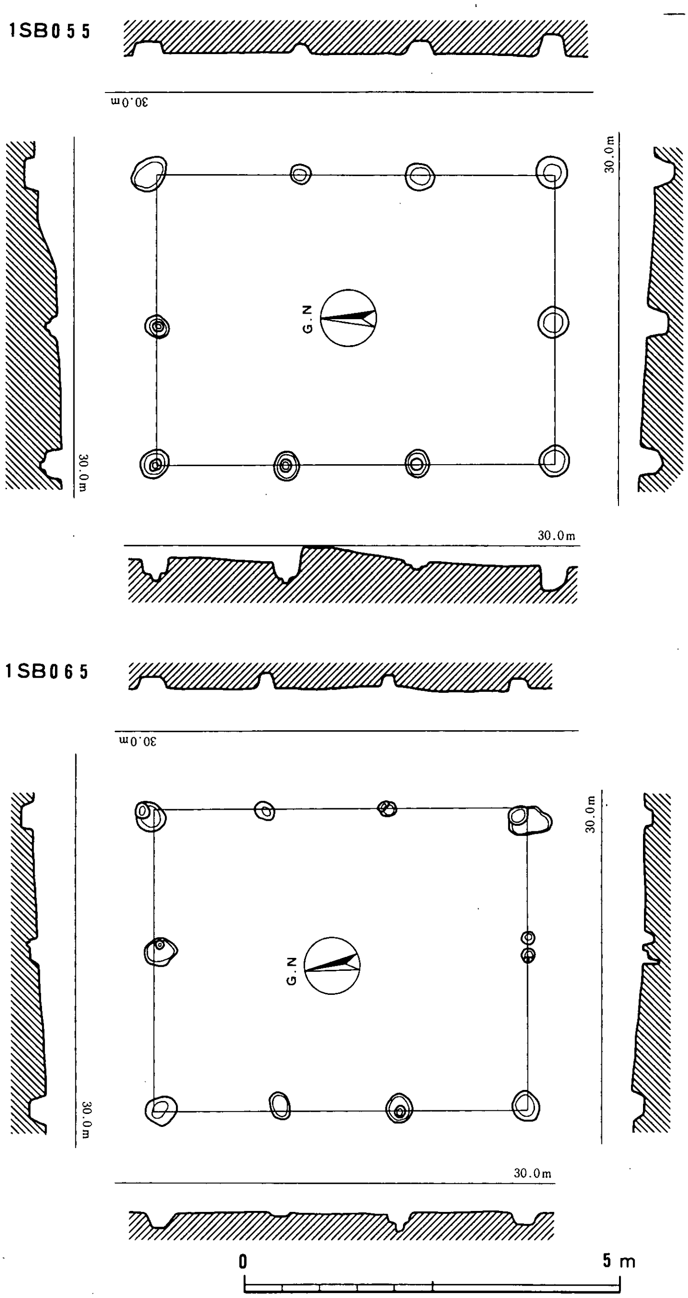


Fig.27　原口遺跡掘立柱建物実測図Ⅱ　(1/100)

① 遺　構

1 SK 005 (Fig. 29　Pla. 9)

1 SK 005はC区中央、1 SI 040を切る形で検出された。直径約1.4m、深さは検出面から1.5m程で、平面形は円形を呈している。土壙底部径は約0.7mで、上端部径の約1/2である。堆積は大きく2層に分かれ、図示した出土遺物は上位の層からまとまって出土したものである。これらの出土遺物から本土壙は埋没過程において廃棄行為に利用され、埋没時期の下限は8世紀中葉頃と思われる。さらに、その上限は切り合い関係にある1 SI 040 (住居跡) 出土土器の下限が7世紀後半～末頃であることから、これをもって1 SK 005の上限とすることが可能である。

1 SK 006 (Fig. 29　Pla. 9)

1 SK 006はC区の南側、1 SI100の南東約10mにある。平面形は南北方向に長い楕円形を呈し、長さ3.1m、幅1.5mで、検出面から底面までの深さは15～20cmであった。土層は単一で、遺物の出土量もごく少量である。弥生時代中期の所産であろう。

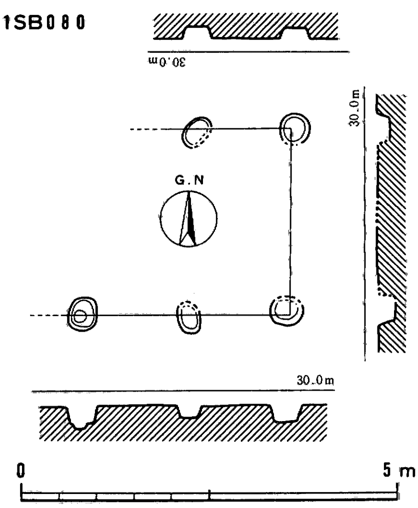


Fig.28　原口遺跡掘立柱建物実測図Ⅲ（1/100）

1 SK 007（Fig. 29　Pla. 10）

1 SK 007は、1 SK 006の北東約 3 mにあり、東西に長い楕円形を呈す。長さ1.4m、幅1.0m、遺構検出面から底までの深さ約0.4mである。土層は単一で、出土遺物は破片資料に限られ、弥生時代前期末頃から中期前半頃のものを含んでいる。

1 SK 010（Fig. 29　Pla. 10）

1 SK 010はC区の南側にあり、平面形は隅丸方形を呈し、長さ2.0m、幅1.7mで底面までの深さが約0.4mである。土層は粘性を持つ暗灰色土一層であり、植物遺存体などが見られた。出土した土器は小片ばかりで、8世紀中頃のものと思われる。

1 SK 015（Fig. 30　Pla. 11）

1 SK 015はC区の中央 1 SI 100の北側 3 mに近接し、プランの西側は調査区の外に出ている。平面形は東西に長い楕円形を呈し、長さ1.5m以上、幅1.2m、深さは北側の深い所で0.9mを測る。土層は北側の深い部分とその上位とで分かれる。上位層から弥生時代前期後半頃の土器の細片が出土している。

1 SK 018（Fig. 30　Pla. 11）

1 SK 018はC区の 1 SI 200の南に隣接し、南北に長い楕円形を呈す。長さ2.2m、幅1.5m、深さ0.3mで中央が窪んでいる。出土遺物は土器片に限られ、弥生時代中期中葉を下限としている。

1 SK 020（Fig. 30　Pla. 12）

1 SK 020はC区の中ほど 1 SI 100の東側約 3 mにある。隅丸の長方形をなし、北東隅に円形の窪みがある。長さ3.6m、幅2.2m、窪みの底までの深さは約0.4mであった。土層は窪みに堆積した灰色土とその上位の茶褐色土の 2 層に分れる。出土した遺物は茶褐色土層からのもので、弥生時代中期前半代の所産である。東側で 1 SK 121を切っている。

1 SK 088（Fig. 30）

1 SK 088はC区の北、1 SI 200の北約 3 mにあり、東西に長い楕円形を呈している。長さ1.2m、幅0.9m、深さ約0.25m。土層は単一で、弥生時代中期前半頃の土器片が出土している。

1 SK 121 (Fig.30　Pla.12)

1 SK 121はC区中ほどにあり、1 SK 020に切られている。長さ1.6m、幅1.7m、深さ0.2～0.3m程の方形をなすものである。土器の出土はなく、打ち欠きのある円形の石製品が1点出土している。

② 出土遺物

1 SK 005出土遺物 (Fig. 31　Pla. 17)

須　恵　器

蓋c（1）　焼成は良好で灰白色を呈す。胎土は精製されている。口径14.6cm、器高1.9cm＋α。

坏c（2）　焼成はやや甘く、色調は外面で茶灰色、内面で灰白色を呈す。胎土は精製されている。底部切離しはヘラ切りのままである。口径15.1cm、器高4.0cm。

土　師　器

坏d（3）　胎土は精製土で多少長石、石英粒等の砂粒（以下砂粒）を含む。焼成は良好で焼き締っている。暗橙色を呈

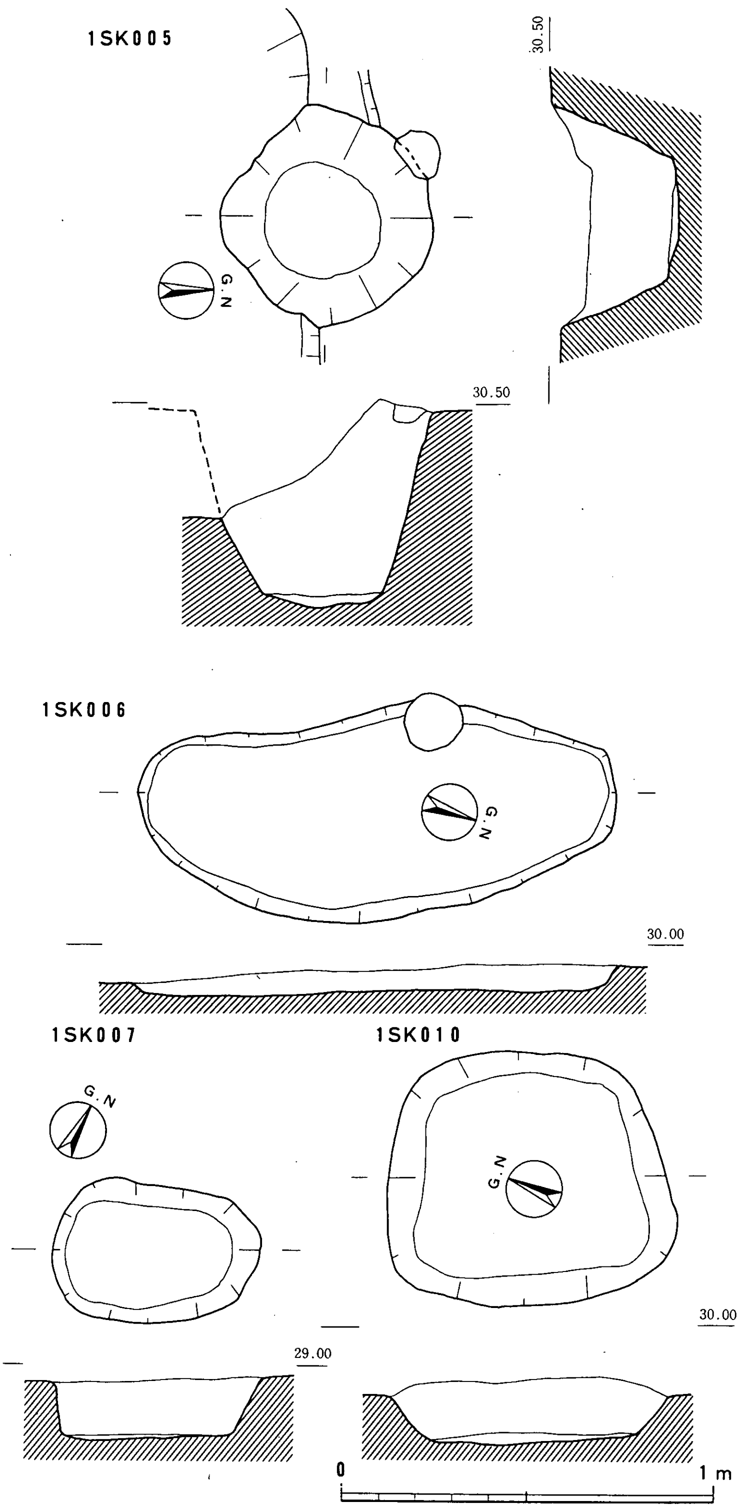


Fig.29　原口遺跡土壙実測図Ⅰ（1/50）

す。調整は内面全面と外面は体部までにミガキａが施され、外面体部以下は回転によるケズリが施されている。回転は左廻りである。口径16.8cm、器高4.0cm。

大坏ｃ（4） 胎土は精製されているが長石、石英粒を含むやや粗いものである。焼成は良好。調整は内面にミガキａが施される。底径17.0cm、器高1.4cm。

甕ａ（5） 胎土は砂粒を多少含み茶灰色を呈す。焼は良い。内面には上方へのシャープなケズリが入る。口径15.4cm、器高7.0cm。

1 SK 006 出土遺物

（Fig. 31 Pla. 9）

弥 生 土 器

壺（6） 砂粒をやや多く含み、淡黄灰色を呈す。器面の残存状況が悪く調整の詳細は不明。底が厚くシャープさを欠く。底径9.0cm、器高4.0cm＋α。

土器片加工品

7・8は甕型土器の胴

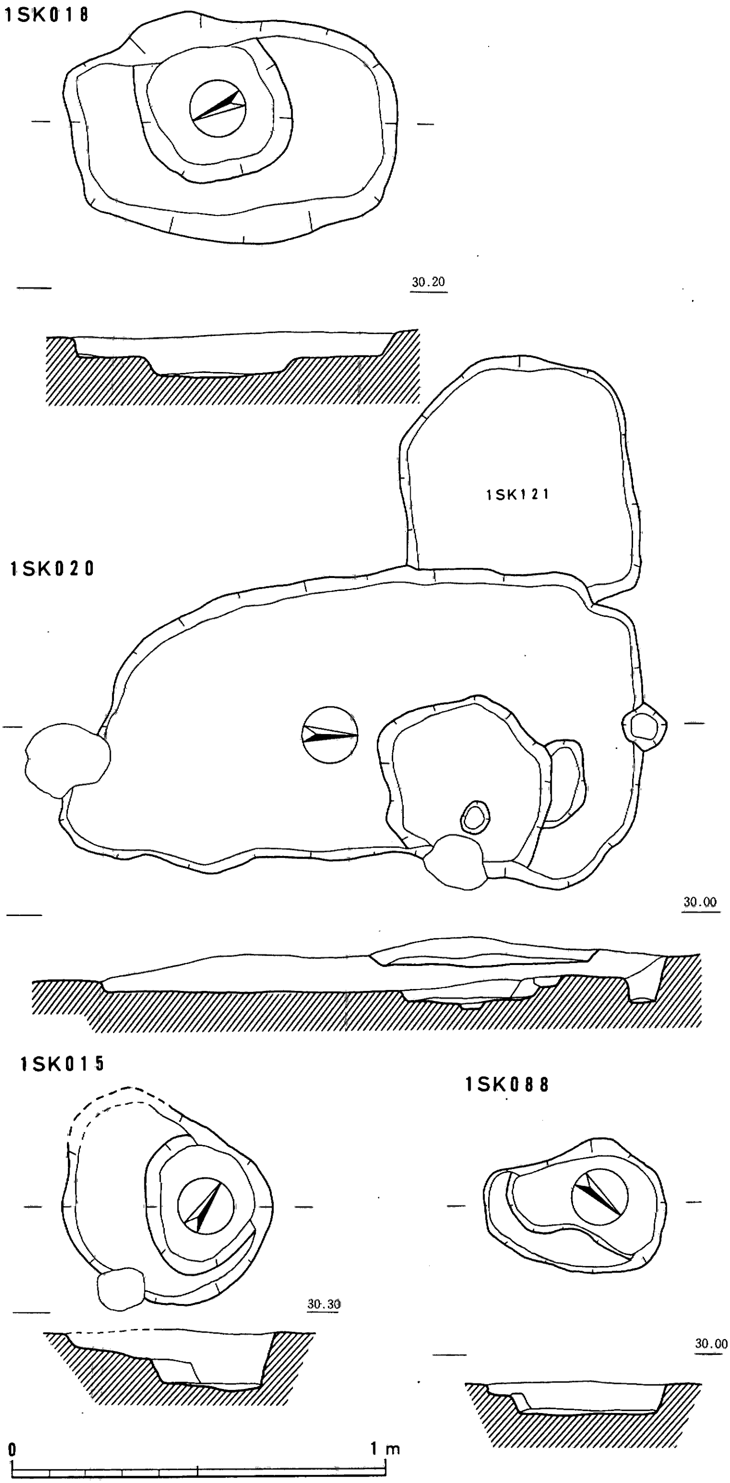


Fig.30 原口遺跡土壙実測図Ⅱ（1/50）

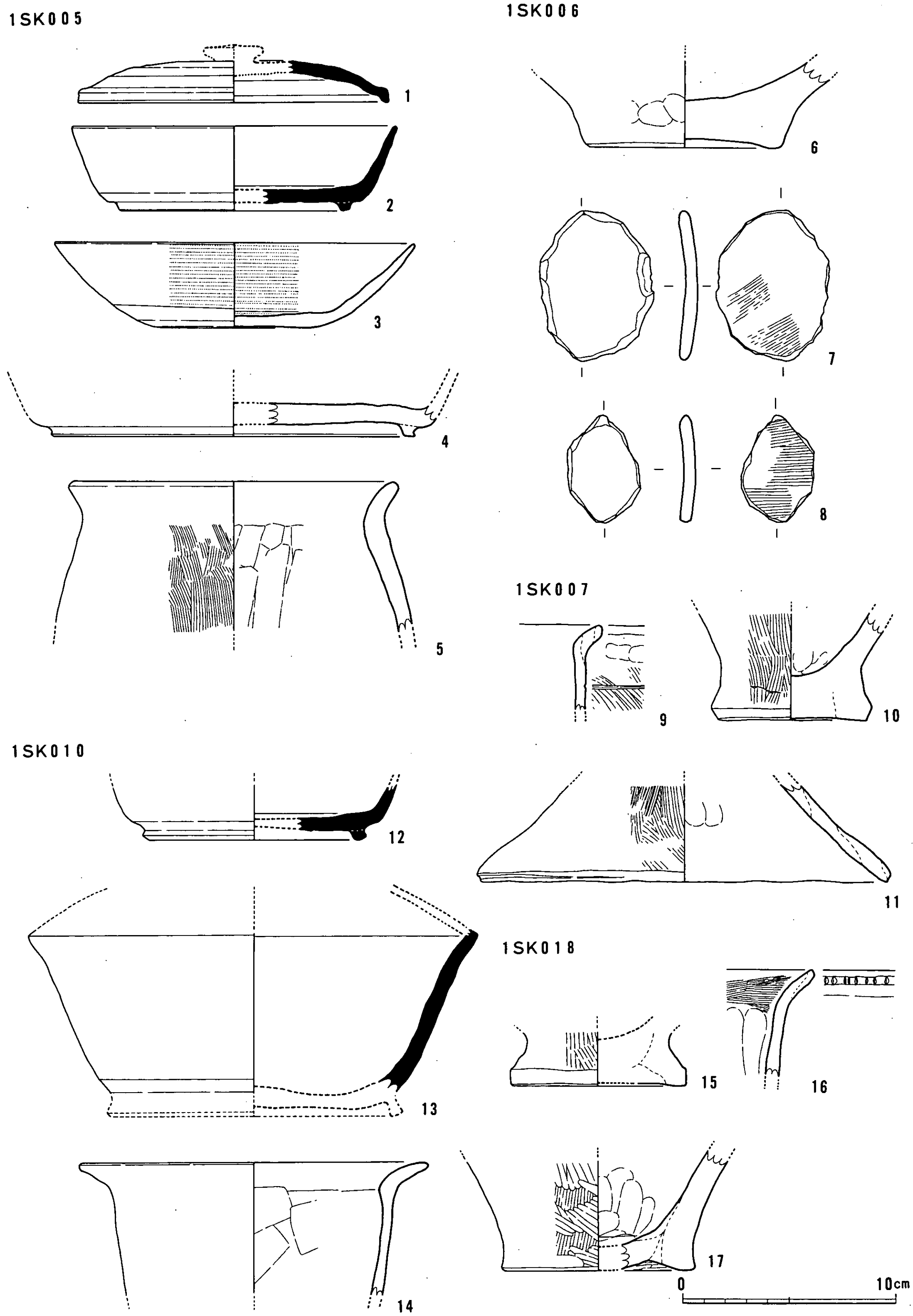


Fig.31　原口遺跡土壙出土土器実測図Ⅰ（1/3）

部片を打ち欠いているもので、割れ口の一部に擦過痕らしきものが観察される。

石　器（Fig. 33）

砥石（1）　目のやや荒い砂岩で、一面が利用されている。長さ3.7cm、幅3.7cm、厚さ1.8cm。

1SK007 出土遺物（Fig. 31　Pla. 18）

弥生土器

甕（9・10）　9は如意口の範中で捉えられるが、体部から口縁部への屈曲は強い。胎土には大きな砂粒を含まず橙色を呈す。外面の体部上位に一条のヘラ描沈線を施す。板付Ⅱ式でも新しい段階のものである。10は底部片である。体部と底部の境でくびれ、底部は中実の上げ底である。大きめの砂粒を含み明橙色を呈す。口径7.6cm、器高5.0cm＋α。城の越式に属す。

高坏（11）　11は高坏の脚部の据に当る部分である。胎土には大きめの砂粒を含む。焼成は良好で明橙色を呈す。外面にはハケ調整が、また内面には丁寧なナデが施される。脚端部の形成は不十分で一定していない。

1SK010 出土遺物（Fig. 31　Pla. 17）

須　恵　器

坏C（12）　胎土は精製されており焼きはやや甘く灰白色を呈している。調整は底部外面はヘラ切り後ナデが施されている。体部と底部の境は明瞭である。底径10.5cm、器高2.7cm＋α。

壺b（13）　胴部下半の破片である。条19SD080下層のものを範とする。胎土は精製され混入物が少なく、焼成も良好で黒灰色を呈す。調整は外面下位のケズリ部分は上からナデ消されている。胴部径20.1cm、器高7.6cm＋α。

甕a　胴の張りがない器形を呈す。胎土は砂粒を多く含み、焼成も甘い。口径26.2cm、器高6.2cm＋α。

1SK018 出土土器（Fig. 31　Pla. 18）

弥生土器

甕（15～17）　15は如意状口縁を持つもので、胎土は混入砂粒も少なく、焼成は良好で、色調は明褐色を呈す。調整は内面上位に9本/cmの目の細いハケ目調整を施している。外面は口縁下端部に連続する刻面を有する。板付Ⅱ式に相当する。16は底部片である。胎土は砂粒を多く含む荒いもので、焼成は良好。明黄褐色を呈す。体部と底部の境は強くくびれている。底は中実の上げ底で側面に幅1cm弱の平端面を持っている。底径8.2cm、器高2.5cm。弥生時代中期、城の越式に相当する。17は底部片である。大きな砂粒を多く含む。焼成は良好で明黄色を呈す。底部から体部にかけてはゆっくり外反しながら立ち上がる。外面の調整はハケ目調査後にケンマが施され

ている。ケンマは底部外面にまで及んでいる。底径9.0cm、器高5.5cm。弥生時代中期須玖式の範中である。

1 SK 020 出土遺物（Fig. 32, 33 Pla. 10）

弥 生 土 器（Fig. 32）

壺（1） 頸部から口縁部にかけての破片である。ゆるく外反する口縁で、端部側面に突帯様の中央がわずかに窪む平坦面を持つ。胎土は小さな砂粒を多少含み、焼成は良焼で暗褐色を呈す。調整は内外面に横方向のミガキが施される。口径16.8cm、器高6.3cm。弥生時代前期末から中期初め頃にあっては通有の形状ではない。類例に小郡市三沢東古賀遺跡の1号住居跡（弥生時代中期前半）出土の壺が掲げられる。

甕（2～4） 2は断面が三角形を呈す口縁部の破片である。大きめの砂粒を多少含む。焼成は良好で明橙色を呈す。弥生時代中期前半の城の越式に属す。3は鍬先状に近い折り曲げ口縁を持つもので、口縁端部の調整がユビオサエのままで均一でなく波を打っている。胎土は大きめの砂粒を多く含み、焼成もやや甘く、明褐色を呈す。4は上げ底状の甕の底部片で、底径は6.6cm。器高3.3cm＋α。弥生時代中期前半の城の越式に属すものである。

土器片加工品（Fig. 32）

5～7は甕型土器の体部片を利用加工したもので円形を呈す。明確な擦過痕などはない。

石 器（Fig. 33 Pla. 25, 26）

扁平磨製石鏃（2） 頁岩を用いたもので長さ3.7cm、幅1.5cm、厚さ0.2cm。二等辺三角形を呈し、刃部の砥きは鋭い。

二次加工品のある剝片（3） 安山岩の横長剝片の片側に連続する小剝離が見られる。長さ4.5cm、幅7.0cm、高さ1.7cm。

砥石（4） 目の細かい砂岩を用い、2面が使用されている。中央は窪んでい

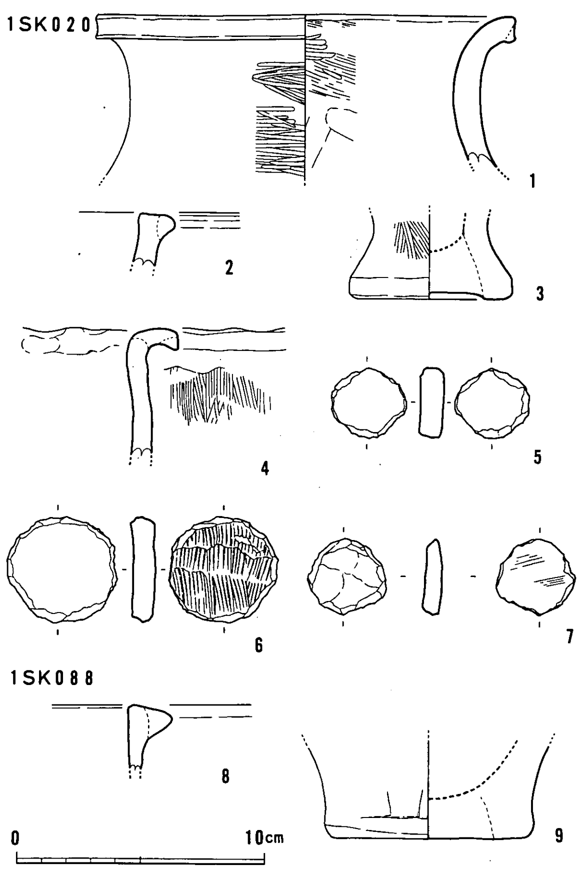


Fig.32 原口遺跡土壙出土土器実測図II（1/3）

る。長さ4.2cm、幅5.5cm、厚さ2.5cm。

1 SK 088 出土土器(Fig. 32 Pla. 19)

弥生土器

甕(8・9) 8は口縁の断面形が三角形を呈するもので、胎土はやや小さめの砂粒を多少含み、焼成は良好で明橙色を呈す。弥生時代中期前半の城の越式に属す。9は底部片であるが、底部から体部へとゆっくり外反しながら立ち上がるもので、外面にハケ状工具によるナデがみられる。胎土は小砂粒を多く含み、焼成は良好。淡橙色を呈す。底径8.4cm、器高3.7cm。

1 SK 121 出土遺物(Fig. 33 Pla. 26)

石器

用途不明石器(5) 緑色の片麻岩を用いたもので、周辺から打ち欠いて円形に仕上げている。長さ6.1〜7.3cm、厚さ0.9cm。

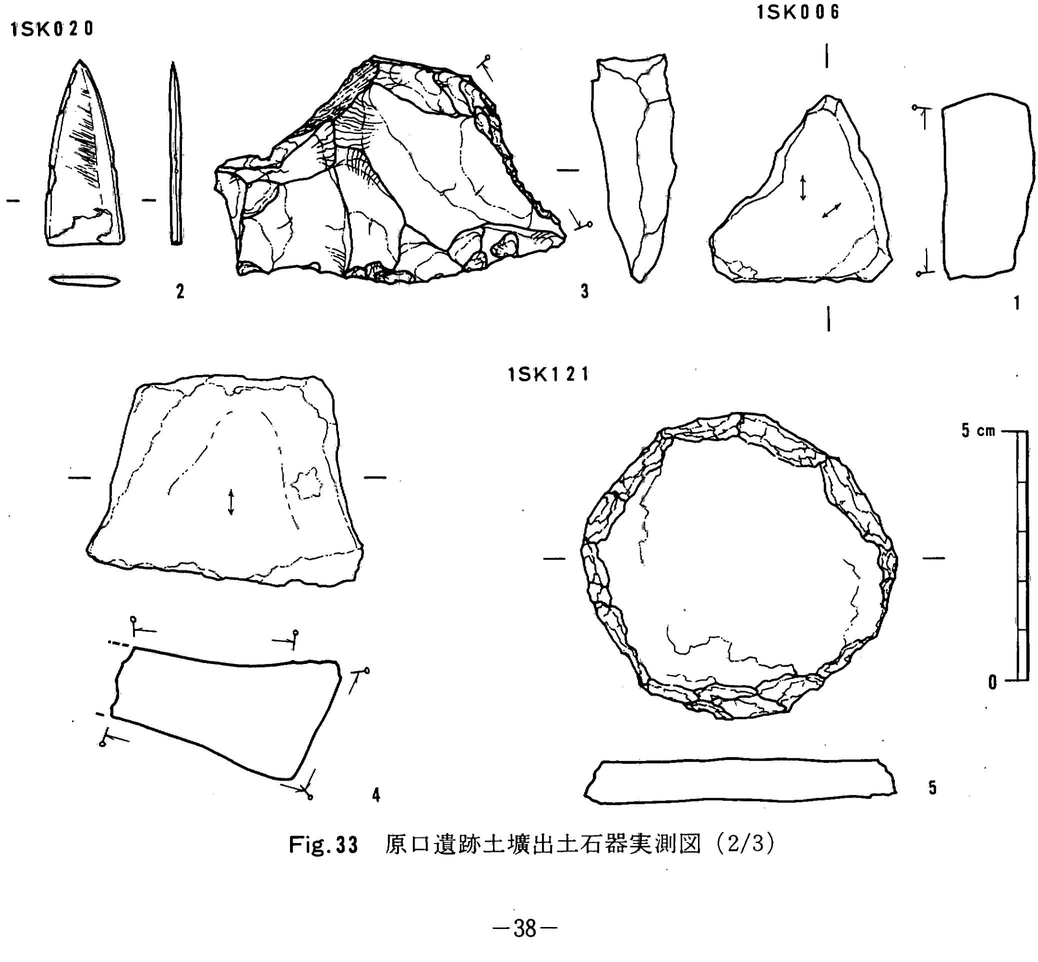


Fig.33 原口遺跡土壙出土石器実測図(2/3)

(4) 溝

① 遺 構

1 SD 001 (Fig. 13 Pla. 2)

検出長27.3mで北側調査区外に続く。幅は最大で3.9m、最小で0.7mを測り溝肩部はかなり乱れている。深さは0.1～0.3m程度で底は凹凸が著しい。レベルの判断では水流の方向は断定できない。溝は直線的ではないがほぼN－13°－E前後の振れをもっている。埋土は赤褐色粘質土である。C区西端で検出した。遺物は8世紀代の須恵器を若干検出したにとどまる。

1 SD 115 (Fig. 13)

C区の掘立柱建物1 SB 055の東側に存在する。長さ約18.9m、幅0.4～0.5m、深さ0.05m内外で、わずかに蛇行するが平均的な振れはN－5°25′－Wである。溝はわずかに南に低いが、底は凹凸が著しい。埋土は掘立柱建物と同じ黒灰色土である。

1 SD 218 (Fig. 13 Pla. 2, 3)

C区にある黒灰色土の凹状遺構1 SX 050に取り付く溝で、長さ約9.0mを測る。幅は溝と1 SX 050が取り付く付近で約1.3mあるが徐々に狭くなり、0.4m程度の部分もある。深さは約10cmで1 SX 050に向かって流れていたものと考えられる。1 SX 050との間に切り合い関係は認められず、同一の埋土であり一連のものと推定される。

1 SD 150 (Fig. 14 Pla. 2)

A区の溝で、長さ24.5m、最大幅0.4m、深さ0.05～0.1mのわずかに蛇行する溝である。平均的な方位はN－10°35′－Eを示す。溝埋土は灰褐色系の土である。調査前の水田畦畔と近い方位性をもち、畦畔に伴うものである可能性もある。

1 SD 152 (Fig. 14 Pla. 2)

長さは約5m、最大幅0.4m、深さ0.05m内外である。埋土は1 SD 150に近似する。

1 SD 154 (Fig. 14 Pla. 2)

B区にあり、長さ17.2m、最大幅0.75m、深さ0.15m内外で、南東側が低い。方位はN－34°15′－Eで、北西端でわずかに西に折れ消滅する。埋土は黒灰色土である。

1 SD 160 (Fig. 14 Pla. 2)

A・B区にまたがる溝で、長さ48.1m、最大幅1.1m、深さ0.15m内外で南東側が低い。平均的な方位は、N－34°00′－Eで、1SD154とほぼ並行する。埋土は黒灰色土である。溝の中央部で南西方向にわかれるが、直交しない。

1SD175（Fig. 14　Pla. 2）

1SD160の南東端で、攪乱溝の下層で検出したもので、長さ7.1m、最大幅0.5mである。1SD160とほぼ直交する。埋土は黒灰色土。

1SD170（Fig. 14　Pla. 2）

1SD160、154と切り合い、1SD170が古い。長さ28.0mを検出した。最大幅0.65m、深さ0.05～0.1m内外である。溝は1SD160と交叉するあたりで折れ、それより以西では蛇行しているが、以東ではほぼ直流する。蛇行する部分の平均的な方位はE－17°05′－S、直流する部分はN－01°15′－Wである。埋土は黄褐色土である。遺物は底部糸切りの小皿の小片を検出したにとどまる。

以上の溝の他、A・B区はいくつかの溝の痕跡がある。埋土による区分では黄褐色土埋土の1SD178、黒灰色土埋土の1SD179、灰褐色土埋土の1SD151がある。

② 出土遺物

1SD150 出土土器（Fig. 34　Pla. 21）

龍泉窯系青磁

埦（1）　高台径6.4cmで見込みに花文のスタンプがある。釉は底部外面を除き高台内側から体部にかけて厚めにかかる。

白　磁

埦a　小片のため傾きや法量は求め得ないが、釉は均一に薄くかかり胎土は不純物をほとんど含まない白色を呈す。森田氏分類のE群に属する可能性がある。

1SD154 出土土器（Fig. 34　Pla. 21）

白　磁

皿（2・3）　両者ともⅨ類である。

1SD160 出土土器（Fig. 34　Pla. 21）

土　師　器

坏ａ（４）　口径12.2cm、器高2.5cm、底部8.6cmで、底部は糸切りで、内底にはナデを施す。XIX ～ XX 期。

1 SD 152 出土土器
（Fig．34　Pla．21）

陶　器

擂鉢（５）　復原口径28.3cm、９本で１単位の節目をもつ。江戸中期頃の備前焼とみられる。

(5) その他の遺構と遺物

① 遺　構

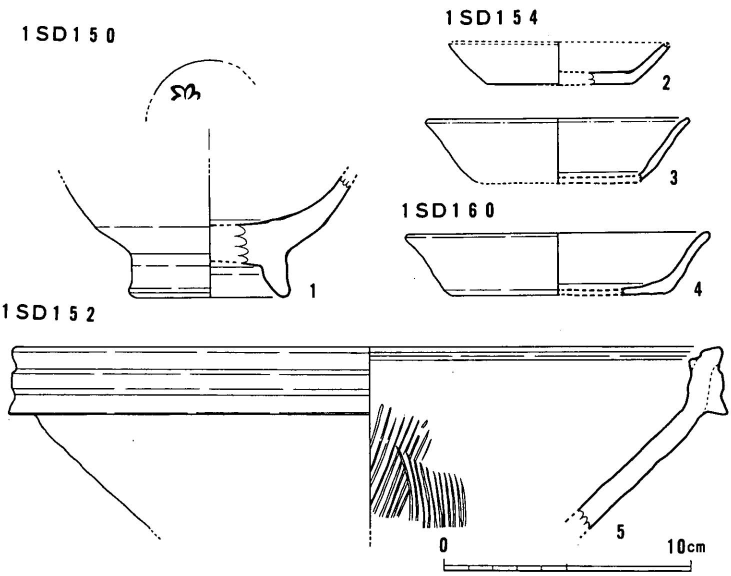


Fig.34　原口遺跡溝出土土器実測図（1/3）

1 SX 050（Fig．13）

Ｃ区北側に広がる溜り状遺構で、黒灰色土下層の一部である。

1 SX 058（Fig．13）

1 SK 018に近接する深さ10cmほどのピットである。

1 SG 060（Fig．13）

Ｃ区の南側半分を占める溜り状遺構で、赤褐色強粘質土が堆積している。重機による掘り下げを試みたが、粘性が強く重機が危うく沈みかけたため掘り上げを断念した。掘り下げの際に底部とみられる部分から黒色の植物遺存体を含む腐食土層が確認され、この遺構が一時期池状を呈していたものと考えられる。埋没は後述の 1 SX 234を切っていることから、上限を弥生時代中期前半代とし、下限は本遺構上面に糸切底の土師器小皿を出すピットが形成されていることから、古代末期～中世頃の間と推定される。

1 SX 066（Fig．13）

1 SX 100を切る深さ８cmほどのピットである。

1 SX 071 (Fig. 13)

1 SX 100の東側にある小ピット群である。

1 SX 230 (Fig. 14)

B区の南側で中近世遺構の検出された地山面に、明確なプランは伴わないが炭の集中する部分が認められたため、東西方向にトレンチを設定し確認作業を実施した。その結果、炭と共にわずかであるが焼土が検出され、土器片も点在していることが確認された。土層の状況 (Fig. 35) から判断してほとんどの炭と土器片は流された状態であると思われる。出土した土器片はすべて同一個体のものと思われるが、時期決定の要素を欠いている。しかし、これらの土器片はおおよそ縄文時代後期から晩期にかけてみられる粗製の鉢類であろうと思われる。

1 SX 234 (Fig. 13)

1 SG 060に切られるもので、明確なプランはなく、小規模な包含層として捉えておく。出土した土器片から弥生時代中期前半代のものとみられる。

② 出土遺物

1 SX 050 出土遺物 (Fig. 36 Pla. 20)

白 磁

皿 (1) Ⅸ類。

1 SX 058 出土遺物 (Fig. 37 Pla. 20)

弥 生 土 器

甕 (1) 如意状口縁の範疇に属するもので、屈曲が「く」字形に近く板付Ⅱ式でも新しいタイプのものである。

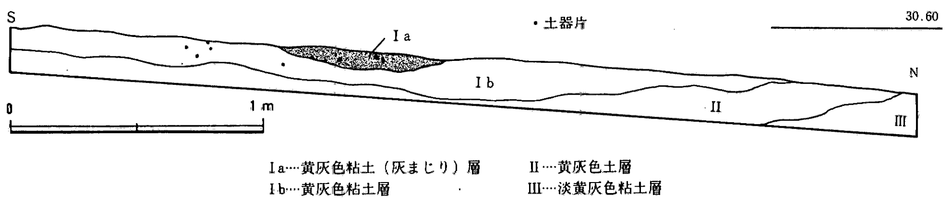


Fig. 35 原口遺跡B区1SX230土層断面図

1 SX 066 出土遺物（Fig. 37　Pla. 20）

弥 生 土 器

甕（2）　ゆるく外反する口縁端部は、その外側に薄い突帯が貼り付き、突帯上には連続する刻み目が付けられている。胎土は小さな砂粒を多く含み、焼成は良、色調は明橙色を呈す。弥生時代前期のものである。

石　器

扁平磨製石斧（Fig. 41）　圭質泥岩を用いたもので、基端部に複数の小剝離がみられる。側面観では反りを持っている。

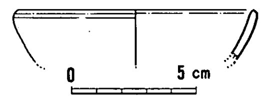


Fig.36　原口遺跡・1 SX050 出土土器実測図（1/3）

1 SX 071 出土土器（Fig. 37　Pla. 20）

須　恵　器

短頸壺（3）　7 世紀代の小型短頸壺である。器壁は厚め。肩部に 2 条のヘラ描き沈線を施す。底面は手持ちのヘラケズリで、「×」のヘラ記号を持つ。器高7.2＋α、胴部径11.2cm。

A区灰色土出土土器（Fig. 38　Pla. 22）

白　磁

多角坏（1）　体部外面に 7 つの面取りをし、高台には 4 箇所に抉り込みを入れるものである。森田勉氏による白磁の分類のD群にあたるもの[1]である。

皿（2）　口縁片である。やや焼きの甘い乳灰色の胎土に乳白色の釉がかかる。内面の上位以下は露胎とする。小片のため口径復原には難がある。推定される口径は14.2cmである。

唐　津　焼

埦[2]（3・4）　3 は砂目を残すもので全面に灰色の釉がかかり、胎土は良く焼きしまっている。高台の削り出しもシャープである。底径4.2m。4 は胎土目を 4 箇所に配すもので釉調は乳灰色を呈し、高台外面にまでは及んでいない。やや焼きが甘く、使用によると思われる高台の摩耗は著しい。

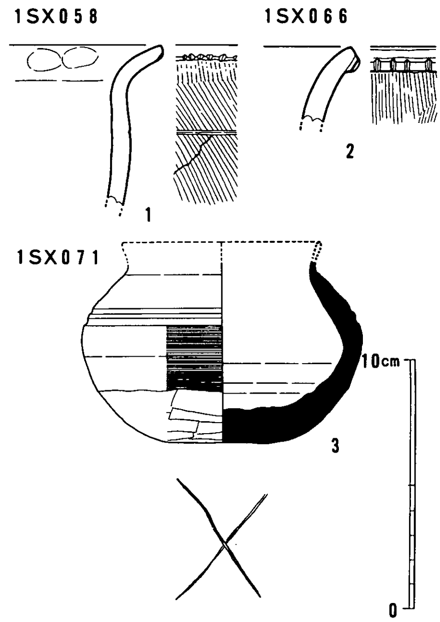


Fig.37　原口遺跡各遺構出土土器実測図（1/3）

青　花

埦（5）　混入物の少ない白色の胎土で、ライトブルーの呉須で彩色されている。内底面にハマの溶着痕が残る。内面には 2 重の圏線中に蓮花、草木、そして袖の深い服を着た唐人様の人物が、外面高台部分にはくずれた雷文が描かれる。肥前系のものか。

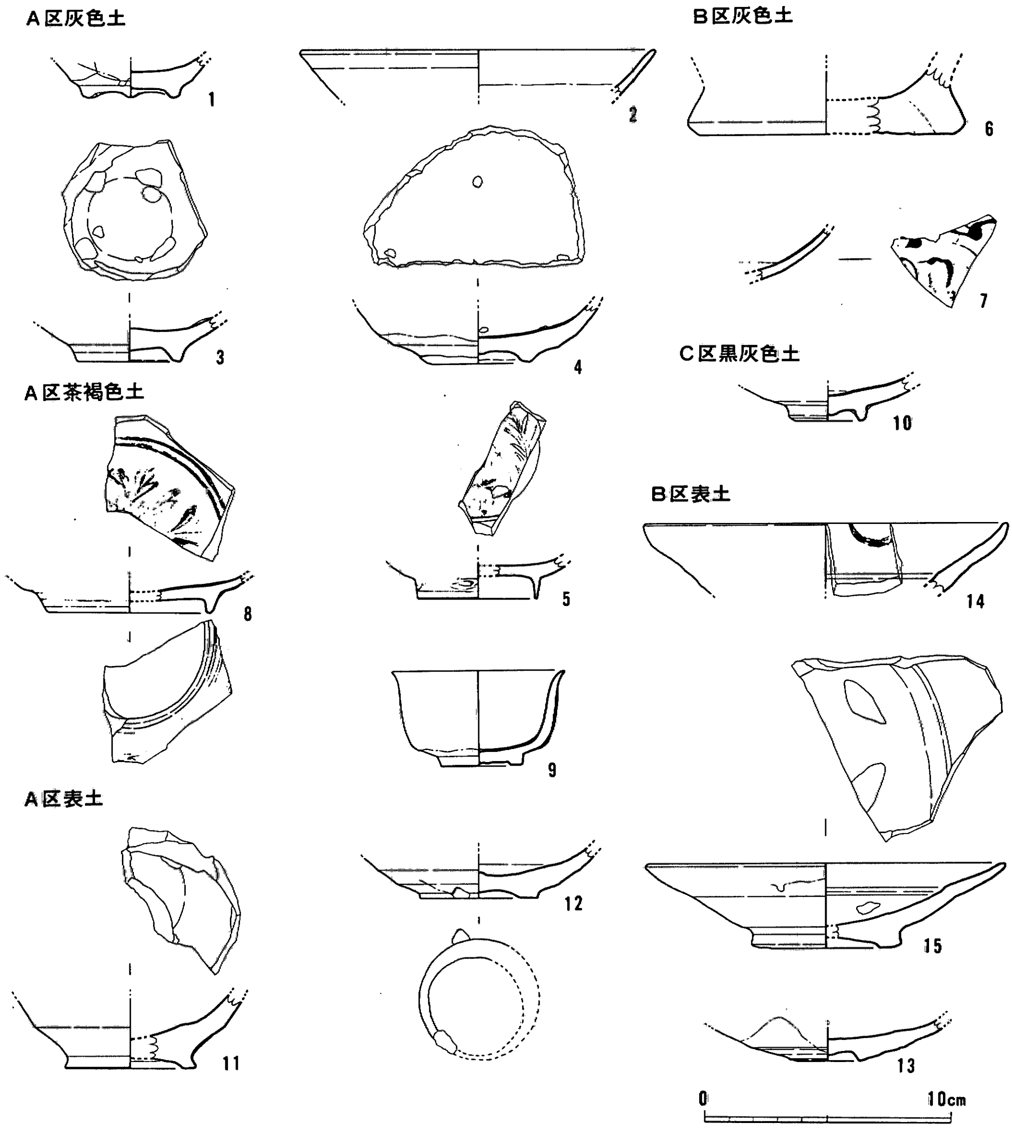


Fig.38　原口遺跡各層出土土器実測図（1/3）

B区灰色土出土土器（Fig. 38　Pla. 23）

縄 文 土 器

粗製深鉢（6）　三角形に外に張り出すタイプの底部片である。胎土は大粒の砂粒を多く含み白灰色を呈し焼きはやや甘い。縄文時代後・晩期の所産であろう。

青　花

埦（7）　埦の体部中ほどの破片と思われる。混入物がほとんどない精良な胎土を持つ。釉は全体に青味が強い。呉須も発色が良く深い青色を呈す。文様は内面に２本の圏線と外面に草木等を描いている。中国明代のものか。

Ａ区茶褐色土出土土器（Fig. 38　Pla. 23）

青　花

皿（8）　短く立つ高台を持つ皿である。混入物のない精良な胎土を持ち、ごく薄く青味がかった釉がかかる。文様は内面の圏線内に草葉文が描かれる。高台径6.6cm。

天　目

小埦（9）　背が低く、短く外反する口縁を持つものである。高台は削り出しによる。乳白色の焼きの甘い胎土に黒褐色の鉄釉（所謂天目釉）を施す。国産か。器高3.2cm、高台径3.4cm。

Ｃ区黒灰色土出土土器（Fig. 38　Pla. 23）

龍泉窯系青磁

小埦（10）　高台は小さく低い。胎土は乳灰色を呈す精良なもので、釉は緑灰色を呈し全面施釉後に畳付部分のみ削り取っている。新安期のものとみられる。高台径3.2cm。

Ａ区表土出土土器（Fig. 38）

唐　津　焼

埦（11）　底の厚い高台を持つもので、黒色の微細な粒を多く含む精良な胎土で、一部が還元化しており、焼成は良好。釉は淡緑灰色を呈し全面に施釉され、外面下位は釉斑（むら）が著しい。畳付と見込みに砂目が見られる。李朝の可能性もある。

皿（12・13）　12は削り取りによる低い高台を持つ皿で、目のやや粗い胎土を持つ、焼成は良好で、一部は還元化している。釉は緑灰色を呈す。高台外側に胎土目がある。高台径4.8cm。13は高台の外側の削り出しがないもので、ややザラつくものの精良な胎土を用いている。焼成は還元状態で良く焼きしまっている。釉は淡乳緑灰色を呈す。高台径3.0cm。

Ｂ区表土出土土器（Fig. 38　Pla. 24）

唐　津　焼

皿（14・15）　14・15は口縁端部が上に反り、内面の体部と底部の境に段を持つ皿である。14はやや粗めの胎土。焼成は良好で還元化している。釉は暗緑灰色を呈し、口縁内面に鉄釉により

弧状の文様が描かれる。小片のため復原には難があるが、口径は14.4cmである。15は大きな砂粒を含む粗いもので、焼成も甘く酸化している。釉は薄く、外面は口縁付近にとどまり、淡緑灰色を呈す。大きな砂目を残す。器高3.4cm、口径14.3cm、高台径6.0cm。

C区表土出土土器（Fig. 39　Pla. 24）

瓦質土器

鉢（1・2）　1・2とも木桶を模した深鉢で、底に低平な3足が付くタイプのものである。1は口縁下の2条の突帯間に梅花文様のスタンプを押印している。押印は3つセットで計6箇所にあったものと思われる。内面は5本/cmのヨコ方向のハケ目調整を施す。小砂粒を多少含む精製土で、焼成は良く、燻しによる炭素吸着は外面に限られる。器高14.5cm＋α、口径39.2cm。2は口縁下の不等間隔の突帯間に交互に巴文のスタンプを押印するもので、押印後にミガキ状の工具によるナデを部分的に施す。内面は6～7本/cmと2～3本/cmの2種のハケ目調整を施す。焼成はやや甘く、燻しによる炭素吸着は外面にとどまる。器高14.8cm＋α、口径50.0cm。

両者とも口縁上面の磨耗が著しく、連続して蓋を併用した結果によるものと思われる。

各地点出土遺物（Fig. 40～43　Pla. 25, 26　Tab. 6）

この項で報告する石器類は、各遺構、包含層から二次・三次的に混入したものであり、小時期を決定し得ないため一括して列挙することとした。各々の出土地点と法量については Tab. 6に示すとおりである。

石　器

剥片石器（1～4）　1は褐色のチャート製の縦長剥片である。剥離面の背面をみると剥離の方向は一定の方向から連続して行なわれ、或る時点で90°転移している。時期決定は難しいが、石材から旧石器時代のものと考えている。2は古銅輝石安山岩（以下安山岩）を用いた縦長剥片で、側面の片側に2次的な加工が施され、刃器として利用されたものであろう。縄文時代後晩期のものか。3は安山岩の横長剥片の下端部に2次調整を加えた刃器で、縄文時代後晩期頃のものと思われる。4は安山岩の横長剥片を用いたもので、片側に2次加工が見られる刃器である。

石匙（5・6）　5は光沢のあまりない黒曜石の横長剥片を用いたものである。6は安山岩の横長剥片を縦に長く置き替えたもので、片側に2次加工を施している。いま一方の側には原石の表皮が残る。

石核（7）　7は黒曜石のコアであるが、一面が多方向に利用されたもので、一部打点を設定するために表皮が除去された部分がある。主要剥離面の大きさは4.5×3.5cmで、剥離の手法は一定していない。縄文時代晩期から弥生時代にかけてのものか。

打製石斧（8・9）　8は安山岩を用いたものでやや扁平な方柱状を呈す。刃部と思われる部

C区表土

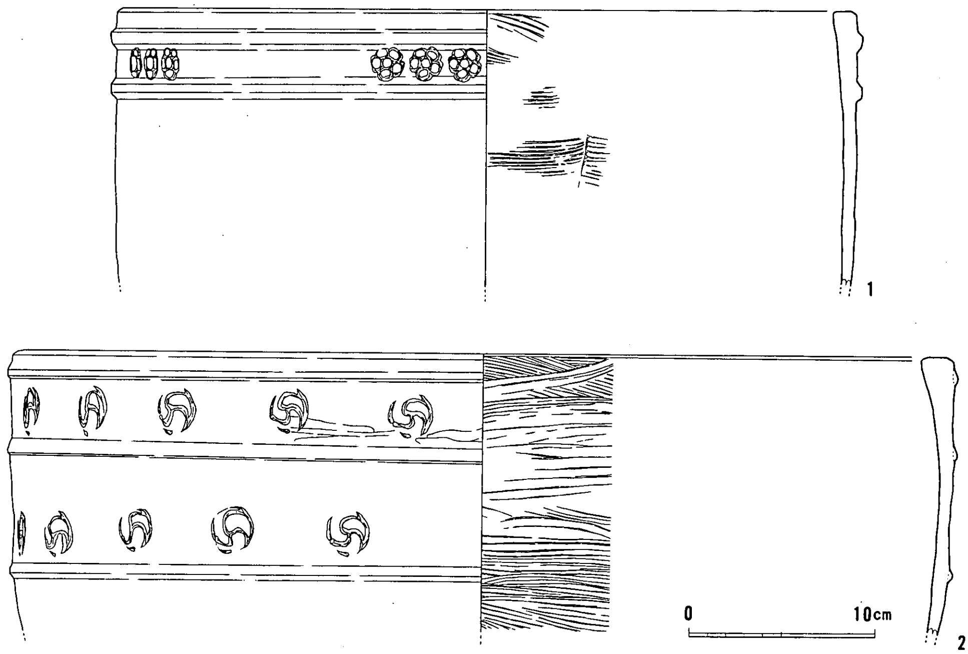


Fig.39　原口遺跡表土出土瓦質土器実測図（1/4）

分は欠損している。両側の稜線のみがかなり磨滅しており、装着痕かとも思える。所謂縄文時代の打製石斧とは異なり、ノミ状の工具ではないかと思われる。1SK020上面での検出であり、本来この遺構に伴うものである可能性がある。9は緑色片岩を用いた所謂縄文時代後晩期通有の打製石斧片である。

石包丁（10）　小豆色の輝緑凝灰岩を用いた石包丁の背部側の破片である。穿孔される穴は小さめである。

扁平片刃石斧（11）　P42　1SX066の項を参照。

磨製石斧（12～15）　12は蛇文岩を用いたもので、扁平で刃部の作り出しが長く側辺に及ぶものである。縄文時代後晩期の所産であろう。13～15は玄武岩製の蛤刃形石斧であり、すべて使用により欠損したものと思われる。刃部に近い14と15の法量を見た場合、幅6～8㎝、厚さ5～6㎝を測り、福岡市西区今山遺跡において分類されるA規格（大中小の大）に近い。[(3)]

打製石鏃（16～26）　今回出土した石鏃を平面形状で分類した場合、抉りが深く「V」字形を呈するもの（A類）、長身の二等辺三角形状を呈するもので抉りが深めのもの（B類）、二等辺三角形状を呈し抉りが浅いもの（C類）側辺が途中で屈曲し、将棋の駒形を呈するもの（D類）とがある。A類は16・17、B類は19・20、C類は21～26、D類は18である。

B類のうち特に20の仕上げ加工（剥離）には法則性があり、19は刃部が有歯状に作られている。C類は西北部九州に於いて縄文時代晩期後半から弥生時代前期にかけて通有の形状を呈する

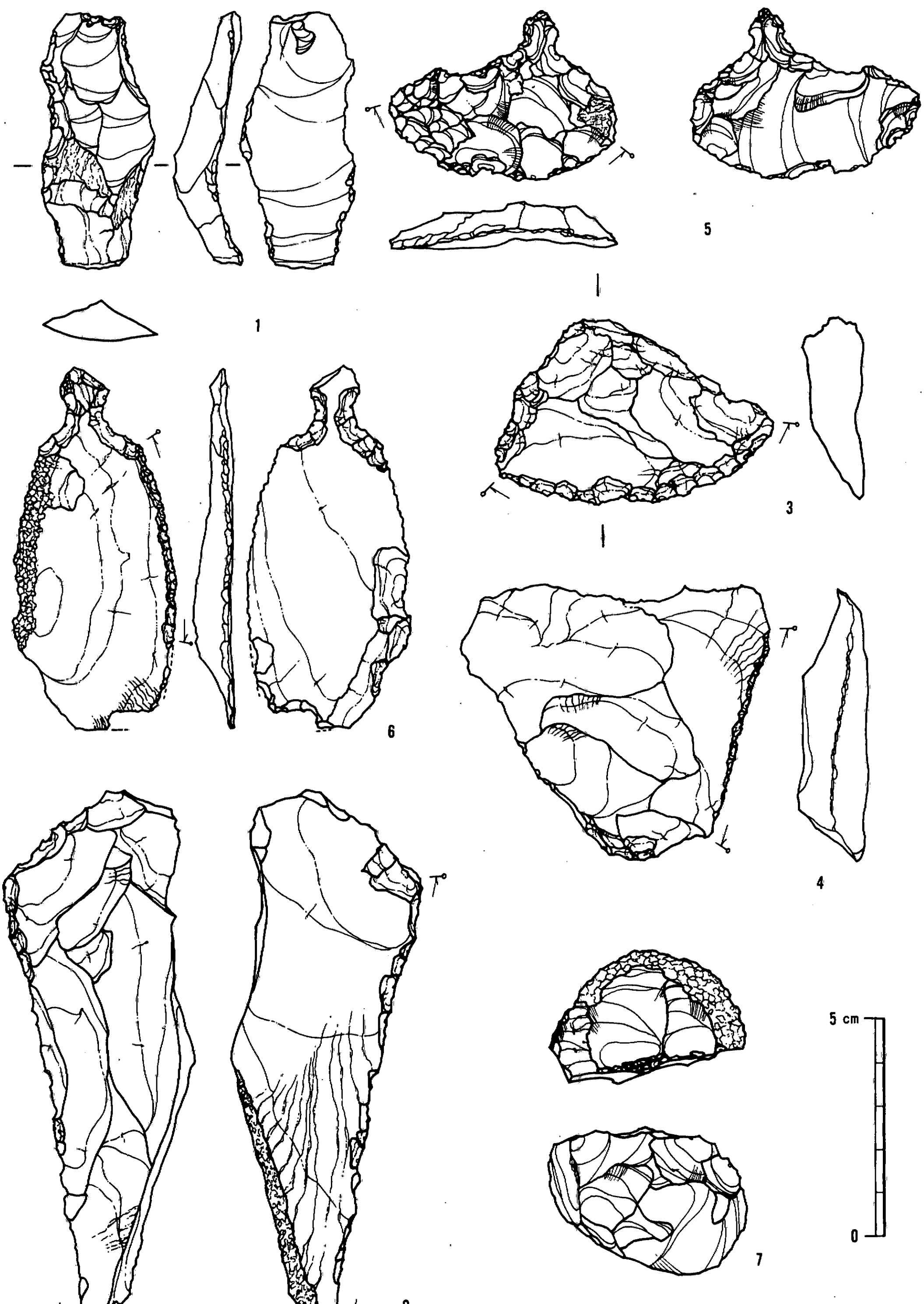


Fig.40　原口遺跡各地点出土石器実測図Ⅰ（2/3）

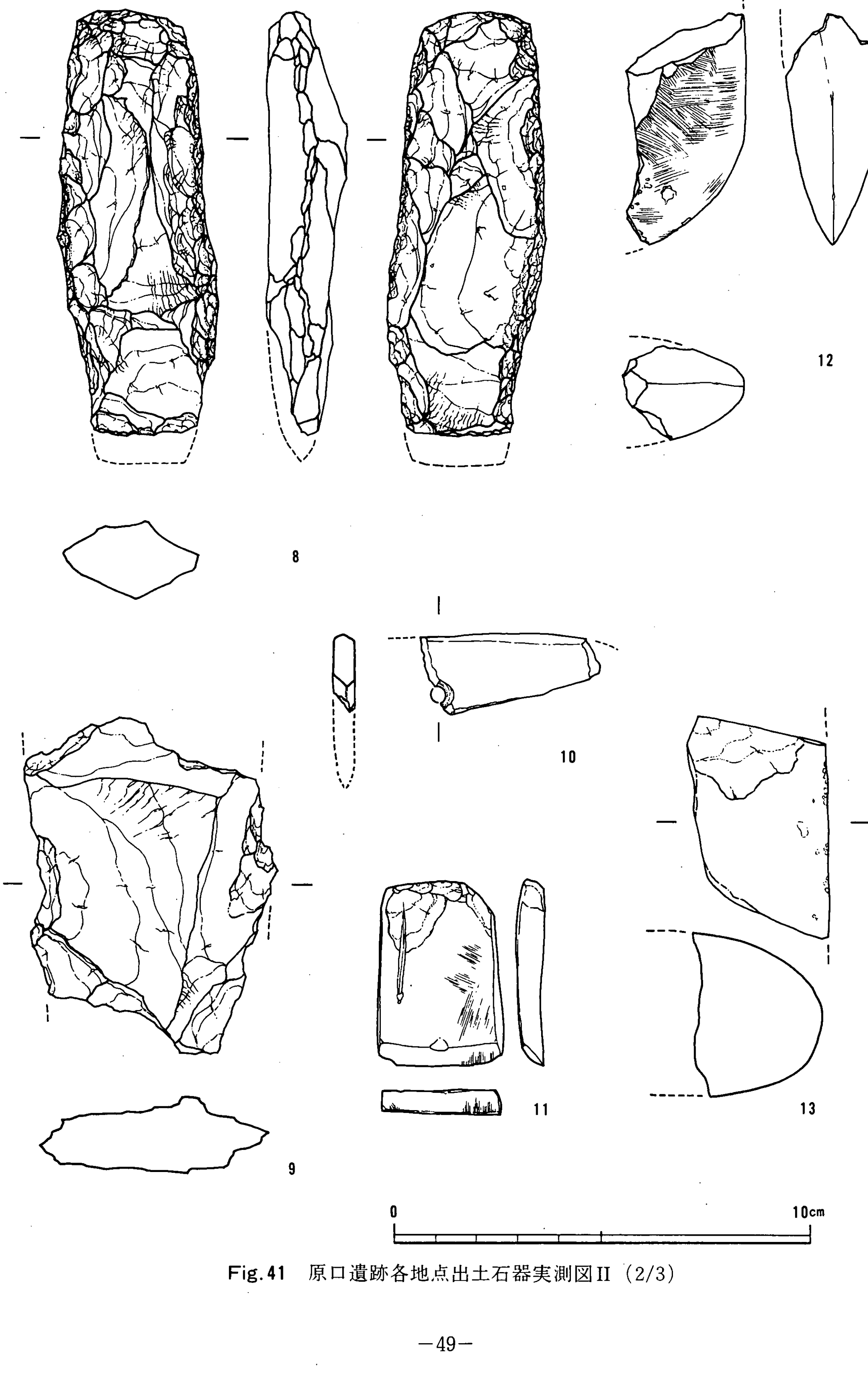


Fig.41　原口遺跡各地点出土石器実測図II（2/3）

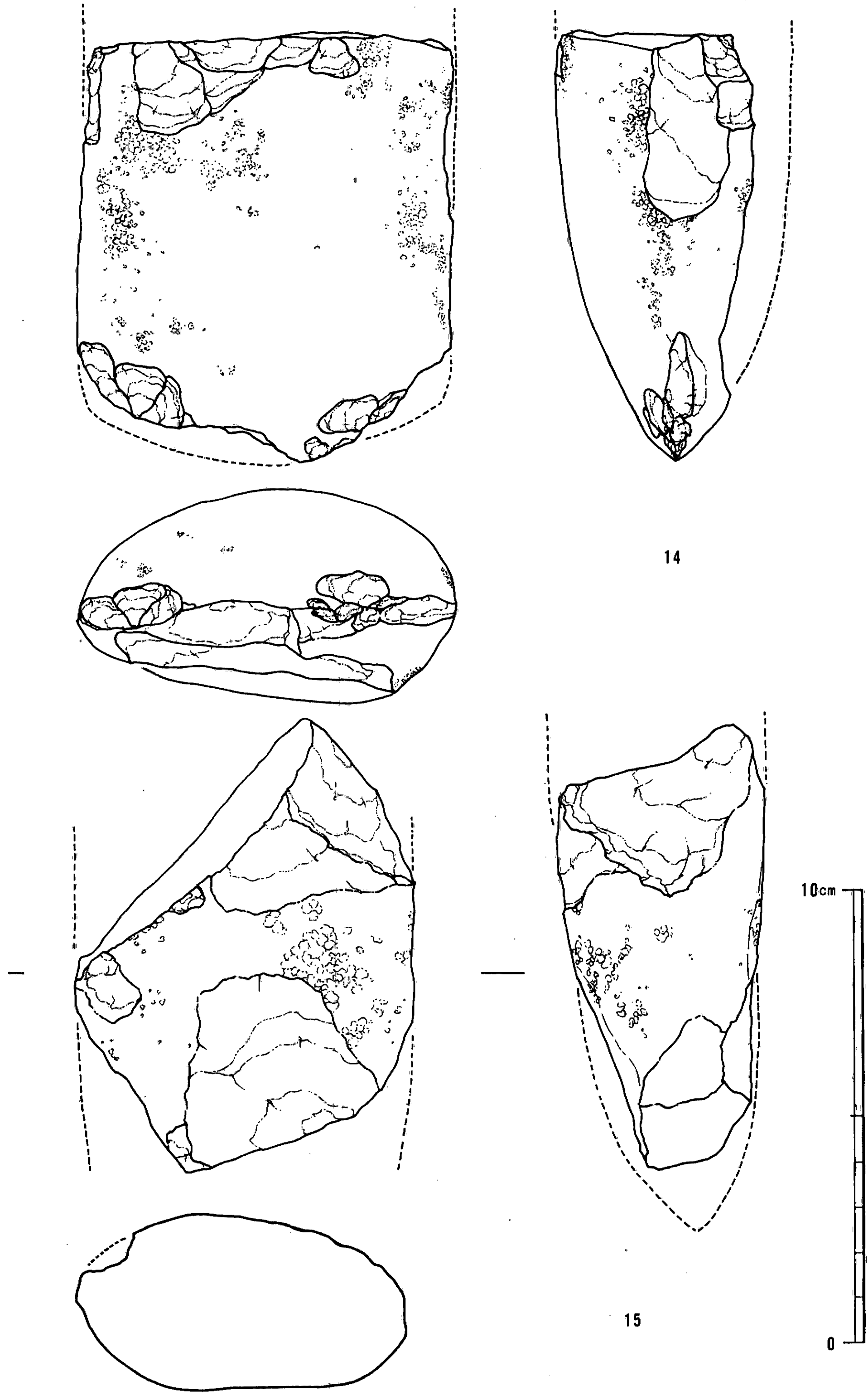


Fig.42　原口遺跡各地点出土石器実測図Ⅲ（2/3）

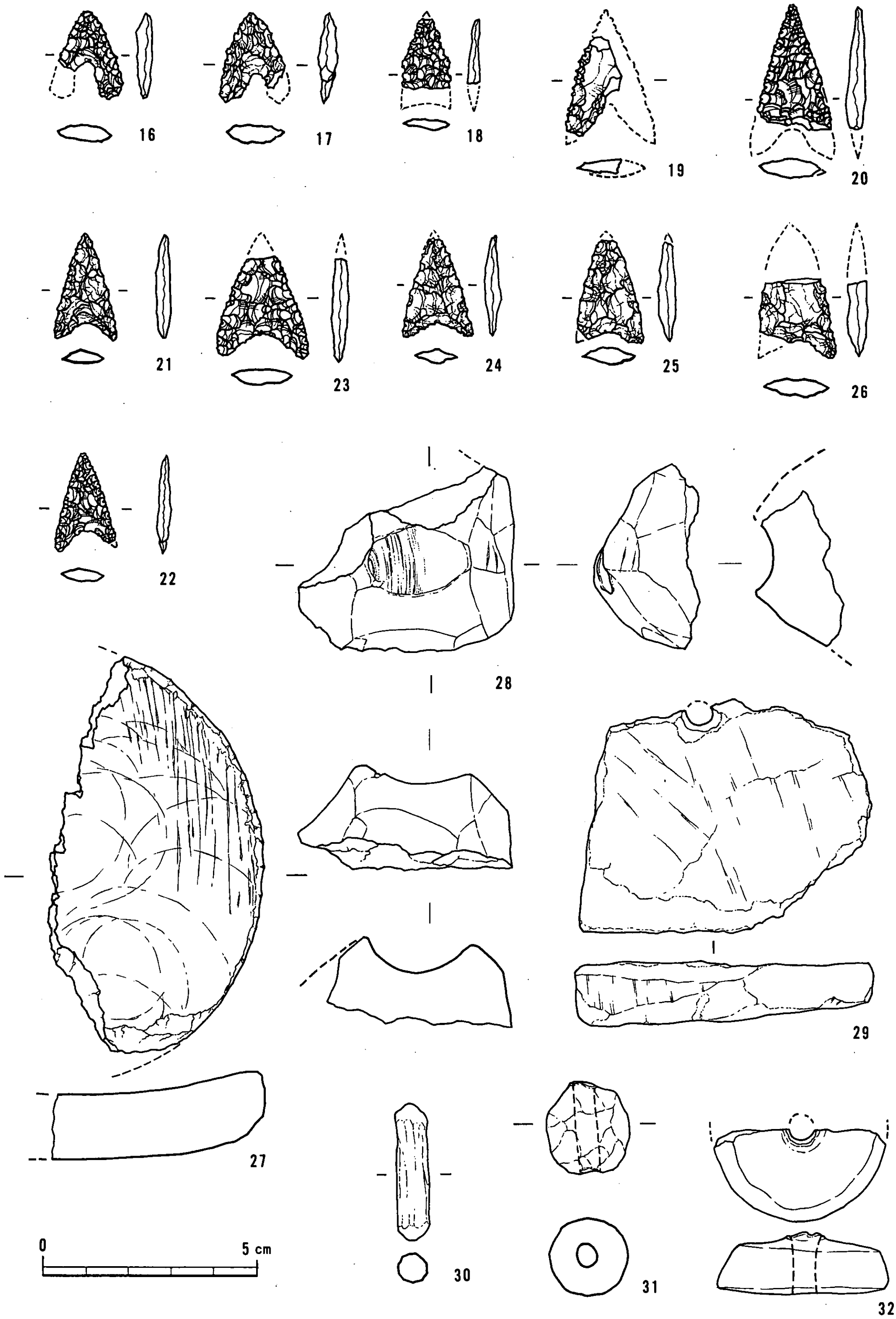


Fig.43　原口遺跡出土石器、土製品実測図（2/3）

ものと言えるが、概して弥生時代のものは調整剝離が稚拙且つ簡略である。24・25がそれに相当する。刃部調整は片側のみ施される（1SI100出土石鏃に同じ)。D類は十郎川、今川、板付遺跡などに類例がみられる。

硯（27）　やや硬質の滑石製。風字硯の頭部とも考えられるが、全体形状は不明。断面形では端部に向かって反り上がり、上面は擦過により光沢を持つ。側面は横に連続するノミ痕がみられる。上面の擦過痕は円運動を示している。

用途不明石器（28～30）　28は目の細かい砂岩を用いたものでピラミッド状の頂部に窪みがあり、窪み内には回転運動による擦過の痕跡がみられる。29は板状の滑石に穿孔があるもので、器表に炭が付着していることから石鍋の転用材である可能性を持つ。30は褐色の石英質の石材を柱状に作り出したものである。

土　製　品

玉（31）　指圧により形成した後、芯棒を貫き取って作ったものである。明褐色を呈す。最大径1.9cm、高さ2.1cm、穿孔径0.4cm。

紡錘車（32）　精製した胎土を用いたものでナデによって仕上げ、中央に穿孔を施している。

土器片加工品（Fig. 44、1～4）　1～4は土器（甕）片を利用し、縁辺から打ち欠いて円形に近い形状を作り出すものであるが、加工、非加工の別や擦過等の使用痕の認定など子細な判定には個人差があり、図示し得なかったものも多数存在する。また、図示したものの中にも疑問の残るものもあり、今後の整理分類作業上の大きな課題の一つとなろう。ここに図示するものには明確な使用痕は観察されない。

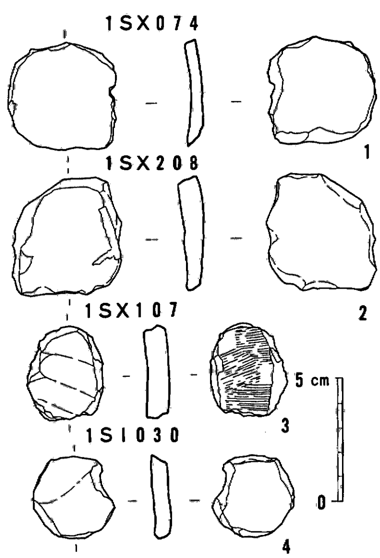


Fig.44　原口遺跡出土土器加工品実測図（1/3）

注(1)　森田勉「14～16世紀の白磁の分類と編年」『貿易陶磁研究』No.2　日本貿易陶磁研究会　1982

(2)　埦・皿等の名称は体部の外形線で器種を仮に分けている。

(3)　『今山・今宿遺跡』　福岡市教育委員会　1981

番号 Fig	枝番	出土地点		全　長	幅	厚　さ	素　　材	器　　種
21	1	C区	1SI100	3.0×	2.0×	0.3	古銅輝石安山岩	打製石鏃
	2		〃	3.2×	1.0×	0.6	圭質泥岩	扁平片刃石斧
	3		〃	3.9×	3.4×	0.3×	頁　岩	石庖丁
23	1	C区	1SI200	4.2×	4.7×	1.1×	緑色片岩	打製石斧
	2		〃	1.4×	——	0.5×	片麻岩	紡錘車
	3		〃	24.7	5.0	2.5	圭化木	不明（打具？）
33	1	C区	1SK006	3.7×	3.7×	1.8	砂　岩	砥　石
	2	C区	1SK020	3.7	1.5	0.2	頁　岩	磨製石鏃
	3		〃	4.5	7.0	1.7	古銅輝石安山岩	横長 RF
	4		〃	4.2×	5.5×	2.5	砂　岩	砥　石
	5	C区	1SK121	7.3	6.1	0.9	片麻岩	不　明
40	1	C区	赤褐粘	5.8	2.6	1.0	チャート（暗褐色）	縦長 UF
	2	B区	灰色土	12.4	4.0	0.8	古銅輝石安山岩	〃
	3	C区	1SX050	4.2	6.3	1.4	〃	横長 RF
	4	C区	黒灰土	6.3	7.1	1.6	〃	〃
	5	A区	表　土	3.9	5.2	0.9	黒曜石	石　匙
	6	B区	灰色土	8.2×	3.7	0.9	古銅輝石安山岩	〃
	7		〃	4.5	3.4	3.0	黒曜石	石　核
41	8	C区	黒灰土	10.0×	3.7	1.9	古銅輝石安山岩	打製石斧
	9	B区	暗茶土	7.9×	6.0	1.8	緑色片岩	〃
	10	C区	表　土	4.3×	2.0×	0.6	輝緑凝灰岩	石庖丁
	11	C区	1SX066	4.4	3.0	0.7	圭質泥岩	扁平片刃石斧
	12	B区	灰色土	5.4×	2.8×	2.3	蛇文岩	磨製石斧
	13	B区	黒灰土	5.2×	3.4×	3.9×	玄武岩	〃
42	14	C区	SX050	9.4×	8.3	4.4	〃	〃
	15	C区	表　土	9.8×	7.4	4.7	〃	〃
43	16	C区	黒灰土	1.0	1.5×	0.4	黒曜石	打製石鏃
	17	C区	赤褐粘	1.1	1.5×	0.4	古銅輝石安山岩	〃
	18	C区	黒灰土	1.6	1.1×	0.3	黒曜石	〃
	19	A区	暗茶土	1.3×	1.2×	0.3×	古銅輝石安山岩	〃
	20	C区	1SX050	2.9×	1.6×	0.5	黒曜石	〃
	21	C区	1SX097	2.4	1.4	0.4	古銅輝石安山岩	〃
	22	A区	黒色土	2.3	1.9	0.3	黒曜石	〃
	23	C区	SX050	2.3×	2.1	0.4	〃	〃
	24	B区	SX158	2.8×	1.6	0.4	古銅輝石安山岩	〃
	25	B区	灰色土	2.3×	1.6×	0.4	〃	〃
	26	C区	1SD001	1.7×	1.8×	0.5	〃	〃
	27	B区	灰色土	5.0×	9.0×	1.5	滑　石	石　硯
	28	B区	表　土	2.4×	5.0×	4.3×	砂　岩	不　明
	29	B区	灰色土	6.7×	5.4×	1.5	滑　石	〃
	30	B区	暗茶土	3.1	——	0.7	石　英？	〃
	31	C区	1SX208	2.1	——	1.9	土製品	土　玉
	32	C区	1SX036	3.9×	——	1.4	〃	紡錘車

Tab. 6　原口遺跡出土石器計測表

（表中の×は欠損値、ＵＦは使用剝片、ＲＦは２次加工剝片を示している。）

1 SI 030出土須恵器計測表　　　　　　　　　　(　　) は推定復原値

器　種	図　番　号	口　　径	器　　高	底　　径
蓋　a_1	Fig　24－1	14.4	2.4	9.1
坏　c	24－2	(12.9)	(4.5)	7.7

1 SI 040出土須恵器計測表　　　　　　　　　　(　　) は推定復原値

器　種	図　番　号	口　　径	器　　高	底　　径
蓋　a_1	Fig　25－1	11.8	1.7	7.2
	2	12.0	1.7	6.7
	3	12.4	2.2	6.0
	4	13.6	2.1	9.2
	5	14.0	2.2	9.2
	6	14.8	2.2+	10.8
坏　a	7	12.8	3.6	7.3
	8	(10.5)	(3.0)	(6.0)

Tab. 7　原口遺跡住居跡出土須恵器計測表

遺物等分類に関する基礎文献

土師器・須恵器　山本信夫ほか「大宰府条坊跡」『太宰府町の文化財５』　1982年
山本信夫ほか「大宰府条坊跡Ⅱ」『太宰府市の文化財７』　1983年
山本信夫「大宰府における古代末から中世の土器・陶磁器－10～12世紀の資料－」『中世土器の基礎研究Ⅳ』　1988年

陶　磁　器　森田勉・横田賢治郎「大宰府出土の輸入中国陶磁器について」『九州歴史資料館研究論集４』　1978年
山本信夫ほか「大宰府条坊跡Ⅱ」『太宰府市の文化財７』　1983年
山本信夫・狭川真一「大宰府条坊跡Ⅲ」『太宰府市の文化財８』　1984年
森田勉「14～16世紀の白磁の分類と編年」『貿易陶磁研究No.２』　1982年
小野正敏「15～16世紀の染付椀、皿の分類と年代」『貿易陶磁研究No.２』　1982年
上田秀夫「14～16世紀の青磁椀の分類について」『貿易陶磁研究No.２』　1982年
山本信夫「日本における初期高麗について－大宰府出土例を中心として－」『貿易陶磁研究No.５』1985年
山本信夫「北宋期貿易陶磁器の編年－大宰府出土例を中心として－」『貿易陶磁研究No.８』　1988年
山本信夫「新安と同時期の大宰府出土陶磁器」貿易陶磁研究会第９回発表要旨　1988年
森田勉・横田賢治郎「大宰府出土の輸入中国陶磁器について」『九州歴史資料館研究論集４』　1978年

中　国　陶　器　山本信夫ほか「大宰府条坊跡Ⅱ」『太宰府市の文化財７』　1983年

製　塩　土　器　森田勉「塩壺考」『大宰府古文化論叢下巻』　1983年

滑　石　製　石　鍋　森田勉「滑石製容器－特に石鍋を中心として－」『仏教芸術148』　1983年

硯　横田賢治郎「福岡県内出土の硯について－分類と編年に関する一試案－」『九州歴史資料館研究論集９』　1983年

木　　簡　木簡学会『木簡研究』

木　　器　『平城宮発掘調査報告Ⅵ・Ⅶ』

瓦　石松好雄・高橋章「大宰府出土の瓦について（二)」『九州歴史資料館研究論集４』　1978年
高橋章「鴻臚館系瓦の様相」『大宰府古文化論叢下巻』　1983年

井　　戸　横田賢治郎「大宰府検出の井戸－特に形態分類を中心として－」『九州歴史資料館研究論集３』1977年

Ⅴ．原口遺跡土壌中火山灰抽出分析結果

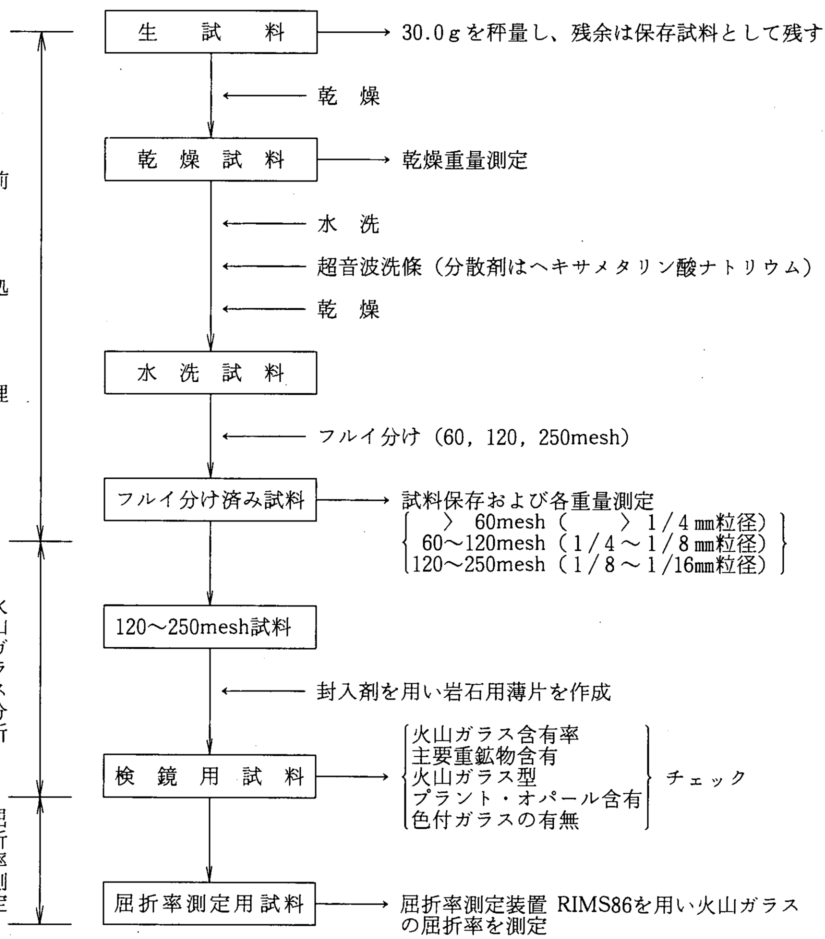
株式会社　京都フィッション・トラック

1．試　　料

分析試料は、太宰府市教育委員会の手で採取された原口Ⅱ、Ⅲ、Ⅳ、Ⅴ層の4試料とボーリングコア標本の4、7の2試料で、合計6個である。

2．分 析 方 法

試料の分析は、以下に示されるフローチャートに従い行った。



土壌中火山灰（火山ガラス）抽出分析処理順序

次に各処理工程について、簡単に説明を加える。

(1) 前　処　理

まず半湿潤状態の生試料を秤量し、60℃で15時間乾燥させる。乾燥重量測定後、２ℓビーカー中で数回水替えしながら水洗し、超音波洗滌を行う。この際、中性のヘキサメタリン酸ナトリウムの溶液を液濃度１～２％程度となるよう適宜加え、懸濁がなくなるまで洗滌水の交換を繰返す。乾燥後、篩別時の汚染を防ぐため使い捨てのフルイ用メッシュ・クロスを用い、３段階の篩別（60，120，250mesh）を行い、各段階の秤量をする。こうして得られた120～250mesh（１/８～１/16㎜）粒径試料を比重分別処理等を加えることなく、封入剤（Nd＝1.54）を用いて岩石用薄片を作成した。

(2) 火山ガラス分析

前処理で作成された岩石用薄片を検鏡し、特に火山ガラスの含有率や特徴を中心に以下の各項目について測定・チェックを行った。

① 火山ガラス含有率

鏡下で火山ガラス・重鉱物・軽鉱物（土粒子やアモルファス粒子を含む）を識別し、各含有率を測定した。

② 主 要 重 鉱 物

主要重鉱物（カンラン石・斜方輝石・単斜輝石・角閃石・黒雲母・アパタイト・ジルコン・イディングサイト）(1) を鏡下で識別し、そのおおよその量比を定性的に示した。なお今回重鉱物分析として主要重鉱物の含有率を定量的に測定しなかったのは、一般に土壌中に含まれる重鉱物の起源は単一の火山灰に特定されないからで、複数起源の混合物である土壌中の重鉱物を定量的に求めることはあまり意味がないと判断されるからである。

③ 火 山 ガ ラ ス 型

吉川（1976）(2) の分類に準拠して、含有される火山ガラスの形態を多いものから半定量的に求め表示した。なお吉川の分類に含まれないものについては、不規則型として一括した。

④ プラント・オパール含有

鏡下でしばしばプラント・オパールが識別されるため、その有無と、比較的多い場合には全粒子に対するプラント・オパール含有率を半定量的に示した。

⑤ 色付ガラスの有無

淡褐～淡紫色を呈する色付ガラスの有無は、広域テフラの識別の際に特徴の一つとなる場合がある。そこで、色付ガラスの有無を示した。なおここでいう色付ガラスには、スコリア（塩基性火山砕屑物）中にしばしば含まれる赤褐，褐，黄，緑色などのガラスは含まれない。

(4) 火山ガラスの屈折率測定

前処理により調整・保存された120～250mesh（１/８～１/16㎜）粒径試料を対象に、温度変化

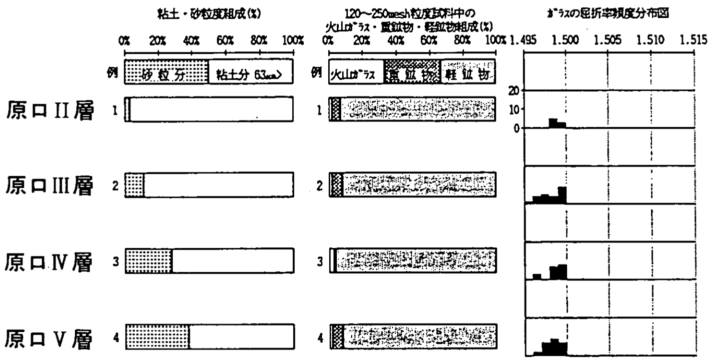
型屈折率測定装置（RIMS86）[3]を用いて個々の火山ガラスの屈折率を測定した。測定精度を高めるため1試料あたり原則として30個の火山ガラス片を測定したが、火山ガラス含有率が数％以下の場合には測定上の都合から、測定片数は30個未満となっている。

なお測定結果は、各火山ガラス片の屈折率測定値の頻度分布図を描くとともに、測定値の最大・最小をはじめ、モード，平均値，標準偏差値も計算し表示した。

3．分析結果および考察

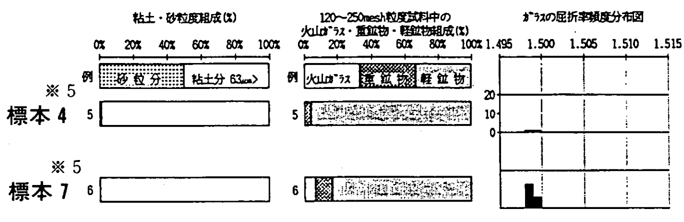
今回得られた分析結果は、集約され、図1－1、1－2に表示されている。これらの分析情報の中で考古学・地質学的に価値をもつものは、編年上意味のあるテフラ（広域テフラ）の降灰層準を合理的に認定する根拠を与えるものである。具体的には、テフラ起源物質として明確に同定される火山ガラスの特徴や含有量比の情報が最も重要となる。

一般には土壌中に含まれる重鉱物の分析が広く行われているが、重鉱物分析結果をテフラ降灰層準との関係で議論する場合には十分注意が必要である。その理由は、土壌中の重鉱物は母岩起源のものを含むのが普通であり､必ずしもテフラ起源とのみ特定することができないからである。



	＊1 主要重鉱物および備考	＊2 PO含有(%)	＊3 ＊4 主要火山ガラス型	色付ガラスの有無
1	Bi.Opq.GHo.Opx.Cpx.Zr.	1.0	Hb.Ha.Cb.	－
2	Bi.GHo.Opq.Opx.Cpx.Zr.	2.0	Hb.Ha.Cb.	＋
3	GHo.Opq.Opx.Cpx.Bi.Zr.	3.0	Hb.Cb.Ha.Ca.Ta.	＋
4	Bi.GHo.Opq.Opx.Cpx.	＋	Hb.Ha.Cb.	－

図1－1　原口遺跡土壌中火山灰抽出分析結果



	＊1 主要重鉱物および備考	＊2 PO含有(%)	＊3 ＊4 主要火山ガラス型	色付ガラスの有無
5	Bi.Cpx.Zr.Opq.Opx.GHo.	1.5	Hb.Ha.	＋
6	GHo.Bi.Opq.Cpx.Zr.Opx.	5.0	Hb.Cb.Ha.Ca.Ta.	＋

図1－2　関連地点土壌中火山灰抽出分析結果

＊1　主要重鉱物の略称と鉱物名
　01：カンラン石　Opx：斜方輝石　Cpx：単斜輝石　CHo：緑色普通角閃石　BHo：褐色普通角閃石
　Bi：黒雲母　Ap：アパタイト　Zr：ジルコン　Id：イディングサイト　Opq：不透明鉱物
＊2　PO：プラント・オパール含有率or有無
＊3　主要ガラス型の名称（吉川，1976）
　Ha，Hb：扁平型（バブルウォール型）　Ca，Cb：中間型（軽石型）　Ta，Tb：多孔質型（軽石・繊維状型）
＊4　（吉川，1976）以外のガラス型の略称
　SG：スコリア質ガラス　IT：不規則型
＊5　筑紫野市大字上古賀、文化会館地点における標本である。（九州大学　下山正一氏提供資料）

しかも同一種類の鉱物でもその組識上かなりの多様性をもつことが普通であり、純粋にテフラ起源の重鉱物のみを識別することは困難が多い。

このため、今回の分析結果の考察においては、重鉱物分析結果から得られる情報は参考程度として低く扱わざるを得ないことをお断りしておきたい。

さて火山ガラスから得られる情報に着眼すると、6試料には純度の高い火山灰層はまったく認められず、火山灰降灰層準として識別・認定できる試料層準はなかったと結論される。すなわち大部分の試料において含有される火山灰物質（特に火山ガラス）は極めて少なく、試料間で欠落のない連続試料ではないため分析結果から積極的に降灰層準を認定するには困難が多い。しかし消極的な情報ではあるが、以下の諸点を指摘しておきたい。

1．全6試料において少量含まれる火山ガラスは、その屈折率・形態から姶良 Tn 火山灰［AT 火山灰：町田・新井（1976）(4)］の可能性が高い。
2．全6試料には、姶良 Tn 火山灰に由来すると考えられる火山ガラス以外には他種の火山ガラスは含まれない。
3．連続試料ではなくかつ含有火山ガラス量もわずかなため、測定データからも姶良 Tn 火山灰の降灰層準を認定することは困難である。
4．火山ガラス含有量が少ない中にあって、標本7の試料は7％と相対的にやや多い。

注(1)　町田瑞男・村上雅博・斎藤幸治（1983）：南関東の火山灰層中の変質鉱物“イディングサイト”について．第四紀研究．22(1)，69－76．
(2)　吉川周作（1976）：大阪層群の火山灰層について．地質学雑誌．82(8)，479－515．
(3)　横山卓雄・檀原　徹・山下　透（1986）：温度変化型屈折率測定装置による火山ガラスの屈折率測定．第四紀研究．25(1)，21－30．
(4)　町田　洋・新井房夫（1976）：広域に分布する火山灰――姶良 Tn 火山灰の発見とその意義――．科学，46，339－347．

Ⅵ．土壌中火山ガラス抽出分析

京都大学理学部　竹　村　恵　二

1．は　じ　め　に

考古学上の編年を考察する上でのテフラ・火山灰の役割は、最近広域テフラの発見や認定に伴い、一層重要視されてきている。広域に分布する火山灰層は、地理的に広範囲という利点があるのみならず、異なる岩相・堆積環境の地層中に同時間面を示すという意味において層位学的価値が高い。しかし、火山灰層は堆積環境の差異などから必ずしも、いつでも露頭（現地）で明らかに肉眼的に判別しうるとは限らない。したがって、特に細かい地層対比や編年が要求される考古学などの分野においては、堆積物中に微量しか含まれない火山ガラスなど火山灰起源物質の質や量を系統的に分析することによって、肉眼観察困難な火山灰の正確な降灰層準を認定する方法の確立が必要である（竹村・檀原、1988）。

肉眼観察困難な堆積物中のテフラの分析については吉川（1981）や町田・新井（1983）などの研究がある。吉川（1981）は大阪平野のボーリング試料から洗いだした火山ガラスの量の変化を検討して降灰層準を認定し対比の手段にしている。町田・新井（1983）は、福井県鳥浜貝塚の試料を5－10cmおきに検討して、鬼界－アカホヤ火山灰（K-Ah）の降灰層準の認定を行っている。これらの研究は、堆積物中の火山ガラスなどのテフラ物質を系統的に調査することが編年上有効な方法であることを示していた。筆者は降灰層準の認定のために連続的な分析により火山ガラスの量的な変化を求め、その火山ガラスの屈折率や形態によってグループ分けする分析を進めてきている。特に屈折率測定においては、檀原ほか（1985）や横山ほか（1986）によって報告された温度変化型屈折率測定装置を用いることにより大量の正確なデータを得ることができるようになった。竹村・檀原（1988）はこの連続的な試料を用いて土壌中の火山ガラスの量的な変化とその火山ガラスの屈折率を中心とした特徴を把握する分析を土壌中火山ガラス抽出分析とよんでいる。この分析法を用いれば、堆積物中の肉眼観察困難な火山灰の降灰層準の正確な決定と、広域テフラとの対比により年代決定を可能にするとともに、垂直方向の変化の様子を知ることにより、例えば同一区画の中で堆積環境の違う場所の対比を行うことが可能になる（たとえば竹村・檀原、1987の兵庫県板井遺跡の例）。また、姶良Tn火山灰（AT火山灰）（町田・新井、1976）と鬼界－アカホヤ火山灰（K-Ah火山灰）（町田・新井、1978）のように類似した形態を持ち屈折率が異なる火山ガラスの混合比を正確にしることができる利点を有している。このほかにも堆積物の再堆積や生物による攪乱の推定にも寄与できると考えられる。

今回は、福岡県太宰府市原口遺跡の分析結果を中心に報告するが、九州地域での初めての分析であり、分析法の詳細と福岡県下に分布する広域テフラなどの解説も試みる。なお、分析は㈱京

都フィッション・トラックに依頼して行われた。

2．方　　法

土壌中火山ガラス抽出分析は以下の方法・手順に基づいて行い、火山ガラスの垂直分布の特徴を調べる。

1．採取された試料を乾操し、重量をはかる（この分析は連続的な試料を用いれば非常に有用な結果が得られるので、試料はきれめなく連続的に採取することが望ましい)。
2．洗浄し、60、120、250メッシュ（それぞれ250μ、125μ、63μ）の篩で篩別し、乾燥後重量をはかる。
3．120～250メッシュの粒子（極細砂サイズ、125～63μ）を超音波洗浄機を用いて洗浄する。
4．120～250メッシュの粒子（極細砂サイズ、125～63μ）を封入剤（バルサム・光硬化剤など）を用いて封入し、岩石薄片を作成する。
5．上記の薄片を偏光顕微鏡観察し、火山ガラス・重鉱物・軽鉱物とその他の３つに大別し、各粒子個数百分率を求め、火山ガラスの特徴を記載する。重鉱物の組成も記録する。
6．火山ガラスの屈折率を測定する。

火山ガラスの屈折率は、檀原ほか（1985)、横山ほか（1986)、横山・山下（1986）に述べられている温度変化型屈折率測定装置（RIMS86）およびその改良型を用いて測定する。この測定法は従来の浸液法と比較して、個人差がないこと、少ない浸液で測定が可能なこと、室温を恒温状態に保つ必要がないこと、統計的測定に重要な粒子ごとの屈折率のばらつき範囲や最頻値分布測定が能率的かつ正確に行えるなどの利点を有している。浸液はダイフロイルとα－クロロナフタレンの混液であり、各浸液の温度と屈折率の関係は、屈折率が既知の人工ガラスを用いて図１のような一次式が得られている。各ガラス粒子の屈折率は合致温度と浸液固有の一次式より計算される。なおこの測定装置の誤差は±0.0002以内である。

3．北西部九州における後期更新世以降のテフラ

九州は阿蘇山、雲仙、桜島、霧島など現在も多くの活動的な火山が位置する地域である。しかし、その活動的な火山の分布をみると、福岡県・佐賀県などを中心とした北西部九州地域はその影響があまり及ばない地域であることがわかる。特に考古学と関連が深い地表部に、南九州では厚い火山灰起源のシラスやローム層が堆積しているのに対し、北西部九州では直接古い時期の岩石や堆積物が露出するかそれらが赤色風化された土壌が分布し、火山灰起源の物質の影響は非常に少ない。この地域で従来から注目された広域にひろがる火山起源の地層としては福岡県南部の八女地域にひろがる台地上の阿蘇火山起源とされる八女粘土層と鳥栖地域の鳥栖ローム層がある。このほかには段丘上や台地上の火山起源物質にはあまり注意が払われてこなかった。1970年

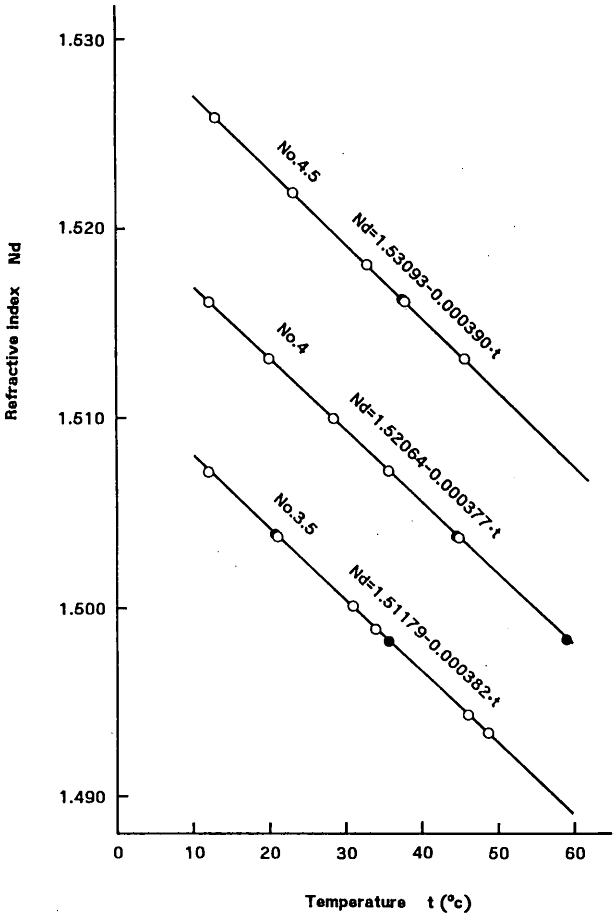


図1 各浸液の屈折率と温度の関係（竹村・檀原，1988）

代後半から精力的に同一時間面の指標としての火山灰の重要性に注目した広域テフラ（広域火山灰）調査が行われてきた。その結果、後期更新世以降の時間面設定に有効ないくつかの広域テフラが定義されてきた。この中で九州北西部にも分布している可能性が高く、有効な時間面になりうると考えられる広域テフラは鬼界－アカホヤ（K－Ah）火山灰、姶良 Tn（AT 火山灰)、阿蘇4（Aso－4）火山灰である。以下、この3火山についてのべる。

1）　鬼界－アカホヤ（K－Ah）火山灰（町田・新井，1978）

この火山灰の給源は鹿児島南方の鬼界カルデラであり、現在は竹島と硫黄島を残して大部分が海底に沈んでいる（図2）。この火山灰は九州・四国から東北地方南部までをおおい（図2)、給源に近い南九州・東九州・四国などでは橙色のガラス質火山灰として肉眼的に識別が容易であり、アカホヤ、イモゴ、アカボコ、音地などの各地域固有の愛称でよばれていた。この火山灰の示す年代は^{14}C年代の集中から6,300年 B.P. とみなされている。この時代は完新世の中でも高温多湿な時代であり、考古学的には縄文時代の早期から前期にかけての時代にあたり、その広域性からこの火山灰は遺物・遺構の編年に非常に有用である。この火山灰の岩石学的特徴については表1にまとめられる。

福岡北部地域ではこの火山灰は層厚も薄く、クロボク土などの中に拡散、土壌化して肉眼では識別することが困難になる地点が多いと考えられるが、福岡平野の沖積粘土層などにはさまれていることが明らかにされている。また陸域の表層部の資料としては奈多海岸の表層のクロボク土にも明らかにこの火山灰起源の火山ガラスが含まれている。したがって、このK－Ah 火山灰は福岡北部地域にもその降灰の影響が認められ、この火山灰の降灰層準を明らかにできれば有効な

時間面を設定できることになる。

2) 姶良 Tn (AT) 火山灰 (町田・新井, 1976)

この火山灰の噴出源は、鹿児島湾北部の姶良カルデラである。この火山灰は日本列島全域をおおい、日本海、太平洋にも分布をひろげている（図3)。K－Ah 火山灰より層厚が全般的に厚い。湖や湿地などでは灰白色ガラス質火山灰であるが、陸域の土壌化した場所では淡褐色火山灰として識別できる。この火山灰の示す年代は^{14}C年代の集中から21,000－22,000年前（町田・新井, 1976, 1983）とされてきているが、松本ほか（1987）はこの火山灰の上下の泥炭の^{14}C年代のデータから約24,700年前の年代を提示している。またこの火山灰の噴出した時代は気候が寒冷化した時代であったことがあきらかになっている。この火山灰の降灰は後期旧石器時代にあたり、その広域性からこの時代の編年上重要な時間面を提供している。この AT 火山灰

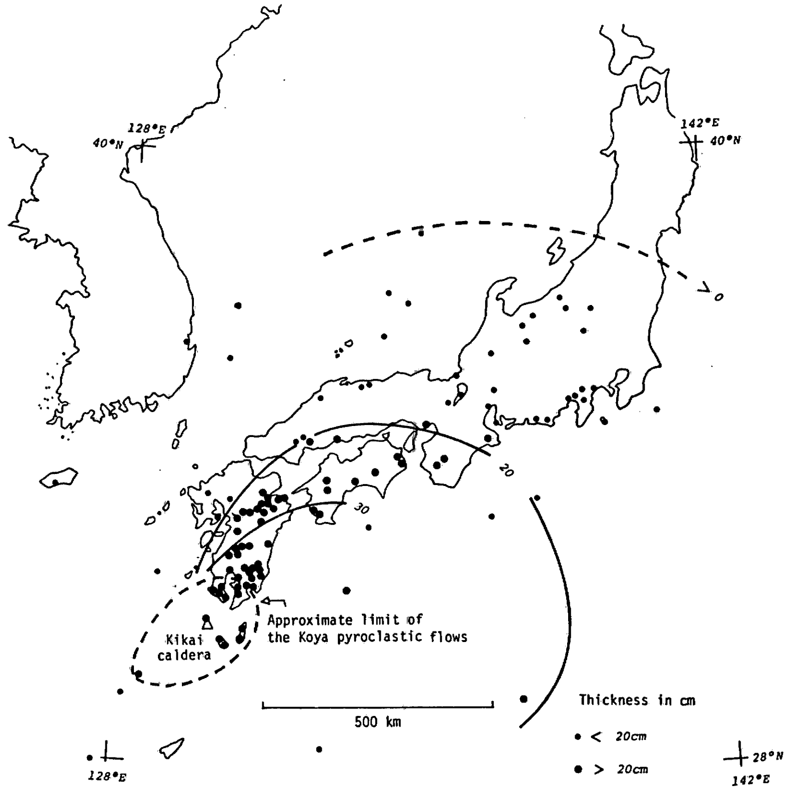


図2 鬼界－アカホヤ火山灰（K-Ah 火山灰）の等厚線図（町田・新井, 1983）

表1 K－Ah火山灰、AT火山灰、Aso－4火山灰の特徴（町田ほか、1984）

テフラ名	(1) 噴火年代 (10^3年BP)（同測定法）	(2) 噴火・堆積機構	(3) 全テフラ量 (km³)	(4) 火山ガラスの性質 タイプ	屈折率 (n)	(5) 斑晶鉱物の性質 特色的鉱物	屈折率
鬼界アカホヤ火山灰 (K－Ah)	6.3 (^{14}C)	pfa→pfl→pfl=afa	150	bw ≧ pm	1.508～1.514	pl;opx,cpx	opx γ 1.709～1.712
姶良 Tn 火山灰 (AT)	21～22 (^{14}C)	pfa→pfl→pfl=afa	150	bw ≧ pm	1.498～1.501	pl;opx,cpx,(ho,pt)	opx γ 1.728～1.734
阿蘇4火山灰 (Aso－4)	70 (層位)	pfl=afa	150～	bw ≧ pm	1.506～1.514	pl;ho,opx	opx γ 1.699～1.701 ho n_2 1.685～1.691

(2) afa, 降下火山灰；pfa, 降下軽石；pfl, 火砕流；下線のテフラが広域に分布する　(3) 一輪廻の噴出物全量　(4) pm, 軽石型火山ガラス；bw, バブル型火山ガラス　(5) af, アルカリ長石；pl, 斜長石；pt, 石英；opx, 斜方輝石；cpx, 単斜輝石；ho, 角閃石；bi, 黒雲母；（　）内はごく僅かに含まれるもの

の特徴は表1にまとめられる。

福岡北部地域ではこの火山灰の肉眼的に明瞭にみられる発見例は乏しいが、陸域の表層部の資料としては、奈多海岸の土壌試料にその火山ガラスが明らかに認められる。したがって、このAT火山灰は福岡北部地域にもその降灰の影響が認められ、この火山灰降灰層準の認定ができれば、有効な時間面を設定できることになる。

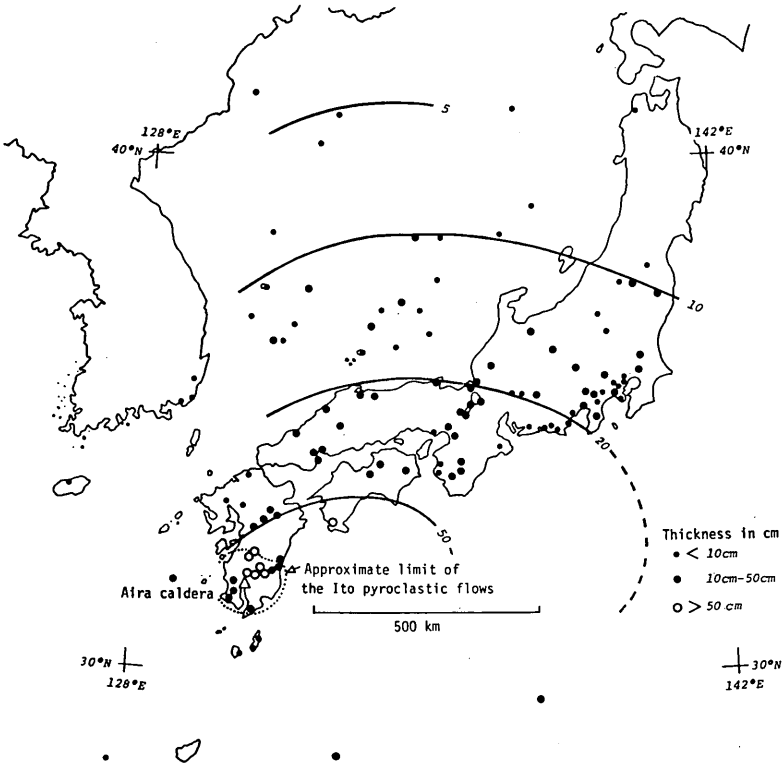


図3　姶良Tn火山灰（AT火山灰）の等厚線図（町田・新井，1983）

3)　阿蘇4（Aso－4）火山灰（町田ほか，1985）と阿蘇4火砕流堆積物

この火山灰は阿蘇4火砕流（小野ほか、1977）の噴出と同時に形成された降下火山灰として定義されている（図4）。福岡北部地域では降下火山灰としてではなく、火砕流堆積物として台地上や段丘上に多くの地点で認められる。従来から八女粘土層や鳥栖ローム層と呼ばれてきた地層である。この阿蘇4火砕流堆積物は九州北西部地域で重要な鍵層として用いられ、段丘などの編年に大きな役割を果たしてきた。阿蘇4火砕流の年代については町田ほか（1985）によっておよそ7万年前と推算されている。その理由は以下のようにまとめられる。報告された放射年代は2.6万年 BP から8.4万年 BP の範囲にひろがっている。^{14}C法による測定値は29,000年 BP 前後で比較的集中し、この程度の年代が編年にも使用されてきた。この年代は層位学的な資料と矛盾していることが指摘される。すなわち、姶良 Tn（AT）火山灰の層準より陸上でも海底でも阿蘇4火砕流堆積物が非常に下位にあること。九重火山起源のテフラで3万年 BP 前後やそれより古いと測定されたものより阿蘇4火砕流堆積物は下位にあることなどである。小野ほか（1977）は4.3万年 BP より古いとしたが、町田ほか（1985）は広域テフラとして阿蘇4火山灰を認定し、それを南関東における層位の中で位置づけした結果、約7万年前の噴火と考えられると推算し、それが現在阿蘇4火砕流堆積物および阿蘇4火山灰の噴出年代として用いられている。阿蘇4火山

灰の特徴は表1にまとめられているが、阿蘇4火砕流堆積物はWATANABE（1978、1979）によれば8ユニットにわけられ、その中で八女軽石流と鳥栖橙色軽石流が広域に分布するとされている。

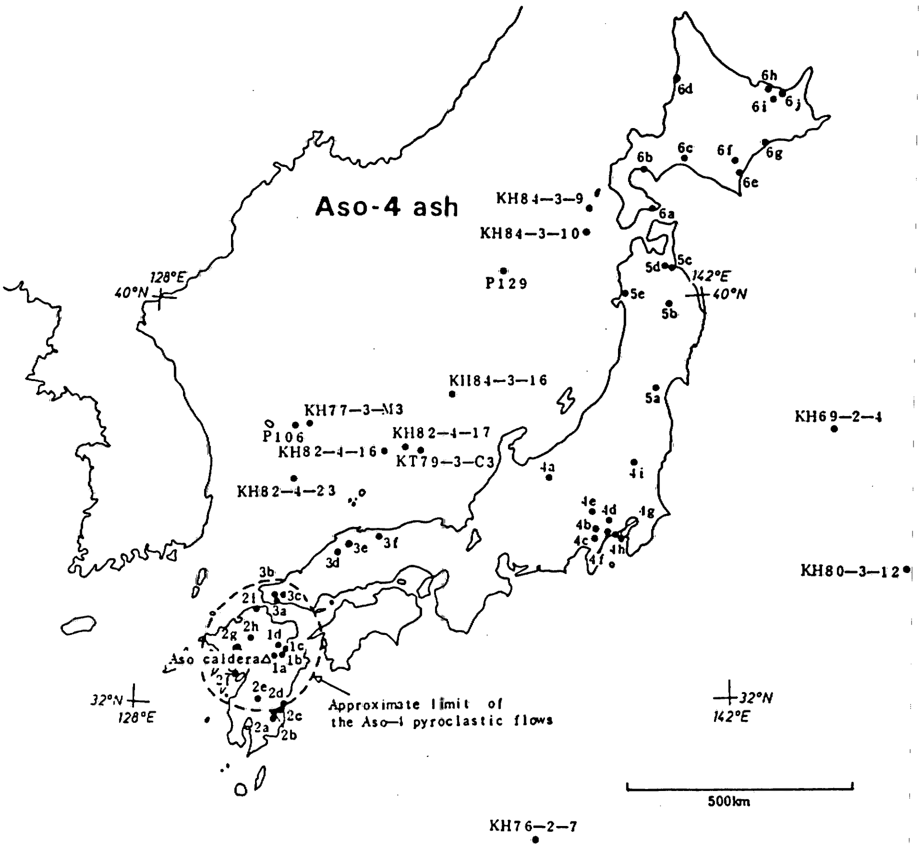


図4　阿蘇火山灰（Aso-4火山灰）が識別された地点図（町田ほか，1985）

4．試料と分析結果

今回分析された原口遺跡の試料は上位よりⅡ層、Ⅲ層、Ⅳ層、Ⅴ層より各1試料ずつ、計4試料である

表2　分析試料の粒度組成、火山ガラス・重鉱物・軽鉱物含有量、主要重鉱物、主要火山ガラス型、プラント・オパール含有量、色付きガラスの有無一覧表

試料名	乾燥重量 (g)	粒度組成（g） 砂粒分（mesh size） >60	～120	～250	粘土分 <250	鉱物・ガラス組成（%） 火山ガラス	重鉱物	軽鉱物	主要重鉱物および備考*1	PO*2含有（%）	主要火山ガラス型*3 *4	色付ガラス有無
原口Ⅱ層	22.9	0.3	0.1	0.3	22.2	2.0	5.0	93.0	Bi.Opq.GHo.Opx.Cpx.Zr.	1.0	Hb.Ha.Cb.	−
原口Ⅲ層	24.0	1.4	0.4	0.9	21.3	2.0	6.0	92.0	Bi.GHo.Opq.Opx.Cpx.Zr.	2.0	Hb.Ha.Cb.	＋
原口Ⅳ層	23.8	4.6	0.7	1.3	17.2	3.0	1.0	96.0	GHo.Opq.Opx.Cpx.Bi.Zr.	3.0	Hb.Cb.Ha.Ca.Ta.	＋
原口Ⅴ層	24.6	7.2	0.6	1.5	15.3	2.0	6.0	94.0	Bi.GHo.Opq.Opx.Cpx.	＋	Hb.Ha.Cb.	−

＊1　各鉱物とその略称は以下のように対応します。
Ol；カンラン石　Opx；斜方輝石　Cpx；単斜輝石　GHo；緑色普通角閃石　BHo；褐色普通角閃石
Bi；黒雲母　Gar；ザクロ石　Zr；ジルコン　Id；イディングサイト　Opq；不透明鉱物
＊2　PO含有とはプラント・オパールの含有量（%）を示します。
＊3　火山ガラス型とその略称は吉川（1976）に従い以下のように対応します。
Ha. Hb；扁平型（バブル・ウォール型）　Ca. Cb；中間型（軽石型）　Ta. Tb；多孔質型（軽石型．繊維状型）
＊4　なお、吉川（1976）以外のガラス型について次の略称を用います。
SG；スコリア質ガラス　IT；不規則型

（図５）。各分析結果をまとめると以下のようになる。

・原口Ⅱ層（橙色粘土層）（表２、表３、表４、図６、図７）：約97％がシルトサイズ以下という粒度組成で砂の含有量が非常に少ない。火山ガラスが約２％ふくまれる。火山ガラスのタイプはバブルウォール型が多い特徴がある。火山ガラスの屈折率は平均値1.4990で、モード（最頻値）は1.498－1.500程度である。図７－図11のよみかたは以下のとおりである。最上位に連続試料の場合の系列の名前（Series Name)、次に分析試料の名前（Sample Name)、分析者（Analist)、試料の鉱物種（Material）が印刷される。この場合の Material は gl. なのでガラスを分析したことになる。次の Immersion Oil はこの測定に使用した浸液の種類を示し、Nd の式はその浸液の温度と屈折率の相関関係をあらわし、Nd は屈折率、ｔは温度を示す。この式は一次式であるので火山ガラスと浸液の屈折率が合致した温度が測定によって得られるのでこの式から火山ガラスの屈折率が計算される。（Ascent＋Descent）／2は合致温度を温度を上昇させた時（Ascent）と下降させた時（Descent）の平均値として求めた時の値の意味であり、1.4993などの小数点以下４桁表示の数字は各粒子の屈折率をしめす。 Total の項の count, min., max., range, mean, st.dev., skew. はそれぞれ粒子数、屈折率の最小値、最大値、変化量、平均値、標準偏差、歪度である。Histogram の図はたて方向に0.001ごとの屈折率を、横方向にその屈折率に対応する火山ガラスの個数が表現されている。＊一つが一個の火山ガラス粒子である。

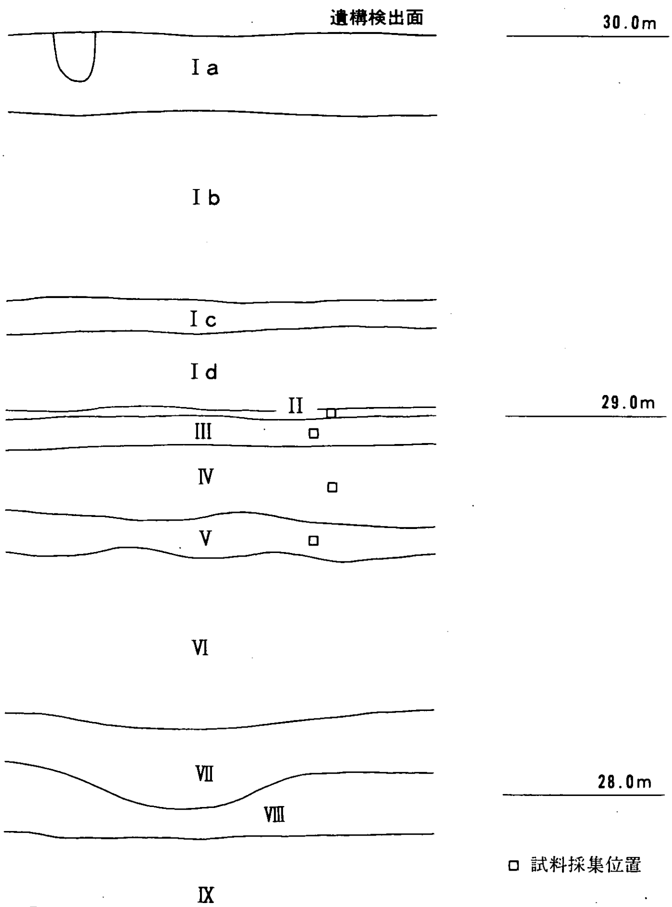


図５　原口遺跡の土層図と試料採取層準

・原口Ⅲ層（茶褐色粘土層）（表２、表３、表４、図６、図８）：約89％がシルトサイズ以下の粒度組成である。火山ガラスが約２％含まれる。火山ガラスのタイプは

表3　重　鉱　物　組　成

No.	材料名	重鉱物組成 ※(1)										備考
		Ol	Opx	Cpx	Am	Opq	Id	Zr	Bi	Ap	全計測粒子数	
1	原ロⅡ層	—	3	2	7	9	—	2	157	—	200	Biの風化激しい。
		0.0	1.5	1.0	3.5	4.5	0.0	1.0	78.5	0.0	100	
2	原ロⅢ層	—	3	2	16	9	—	2	62	—	94	Am中に少量の褐色角閃石を含む。
		0.0	3.2	2.1	17.0	9.6	0.0	2.1	66.0	0.0	100	Biの風化激しい。
3	原ロⅣ層	—	5	1	7	7	—	1	4	—	25	重鉱物含有量少ない。
		0.0	20.0	4.0	28.0	28.0	0.0	4.0	16.0	0.0	100	Biの風化激しい。
4	原ロⅤ層	—	2	1	10	8	—	2	177	—	200	Biの風化激しい。少量のザクロ石を
		0.0	1.0	0.5	5.0	4.0	0.0	1.0	88.5	0.0	100	含む。

注．※1　上段　計測粒子数　　下段　%

なお各鉱物とその略称は以下のように対応します。

Ol；カンラン石　Opx；斜方輝石　Cpx；単斜輝石　Am；角閃石

Opq；不透明（鉄）鉱物　Id；イディングサイト　Zr；ジルコン

Bi；黒雲母　Ap；アパタイト

表4　火山ガラス屈折率測定結果

No.	材料名 (sample name)	屈折率範囲 (range)		屈折率平均値 (mean)	測定個体数 (個)	屈折率最頻値 (mode)	火山ガラス形態 (glass type)
		最小	最大				
1	原ロⅡ層	1.4987	1.4993	1.4990	8	1.498≦Nd＜1.500	H型のみ含む。
2	原ロⅢ層	1.4955	1.4994	1.4982	23	1.495≦Nd＜1.497 1.498≦Nd＜1.500	H型を主としC型を含む。
3	原ロⅣ層	1.4964	1.4999	1.4986	18	1.498≦Nd＜1.500	H型のみ含む。
4	原ロⅤ層	1.4964	1.4995	1.4983	25	1.497≦Nd＜1.500	H型を主としC型を含む。

※　H：扁平型　C：中間型　T：多孔質型（吉川，1976）

バブルウォール型が多い。火山ガラスの屈折率は平均値が1.4982で、モードは1.498－1.500程度である。

・原ロⅣ層（黒色粘土層）（表2、表3、表4、図6、図9）：約72%がシルトサイズ以下の粒度組成である。火山ガラスが約3%含まれる。火山ガラスのタイプはバブルウォール型が多い。

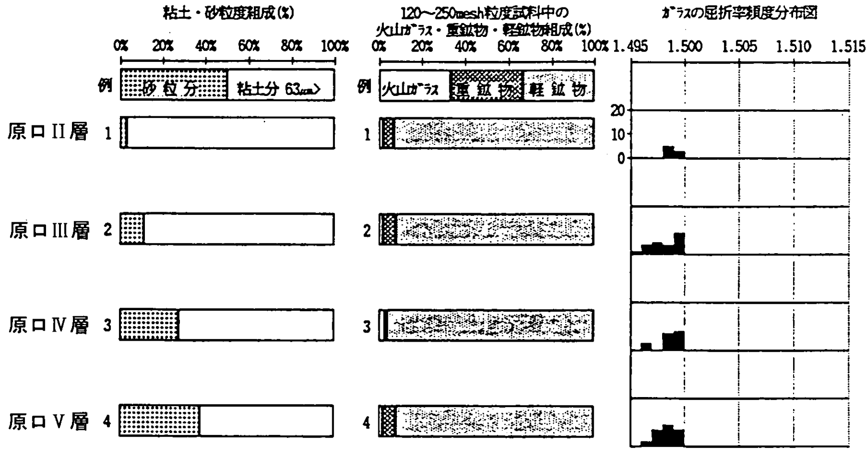


図６　分析試料の粒度組成、火山ガラス・重鉱物・軽鉱物含有量、火山ガラス屈折率頻度分布図

火山ガラスの屈折率は平均値が1.4986で、モードは1.498－1.500程度である。

・原口Ｖ層（暗黒色粘土層）（表２、表３、表４、図６、図10）：約62％がシルトサイズ以下の粒度組成である。火山ガラスが約２％含まれる。火山ガラスのタイプはバブルウォール型が多い。火山ガラスの屈折率は平均値が1.4983で、モードは1.497－1.500である。

このように原口遺跡の上位よりⅡ層、Ⅲ層、Ⅳ層、Ｖ層の上下方向の試料からは約２－３％の火山ガラスが検出され、どこかの層準に火山ガラスが多産することはみとめられない。またその特徴も類似性が高く、原口遺跡の４試料から検出される火山ガラスは同一火山灰起源と考えられる。したがって、この火山灰は試料採取をおこなった最下位のＶ層以前に降灰したと考えられ、その火山ガラスが再堆積作用などによって、原口遺跡のＶ層、Ⅳ層、Ⅲ層、Ⅱ層にはいってきたことになる。

５．火山ガラスをもたらした火山灰および年代の検討

原口遺跡のⅡ層－Ｖ層の４試料から検出された火山灰について検討し、地層の年代について考察する。

この検出された火山ガラスは1.498－1.500を中心とした屈折率をもち、多くがバブルウォール型の形態を示している。また、原口遺跡のＶ層からⅡ層にわたって長期間分散を行う火山灰は広域テフラの可能性が高い。したがって、この検出された火山ガラスの特徴を福岡北部に降灰した可能性が高い広域テフラと比較すると姶良 Tn 火山灰（AT 火山灰）に対比できる。この結果から原口Ｖ層の堆積前に AT 火山灰の降灰がすでにあったということができる。年代としては第３章でのべたような AT 火山灰降灰の年代（たとえば約21,000－22,000年前）より後に原口Ｖ層が堆積したことになる。ところが AT 火山灰に由来する火山ガラスは現在の地表の土壌にも検出す

```
*** Original Data Sheet ***

Series Name  : ﾀﾞｻﾞｲﾌｷｮｳｲｸｲｲﾝｶｲ
Sample Name  : ﾊﾙｸﾞﾁ 2ｿｳ
Analist      : Araki
Material     : gl.
Immersion Oil: No.3.8  (Nd=1.51907-0.000393·t)

(Ascent+Descent)/2

  1.4993  1.4991  1.4987  1.4989  1.4992  1.4989  1.4987  1.4989

                   count   min.    max.    range   mean    st.dev. skew.
Total     :          8     1.4987  1.4993  0.0006  1.4990  0.0003  0.0712

*** Histogram ***     * =  1

                           0         10        20        30        40        50        60
---------------------------+---------+---------+---------+---------+---------+---------+
 1.490 =<Nd< 1.491     0|
 1.491 =<Nd< 1.492     0|
 1.492 =<Nd< 1.493     0|
 1.493 =<Nd< 1.494     0|
 1.494 =<Nd< 1.495     0|
 1.495 =<Nd< 1.496     0|
 1.496 =<Nd< 1.497     0|
 1.497 =<Nd< 1.498     0|
 1.498 =<Nd< 1.499     5|*****
 1.499 =<Nd< 1.500     3|***
 1.500 =<Nd< 1.501     0|
 1.501 =<Nd< 1.502     0|
 1.502 =<Nd< 1.503     0|
 1.503 =<Nd< 1.504     0|
 1.504 =<Nd< 1.505     0|
 1.505 =<Nd< 1.506     0|
 1.506 =<Nd< 1.507     0|
 1.507 =<Nd< 1.508     0|
 1.508 =<Nd< 1.509     0|
 1.509 =<Nd< 1.510     0|
 1.510 =<Nd< 1.511     0|
 1.511 =<Nd< 1.512     0|
 1.512 =<Nd< 1.513     0|
 1.513 =<Nd< 1.514     0|
 1.514 =<Nd< 1.515     0|
 1.515 =<Nd< 1.516     0|
 1.516 =<Nd< 1.517     0|
 1.517 =<Nd< 1.518     0|
 1.518 =<Nd< 1.519     0|
 1.519 =<Nd< 1.520     0|
 1.520 =<Nd< 1.521     0|
 1.521 =<Nd< 1.522     0|
 1.522 =<Nd< 1.523     0|
 1.523 =<Nd< 1.524     0|
 1.524 =<Nd< 1.525     0|
 1.525 =<Nd< 1.526     0|
 1.526 =<Nd< 1.527     0|
 1.527 =<Nd< 1.528     0|
 1.528 =<Nd< 1.529     0|
 1.529 =<Nd< 1.530     0|
---------------------------+---------+---------+---------+---------+---------+---------+
```

図7　原口II層から検出される火山ガラスの屈折率測定結果

```
*** Original Data Sheet ***

Series Name  : ﾀﾞｻﾞｲﾌｷｮｳｲｸｲｲﾝｶｲ
Sample Name  : ﾊﾙｸﾞﾁ 3ｿｳ
Analist      : Araki
Material     : gl.
Immersion Oil: No.3.8  (Nd=1.51907-0.000393·t)

(Ascent+Descent)/2

  1.4993  1.4992  1.4977  1.4955  1.4992  1.4991  1.4985  1.4964  1.4992  1.4979
  1.4975  1.4966  1.4990  1.4989  1.4975  1.4966  1.4993  1.4991  1.4982  1.4979
  1.4966  1.4994  1.4989

                   count   min.    max.    range   mean    st.dev. skew.
Total     :         23     1.4955  1.4994  0.0039  1.4982  0.0012 -0.6903

*** Histogram ***     * =  1

                           0         10        20        30        40        50        60
---------------------------+---------+---------+---------+---------+---------+---------+
 1.490 =<Nd< 1.491     0|
 1.491 =<Nd< 1.492     0|
 1.492 =<Nd< 1.493     0|
 1.493 =<Nd< 1.494     0|
 1.494 =<Nd< 1.495     0|
 1.495 =<Nd< 1.496     1|*
 1.496 =<Nd< 1.497     4|****
 1.497 =<Nd< 1.498     5|*****
 1.498 =<Nd< 1.499     4|****
 1.499 =<Nd< 1.500     9|*********
 1.500 =<Nd< 1.501     0|
 1.501 =<Nd< 1.502     0|
 1.502 =<Nd< 1.503     0|
 1.503 =<Nd< 1.504     0|
 1.504 =<Nd< 1.505     0|
 1.505 =<Nd< 1.506     0|
 1.506 =<Nd< 1.507     0|
 1.507 =<Nd< 1.508     0|
 1.508 =<Nd< 1.509     0|
 1.509 =<Nd< 1.510     0|
 1.510 =<Nd< 1.511     0|
 1.511 =<Nd< 1.512     0|
 1.512 =<Nd< 1.513     0|
 1.513 =<Nd< 1.514     0|
 1.514 =<Nd< 1.515     0|
 1.515 =<Nd< 1.516     0|
 1.516 =<Nd< 1.517     0|
 1.517 =<Nd< 1.518     0|
 1.518 =<Nd< 1.519     0|
 1.519 =<Nd< 1.520     0|
 1.520 =<Nd< 1.521     0|
 1.521 =<Nd< 1.522     0|
 1.522 =<Nd< 1.523     0|
 1.523 =<Nd< 1.524     0|
 1.524 =<Nd< 1.525     0|
 1.525 =<Nd< 1.526     0|
 1.526 =<Nd< 1.527     0|
 1.527 =<Nd< 1.528     0|
 1.528 =<Nd< 1.529     0|
 1.529 =<Nd< 1.530     0|
---------------------------+---------+---------+---------+---------+---------+---------+
```

図8　原口III層から検出される火山ガラスの屈折率測定結果

```
*** Original Data Sheet ***

Series Name  : ﾀﾞｻﾞｲﾌ ｷｮｳｲｸｲｲﾝｶｲ
Sample Name  : ﾊﾙｸﾞﾁ 4ｿｳ
Analist      : Araki
Material     : gl.
Immersion Oil: No.3.8  (Nd=1.51907-0.000393·t)

(Ascent+Descent)/2

  1.4999  1.4998  1.4993  1.4989  1.4992  1.4989  1.4986  1.4985  1.4985  1.4965
  1.4964  1.4994  1.4990  1.4988  1.4987  1.4966  1.4992  1.4990

                   count   min.    max.    range   mean    st.dev. skew.
Total     :         18     1.4964  1.4999  0.0035  1.4986  0.0011 -1.1068

*** Histogram ***     * =  1

                           0         10        20        30        40        50        60
---------------------------+---------+---------+---------+---------+---------+---------+
 1.490 =<Nd< 1.491     0|
 1.491 =<Nd< 1.492     0|
 1.492 =<Nd< 1.493     0|
 1.493 =<Nd< 1.494     0|
 1.494 =<Nd< 1.495     0|
 1.495 =<Nd< 1.496     0|
 1.496 =<Nd< 1.497     3|***
 1.497 =<Nd< 1.498     0|
 1.498 =<Nd< 1.499     7|*******
 1.499 =<Nd< 1.500     8|********
 1.500 =<Nd< 1.501     0|
 1.501 =<Nd< 1.502     0|
 1.502 =<Nd< 1.503     0|
 1.503 =<Nd< 1.504     0|
 1.504 =<Nd< 1.505     0|
 1.505 =<Nd< 1.506     0|
 1.506 =<Nd< 1.507     0|
 1.507 =<Nd< 1.508     0|
 1.508 =<Nd< 1.509     0|
 1.509 =<Nd< 1.510     0|
 1.510 =<Nd< 1.511     0|
 1.511 =<Nd< 1.512     0|
 1.512 =<Nd< 1.513     0|
 1.513 =<Nd< 1.514     0|
 1.514 =<Nd< 1.515     0|
 1.515 =<Nd< 1.516     0|
 1.516 =<Nd< 1.517     0|
 1.517 =<Nd< 1.518     0|
 1.518 =<Nd< 1.519     0|
 1.519 =<Nd< 1.520     0|
 1.520 =<Nd< 1.521     0|
 1.521 =<Nd< 1.522     0|
 1.522 =<Nd< 1.523     0|
 1.523 =<Nd< 1.524     0|
 1.524 =<Nd< 1.525     0|
 1.525 =<Nd< 1.526     0|
 1.526 =<Nd< 1.527     0|
 1.527 =<Nd< 1.528     0|
 1.528 =<Nd< 1.529     0|
 1.529 =<Nd< 1.530     0|
---------------------------+---------+---------+---------+---------+---------+---------+
```

図9　原口IV層から検出される火山ガラスの屈折率測定結果

```
*** Original Data Sheet ***

Series Name  : ﾀﾞｻﾞｲﾌ ｷｮｳｲｸｲｲﾝｶｲ
Sample Name  : ﾊﾙｸﾞﾁ 5ｿｳ
Analist      : Araki
Material     : gl.
Immersion Oil: No.3.8  (Nd=1.51907-0.000393·t)

(Ascent+Descent)/2

  1.4990  1.4978  1.4972  1.4989  1.4988  1.4973  1.4990  1.4988  1.4979  1.4972
  1.4969  1.4988  1.4986  1.4983  1.4993  1.4986  1.4982  1.4990  1.4972  1.4993
  1.4964  1.4995  1.4990  1.4983  1.4973

                   count   min.    max.    range   mean    st.dev. skew.
Total     :         25     1.4964  1.4995  0.0031  1.4983  0.0009 -0.4684

*** Histogram ***     * =  1

                           0         10        20        30        40        50        60
---------------------------+---------+---------+---------+---------+---------+---------+
 1.490 =<Nd< 1.491     0|
 1.491 =<Nd< 1.492     0|
 1.492 =<Nd< 1.493     0|
 1.493 =<Nd< 1.494     0|
 1.494 =<Nd< 1.495     0|
 1.495 =<Nd< 1.496     0|
 1.496 =<Nd< 1.497     2|**
 1.497 =<Nd< 1.498     7|*******
 1.498 =<Nd< 1.499     9|*********
 1.499 =<Nd< 1.500     7|*******
 1.500 =<Nd< 1.501     0|
 1.501 =<Nd< 1.502     0|
 1.502 =<Nd< 1.503     0|
 1.503 =<Nd< 1.504     0|
 1.504 =<Nd< 1.505     0|
 1.505 =<Nd< 1.506     0|
 1.506 =<Nd< 1.507     0|
 1.507 =<Nd< 1.508     0|
 1.508 =<Nd< 1.509     0|
 1.509 =<Nd< 1.510     0|
 1.510 =<Nd< 1.511     0|
 1.511 =<Nd< 1.512     0|
 1.512 =<Nd< 1.513     0|
 1.513 =<Nd< 1.514     0|
 1.514 =<Nd< 1.515     0|
 1.515 =<Nd< 1.516     0|
 1.516 =<Nd< 1.517     0|
 1.517 =<Nd< 1.518     0|
 1.518 =<Nd< 1.519     0|
 1.519 =<Nd< 1.520     0|
 1.520 =<Nd< 1.521     0|
 1.521 =<Nd< 1.522     0|
 1.522 =<Nd< 1.523     0|
 1.523 =<Nd< 1.524     0|
 1.524 =<Nd< 1.525     0|
 1.525 =<Nd< 1.526     0|
 1.526 =<Nd< 1.527     0|
 1.527 =<Nd< 1.528     0|
 1.528 =<Nd< 1.529     0|
 1.529 =<Nd< 1.530     0|
---------------------------+---------+---------+---------+---------+---------+---------+
```

図10　原口V層から検出される火山ガラスの屈折率測定結果

ることができる。したがって、上記のデータはただ原ロV層から原ロⅡ層がAT 火山灰降灰の時期から現在までの間に堆積したことを示すにすぎない。

上限の年代を決めるために、AT 火山灰より新期の降灰であるK－Ah （アカホヤ）火山灰に注目してみる。原ロ遺跡のⅡ層からV層の分析結果にはアカホヤ火山灰に由来すると思われる火山ガラスは検出されなかった。アカホヤ火山灰は AT 火山灰と同様に非常に大規模の噴火の産物であり、アカホヤ火山灰降灰後の地層では現在にいたるまでアカホヤ火山灰と AT 火山灰に由来する火山ガラスが混在していることが検出される。福岡北部でもたとえば奈多海岸の表層土壌の分析結果（図11）に示されるように1.500前後の屈折率の AT 火山灰由来の火山ガラスのグループと1.510前後の屈折率のアカホヤ火山灰由来の火山ガラスのグループにはっきりと区分される。したがって、原ロⅡ層からV層の地層でアカホヤ火山灰起源の火山ガラスが全く検出されなかったことは、これらの地層の堆積がアカホヤ火山灰の降灰より以前に終っていた可能性が高い。

```
                  *** Grouping Data Sheet ***

Series Name  : ﾌｸｵｶ ｳﾐﾉﾅｶﾐﾁ
Sample Name  : ﾅﾀ ｸﾛﾎﾞｸ J                                              88/05/27
Analist      : TAKEMURA                                                09:47:19
Material     : glass
Immersion Oil: No.3.8  (Nd=1.51907-0.000393·t)

(Ascent+Descent)/2

Group. 1
  1.4969  1.4970  1.4975  1.4979  1.4980  1.4982  1.4984
Group. 2
  1.5089  1.5090  1.5092  1.5092  1.5093  1.5094  1.5094  1.5095  1.5096  1.5096
  1.5097  1.5098  1.5100  1.5101  1.5102  1.5104  1.5105  1.5106  1.5106  1.5109
  1.5111  1.5111  1.5115

                    count   min.    max.    range   mean    st.dev. skew.
Group. 1  :           7     1.4969  1.4984  0.0015  1.4977  0.0006 -0.2773
Group. 2  :          23     1.5089  1.5115  0.0026  1.5100  0.0007  0.3804

Total     :          30     1.4969  1.5115  0.0146  1.5071  0.0053 -1.1569

*** Histogram ***      * =  1

                          0        10        20        30        40        50        60
--------------------------+---------+---------+---------+---------+---------+---------+
 1.490 =<Nd< 1.491      0|
 1.491 =<Nd< 1.492      0|
 1.492 =<Nd< 1.493      0|
 1.493 =<Nd< 1.494      0|
 1.494 =<Nd< 1.495      0|
 1.495 =<Nd< 1.496      0|
 1.496 =<Nd< 1.497      1|*
 1.497 =<Nd< 1.498      3|***
 1.498 =<Nd< 1.499      3|***
 1.499 =<Nd< 1.500      0|
 1.500 =<Nd< 1.501      0|
 1.501 =<Nd< 1.502      0|
 1.502 =<Nd< 1.503      0|
 1.503 =<Nd< 1.504      0|
 1.504 =<Nd< 1.505      0|
 1.505 =<Nd< 1.506      0|
 1.506 =<Nd< 1.507      0|
 1.507 =<Nd< 1.508      0|
 1.508 =<Nd< 1.509      1|*
 1.509 =<Nd< 1.510     11|***********
 1.510 =<Nd< 1.511      8|********
 1.511 =<Nd< 1.512      3|***
 1.512 =<Nd< 1.513      0|
 1.513 =<Nd< 1.514      0|
 1.514 =<Nd< 1.515      0|
 1.515 =<Nd< 1.516      0|
 1.516 =<Nd< 1.517      0|
 1.517 =<Nd< 1.518      0|
 1.518 =<Nd< 1.519      0|
 1.519 =<Nd< 1.520      0|
 1.520 =<Nd< 1.521      0|
 1.521 =<Nd< 1.522      0|
 1.522 =<Nd< 1.523      0|
 1.523 =<Nd< 1.524      0|
 1.524 =<Nd< 1.525      0|
 1.525 =<Nd< 1.526      0|
 1.526 =<Nd< 1.527      0|
 1.527 =<Nd< 1.528      0|
 1.528 =<Nd< 1.529      0|
 1.529 =<Nd< 1.530      0|
--------------------------+---------+---------+---------+---------+---------+---------+
```

図11 福岡奈多海岸の表層土壌より検出される火山ガラスの屈折率測定結果

以上の２点より分析された原ロⅡ層からV層までの地層は AT 火山灰降灰後、アカホヤ火山灰降灰前に堆積したと考えられ、年代としては、約25,000年前から約6,300年前までの間の時期の堆積であることがわかる。

引 用 文 献

檀原　徹・山下　透・佐藤良二・横山卓雄（1985）：温度変化法による火山ガラスの屈折率精密測定．　日本地質学会第92年学術大会講演要旨、61.

町田　洋・新井房夫（1976）：広域に分布する火山灰－姶良 Tn 火山灰の発見とその意義－．　科学、46，339－347.

町田　洋・新井房夫（1978）：南九州鬼界カルデラから噴出した広域テフラーアカホヤ火山灰．　第四紀研究、17，143－163.

町田　洋・新井房夫（1983）：広域テフラと考古学．第四紀研究、22，134－148．

町田　洋・新井房夫・小田静夫・遠藤邦彦・杉原重夫（1984）：テフラと日本考古学－考古学研究と関係するテフラのカタログー．　古文化財の自然科学的研究、865－928．

町田　洋・新井房夫・百瀬　貢（1985）：阿蘇４火山灰－分布の広域性と後期更新世示標層としての意義－．　火山、第２集、30、49－70．

松本英二・前田保夫・竹村恵二・西田史朗（1987）：姶良 Tn 火山灰（AT）の^{14}年代．　第四紀研究、26，79－83．

小野晃司・松本徰夫・宮久三千年・寺岡易司・神戸伸和（1977）：竹田地域の地質．地域地質研究報告（５万分の１図幅）、地質調査所、145ｐ．

竹村恵二・檀原　徹（1987）：遺跡土壌中の火山灰降灰層準の認定－兵庫県篠山板井遺跡を例として－．　第四紀研究、26，69－78．

竹村恵二・檀原　徹（1988）：土壌中火山ガラス抽出分析による遺跡の地層対比および編年－温度変化型屈折率測定装置を使用して－．　考古学と自然科学（日本文化財科学会誌）、第20号、35－50．

WATANABE, K.（1978）：Studies on the Aso pyroclastic flow deposits in the region to the west of Aso caldera, southwest Japan, Ⅰ:Geology. Mem. Fac. Educ., Kumamoto Univ., Nat. Sci., 27，97－120．

WATANABE, K.（1979）：Studies on the Aso pyroclastic flow deposits in the region to the west of Aso caldera, southwest Japan, Ⅱ:Petrology of the Aso－4 pyroclastic flow deposits. Mem. Fac. Educ., Kumamoto Univ., Nat. Sci., 28，75－112．

横山卓雄・檀原　徹・山下　透（1986）：温度変化型屈折率測定装置による火山ガラスの屈折率測定．　第四紀研究、25，21－30．

横山卓雄・山下　透（1986）：温度変化型屈折率測定装置（RIMS86）による斜方輝石、角閃石の屈折率測定の試み．京都大学教養部地学報告（九十九地学）、21，30－36．

吉川周作（1976）：大阪層群の火山灰層について．　地質学雑誌、82，479－515．

吉川周作（1981）：堆積物中の火山ガラスの研究－大阪平野の更新～完新統について－．　第四紀研究、20，75－87．

Ⅶ．小　　結

時代を追って原ロ遺跡を概観することにより、小結としたい。

旧石器時代

太宰府においては今日まで旧石器時代の文化層を発掘するには至っていないが、今回の地質学的調査により、特に標高30～40mの平地上においてフェイズⅡのＡＴ以降、所謂旧石器時代後期以降に人類の活動は可能な状況にあったと思われ、今後当該地域では今回検出した黒色粘土（Fig. 12. Ⅳ層）までの掘り下げが必要となってきた。

本遺跡から出土した該期のものはＣ区赤褐色粘土層から出土したチャート製の縦長剝片が掲げられる。（山村）

縄文時代

今回の調査ではＢ区において検出した後期もしくは晩期の包含層の確認にとどまったが、上層遺構中などで土器、石器等を検出している。これらの遺物のほとんどは特定の時期決定をし得ないものばかりであるが、１SI 200から出土した轟Ｂ式を除けば、おおよそ後期から晩期に納まるものと思われる。

近接する宮ノ本遺跡は高い所で標高70mほどの平野に接する小丘であるが、これまでの調査で尾根の頂部や落ち際で縄文時代後・晩期の土器が採集されており、この時期になって山での人々の活動が活発化していることを示している。今回、原ロ遺跡Ｂ区で調査したものは、明確ではないが焚火等の行為を示しており、住居跡やピット等の遺構を伴わないキャンプサイト的な存在ではないかと考えている。今後調査が予定されている佐野地区の遺跡群は山と平地とにまたがっており、山での縄文人の活動と集落とを繋ぐ資料を提供してくれるものと期待している。（山村）

弥生時代

弥生時代の遺構はＣ区西端の１SI 100と１SI 200の中期初頭頃とみられる２棟の住居跡と、それを中心として東側へ展開するピットや土壙がある（Fig. 45）。これら２棟の住居跡は埋土の状況や出土した遺物から、近接した時期、もしくは同時に存在していた可能性があるものである。また１SI 200出土の甕と１SK 018出土の甕とは接合する可能性があり、集落の広がり方を考えるに当たって両者の関連を整理してゆく必要があろう。

本文中に述べたとおり、微高地の中心は調査区の西側にあり、集落本体もそこにあるものと思われ、集落の在り方については隣接地の調査結果を待つほかない。今回の調査で検出された遺構

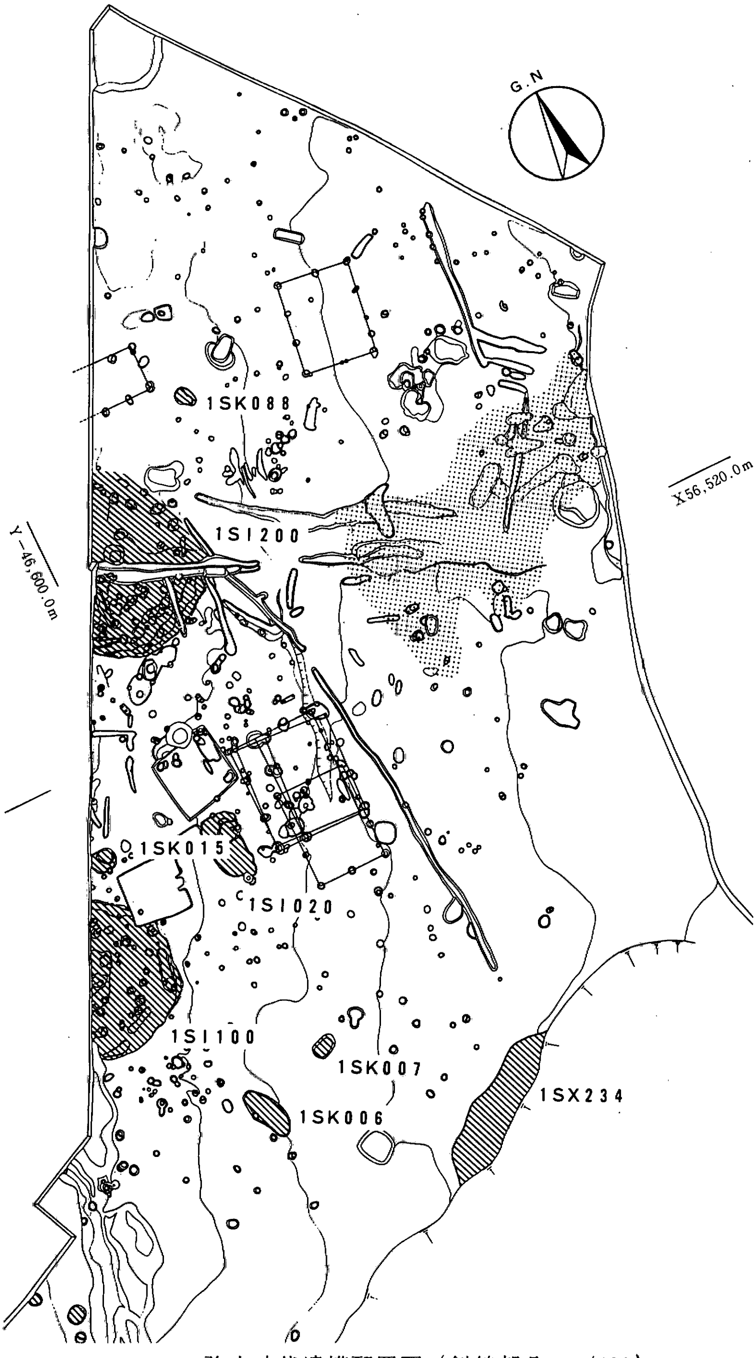


Fig. 45 弥生時代遺構配置図（斜線部分・1/400）

群は、その集落の東限を示すものと思われる。

また、出土した土器の様相は城の越式にある程度の割合で板付Ⅱ式が共伴するものであり、特に壺形土器についてはその器形の持つ属性が一般的なものではないことが注目される。（山村）

古墳時代

後期の住居跡が２棟建築されているが、この２棟は近接し、辺の方向性を同じくし（東西南北に近い）、プランの規模も同一と言えるほど近似している。その反面で竈の据え付け方向が異なるといった相異点も見られる。土器の様相は両者とも同一型式に納まるものであるが、両者ともに須恵器は焼け歪みが大きなものまで所有しており、当該期の窯跡である宮ノ本窯や長浦窯が至近距離にある点と併せて、それらとの関連が注目される（Fig. 5）。また、両住居跡が所有する須恵器に用いられているヘラ記号が互いに異った群同志である点にも注目されよう。

住居跡の構造については、両者とも主柱穴と断定できるような深いピットを検出し得なかった点に注目してみたい。

筑前地域の古墳時代における住居構造の変換は、5世紀代に長方形プランから方形プランに移行するのに伴い、主柱穴が2本から4本になり、柱構造の変化という大きな節目をむかえ、さらに7世紀前半代にはプランが小規模化する一方で主柱穴の位置が不明確なタイプのものが出現するという大きな2つの節目がある。主柱穴が不明確もしくはごく浅いものしかないといったものは、竪穴式住居としては末期の8世紀代まで存続している。上部構造については推定の域を出ないが、主柱穴が明確でないものは2方向から合掌組に屋根構造を作る方法が推定され、浅い窪み状のものが四隅にあるものについては、簡単な礎板建ちの四本柱構造を考えている。詳細な検討については別途論述したい。（山村）

古　代

この時期に該当する明確な遺構は、C区の1SK005に限られる。奈良・平安期の土器は各地区に散見され、特にA・B区では越州窯系青磁埦の断片も出土しており、周辺に遺構の存在を推定することは可能であろう。しかし、C区東南側において池状遺構である1SG060が存在し、人間の活動を阻んでいた可能性も想定しておく必要があろう。（山村）

中　世

この期における検出遺構は掘立柱建物、溝、溜状遺構及び多くのピット群である。以下掘立柱建物と溝について簡単に触れ、この項の責を果したい。

掘立柱建物

今次の調査で検出された5棟の建物は、柱穴埋土の状況から13～14世紀頃のものと推定されるが、切り合い関係や重複状況、方向性から3時期に分けられるようである。

方向性の上からはその南北軸が座標北に対して0°～1°西に振る1SB045、055、080の一群と、3°～8°東に振る1SB035、065の一群とに区分し得る。これらは切り合いの上から東に振る一群が新しいものと推定される。西に振る一群のうち1SB045と1SB055は重複しており同時存在を考える事は不可能である。よって短時間の間ではあるが掘立柱建物の時期を3時期に区分して捉えておくこととする。しかし個々の存続期間や同一の方向性をもった建物の前後関係については今回得られた資料からでは論究するに至れていない。周辺には同時期と判断されるピットが多数存在すると共に、遺構面が著しい削平を受けている事を考慮するとさらに多くの建物の存在が推定されるが、現状ではここまでの復原としておく。（狭川）

溝

A・B区で検出した溝のうち、1SD154、160、175の3者について述べておきたい。

1 SD154と160は共にN－34°－E前後で方向性が等しく、両者の心々間は9.8mを測る。1 SD175はこれに直交し、その地点から西へ約17.0m付近で1 SD154、160共に折れ曲がる（又は分岐する)。3者の溝は埋土も等しく、その出土遺物から13世紀末～14世紀前半頃の所産と推定され、同一規格上で設営されたものと考えられる。

この3つの溝が何を示すかは速断できないが、中世の一時期に存在した条里の痕跡である可能性も否定できないと思われる。

今後の佐野地区遺跡群の調査で、同時期の溝の確認は重要な項目の一つと成り得よう。(狭川)

近　世

明確な近世の遺構についてはA区の1 SD 152を掲げ得るにすぎない。しかし、今回まとまって出土している明代の染付や森田分類のD群の白磁、さらに古唐津などの輸入・国産陶磁器の出土は中世末から近世にかけての当地での経済活動を示すものであると思われる。近世「迎(むかい)佐野」村の成立に関わる時期であり、今後の資料の増加に希望を持ちたい。　(山村)

Ⅷ. お わ り に

現代社会での都市や地域問題の多くは生活基盤、生活体制、生活景観、生活理念の間に不均衡がみられたり、各領域間の変化の速度が異なったりすることによって起きるとされている。人間中心の都市計画を考えることは、都市や地域の生活とその構造上の問題点を明確にし、新たな展望を示さねばならない。昨今の日本に於ける大規模な都市や都市周辺の構造の画一的な再構築作業は、世界の民主国家下にあっては異例のスピードで進められつつある。理念や体制を伴わない景観上のみの社会変化には、すでに、少なからず歪みが生じている。

歴史学としての一手段である考古学が、現状では過去の事実の追及に止まっているのは事実である。歴史学自体が現在の社会変化に対するネガティブな示唆を与えるものであることが忘れられがちな現状も否定できない。物質文化を通して歴史を構築してゆく考古学（特に変化事象を研究の対象としている側面が強いが）は、過去の生活の基盤、体制、景観、理念の領域に対してプライマリーにみることのできる場合とそうでない場合とがあるが、考古学は過去に記された文字から歴史を構成してきた史学の文字という限定された情報のもつ地域的、階層的制限を越え、今まで情報のなかった地域や階層をも探究し得るという点で大きな責任を背負っている。

調査が進展し歴史の空白地域が埋められている陰で、その証人たる遺跡が失われ、調査成果が報告書という形での一方的な文字伝達に終止しがちなのも皮肉な現象ではあるが、まずは将来的に全ての資料を整理作業終了後に公開してゆく構えで、その責務の一担を果したい。

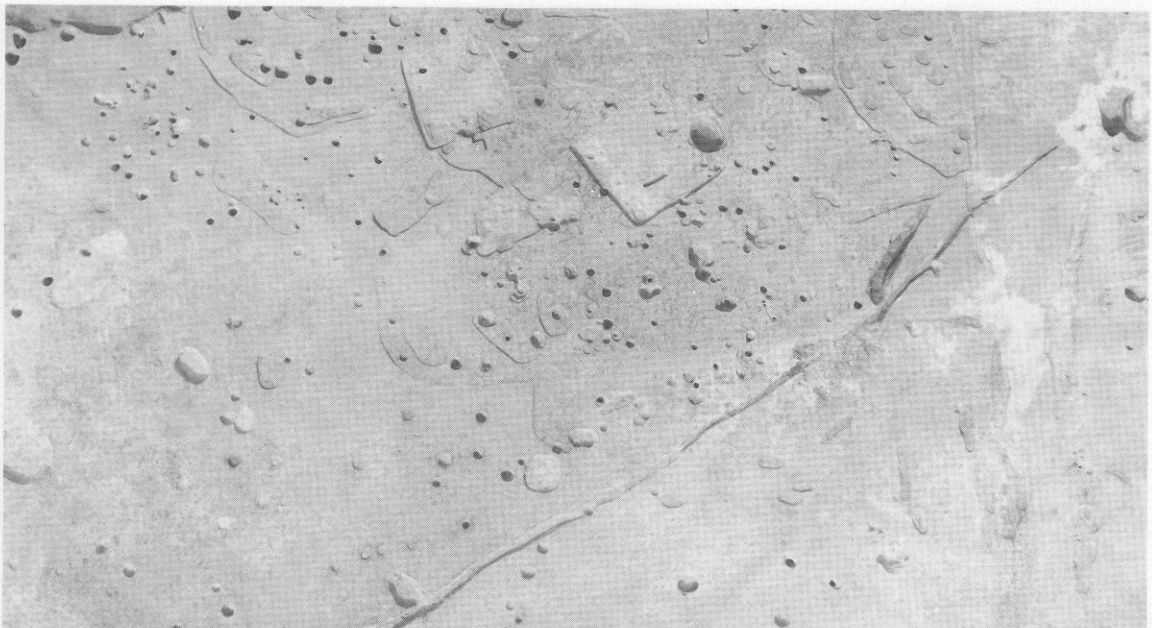
図　　　版

原口遺跡調査前全景（アジア航測株式会社提供）

C区全景（空中写真）

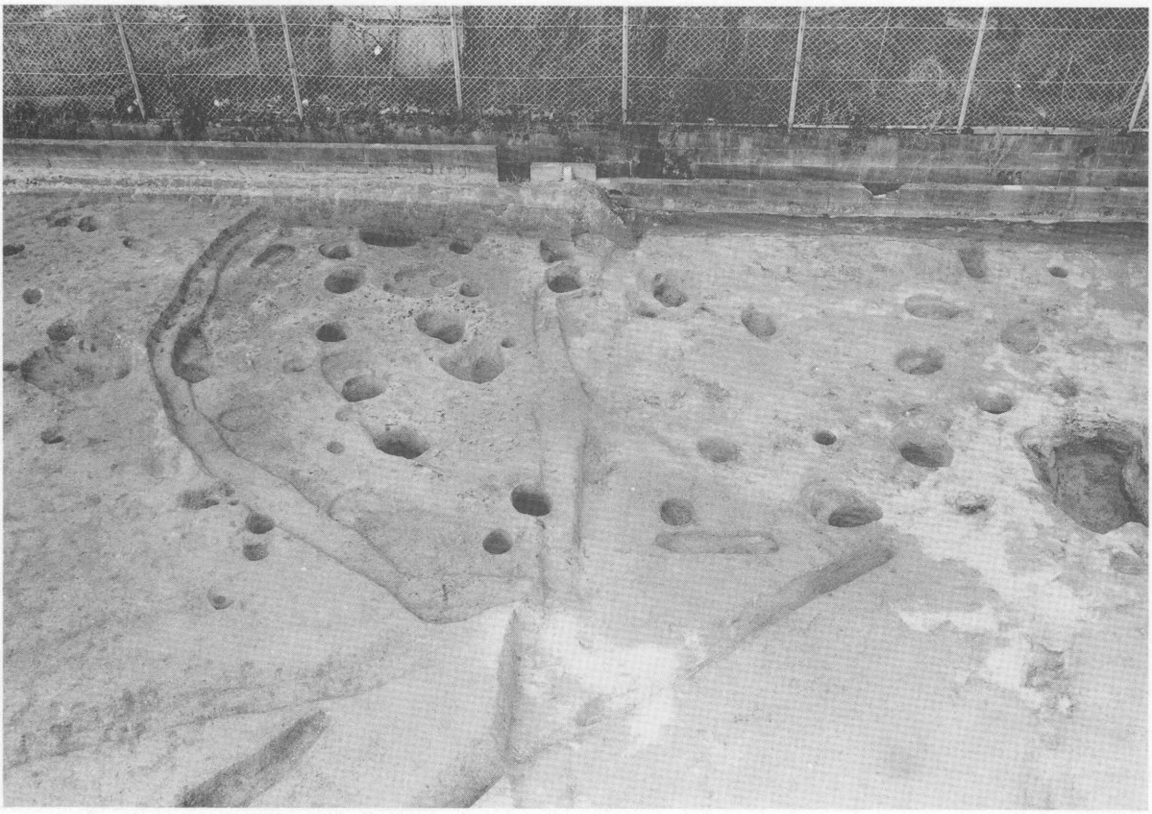
A－B区全景（空中写真）

C区遺構群（弥生時代住居未掘時）

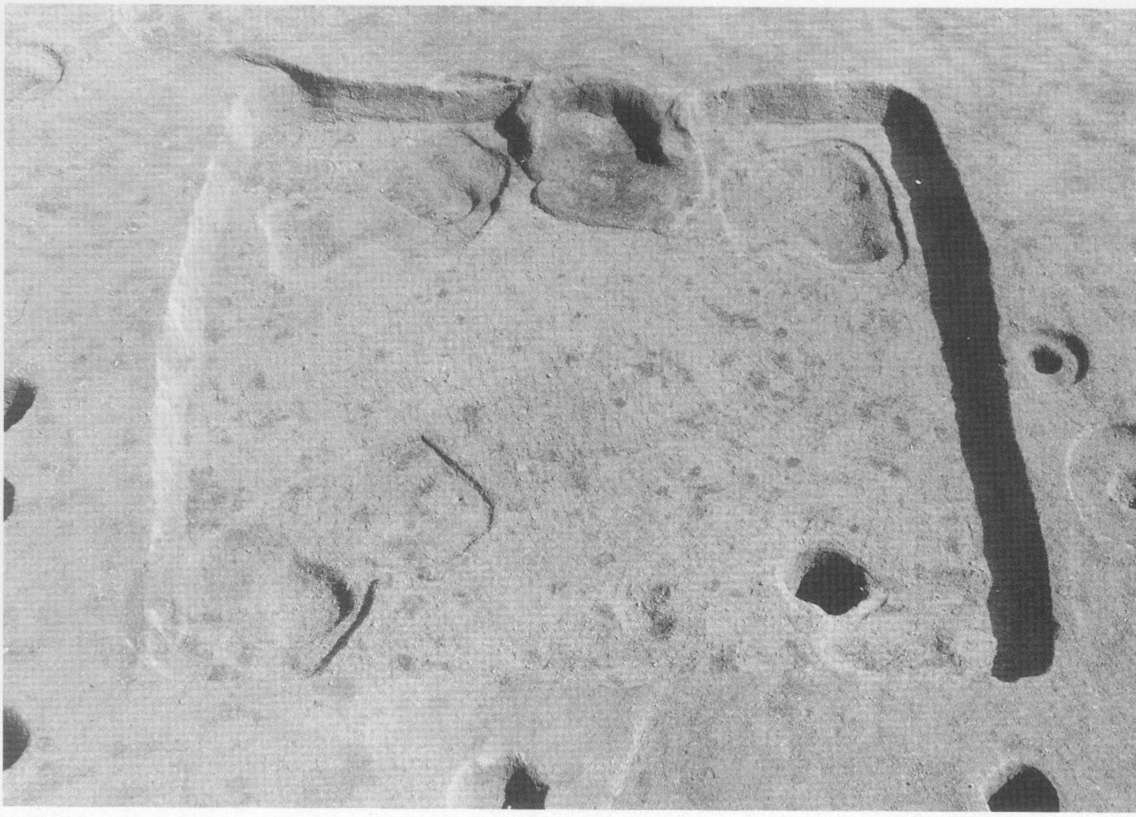


C区遺構群完掘（空中写真）

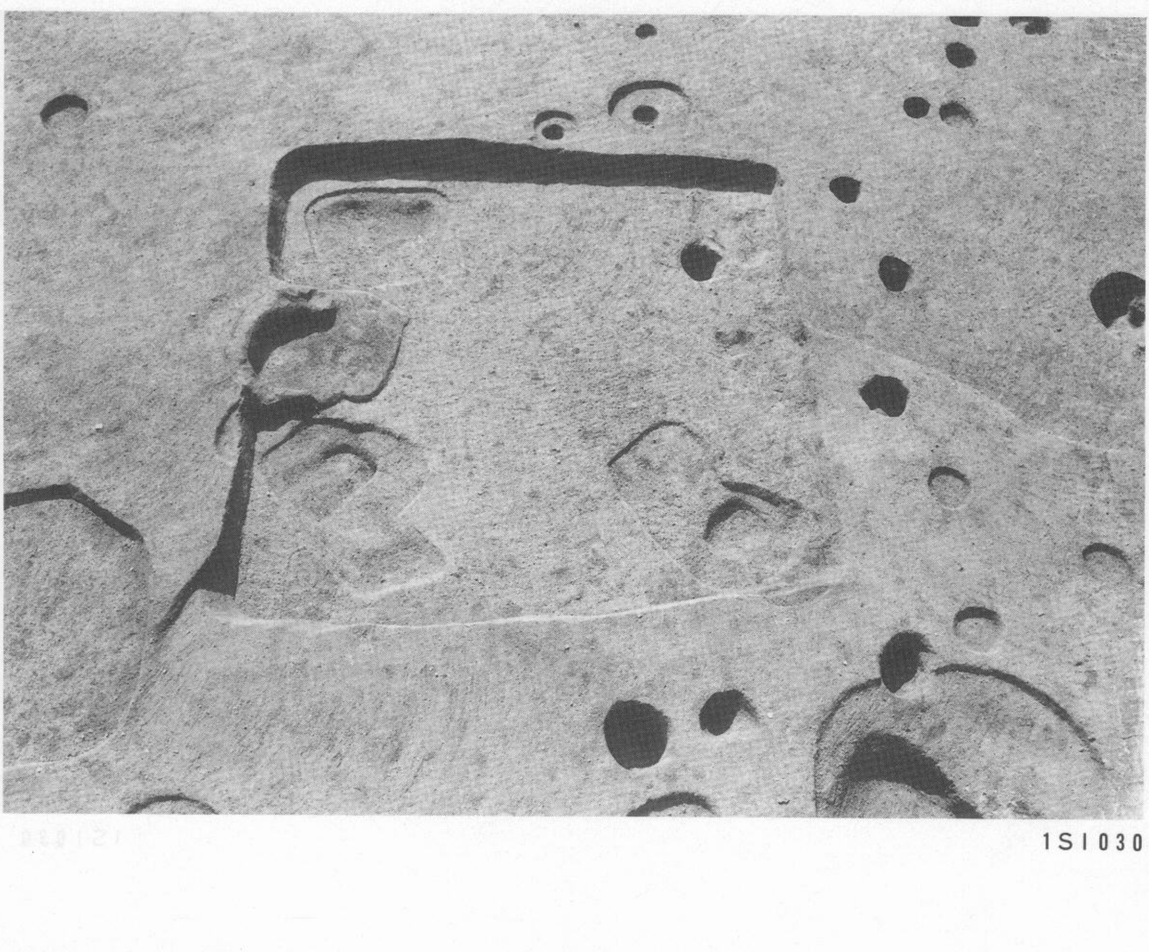
1SI100



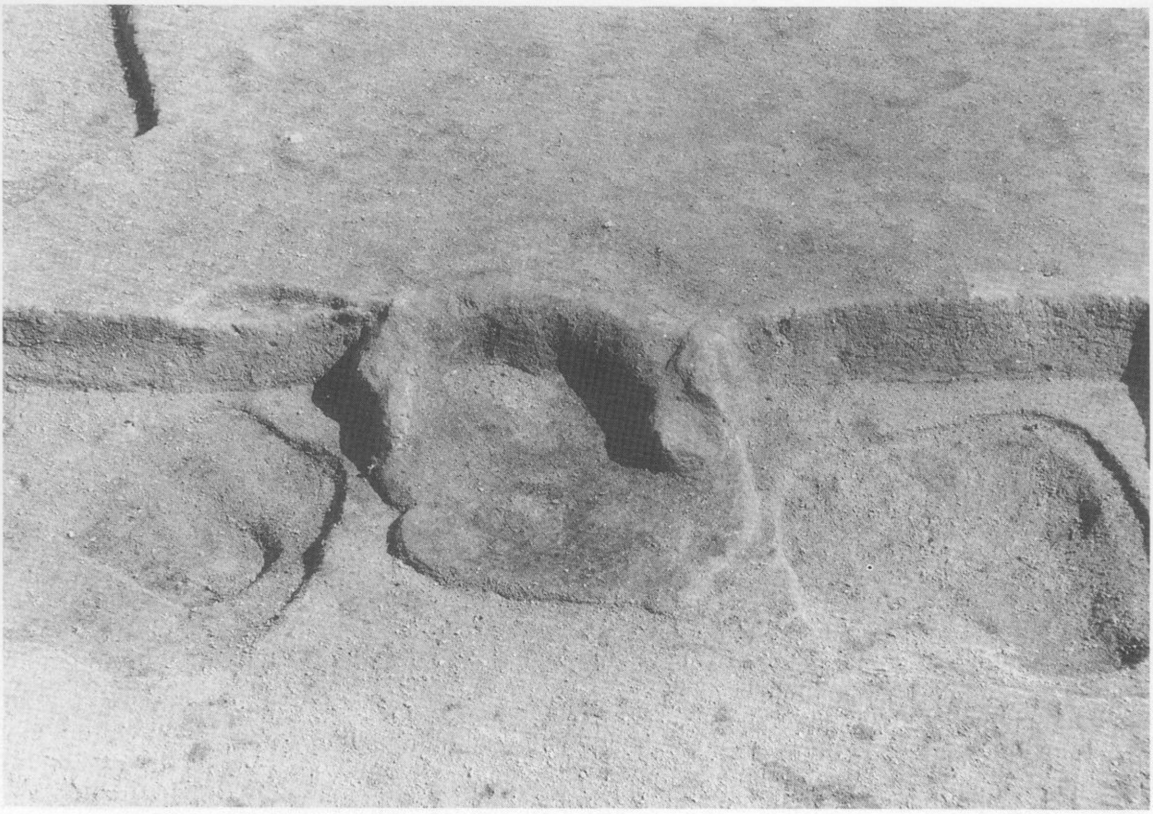
1SI200



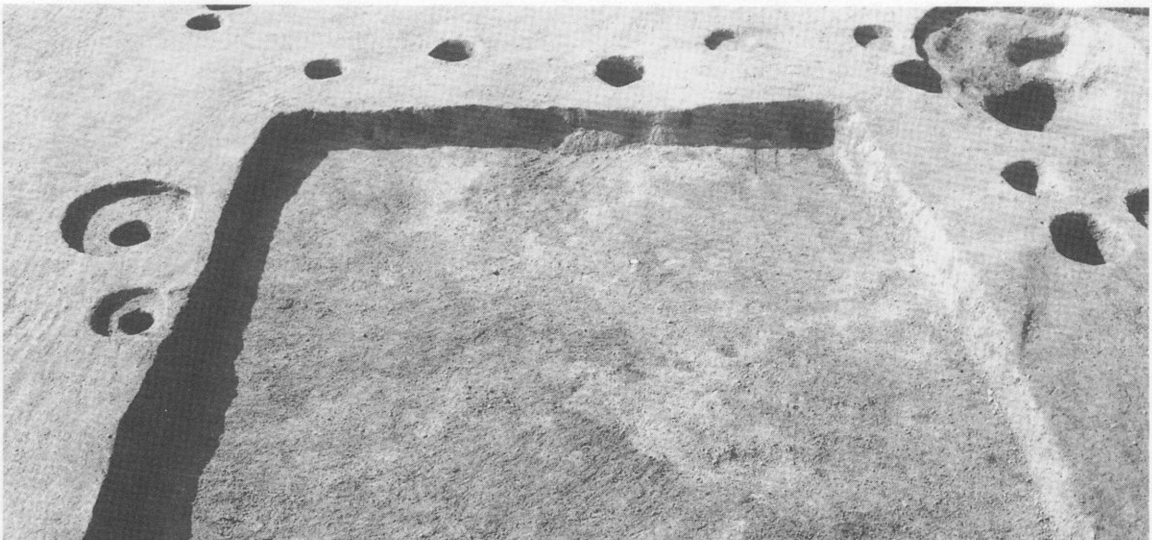
1SI030



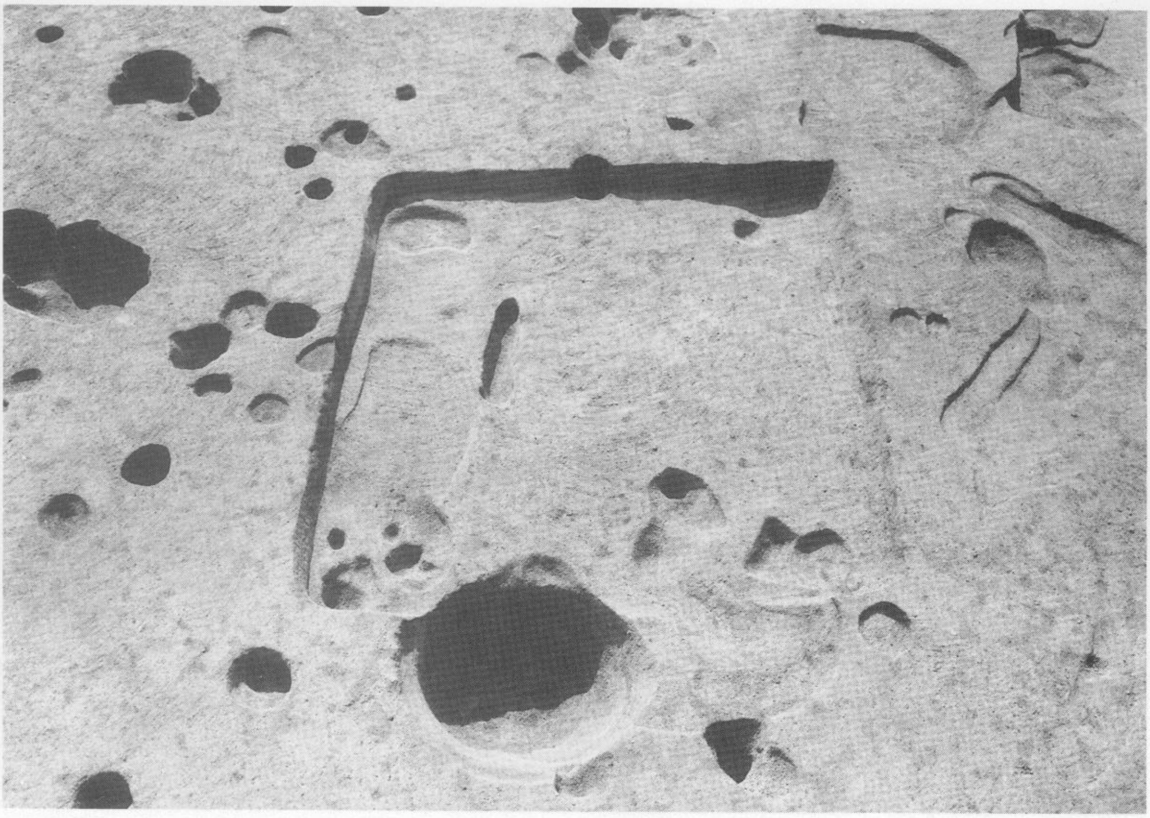
1SI030



1SI030竈検出状況

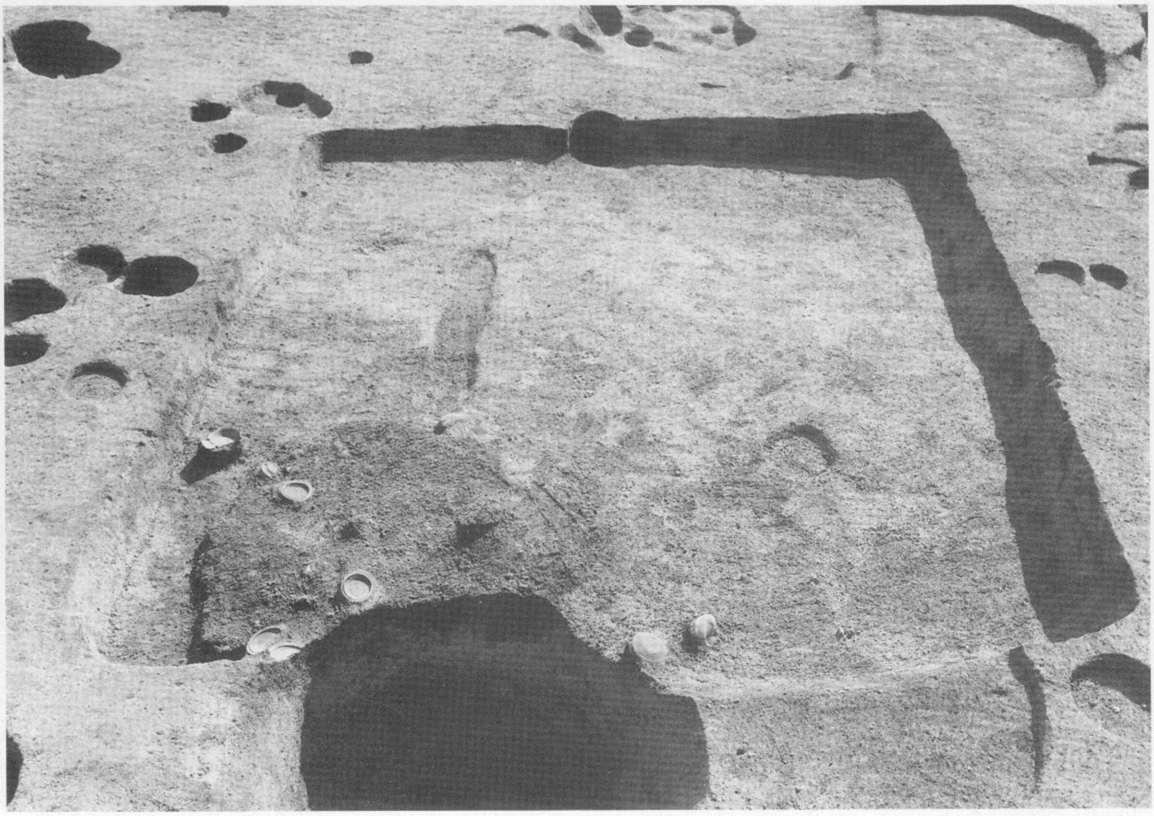


1SI030



1SI040

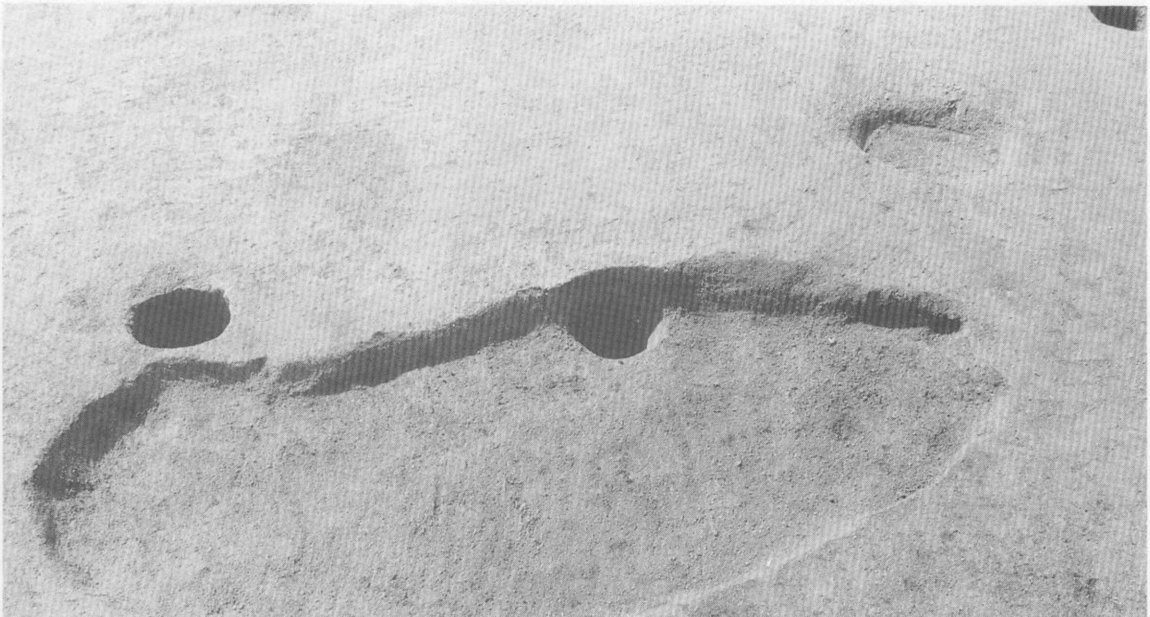
1SI040



1SI040遺物検出状況

1SI040炭層検出状況

1SK005



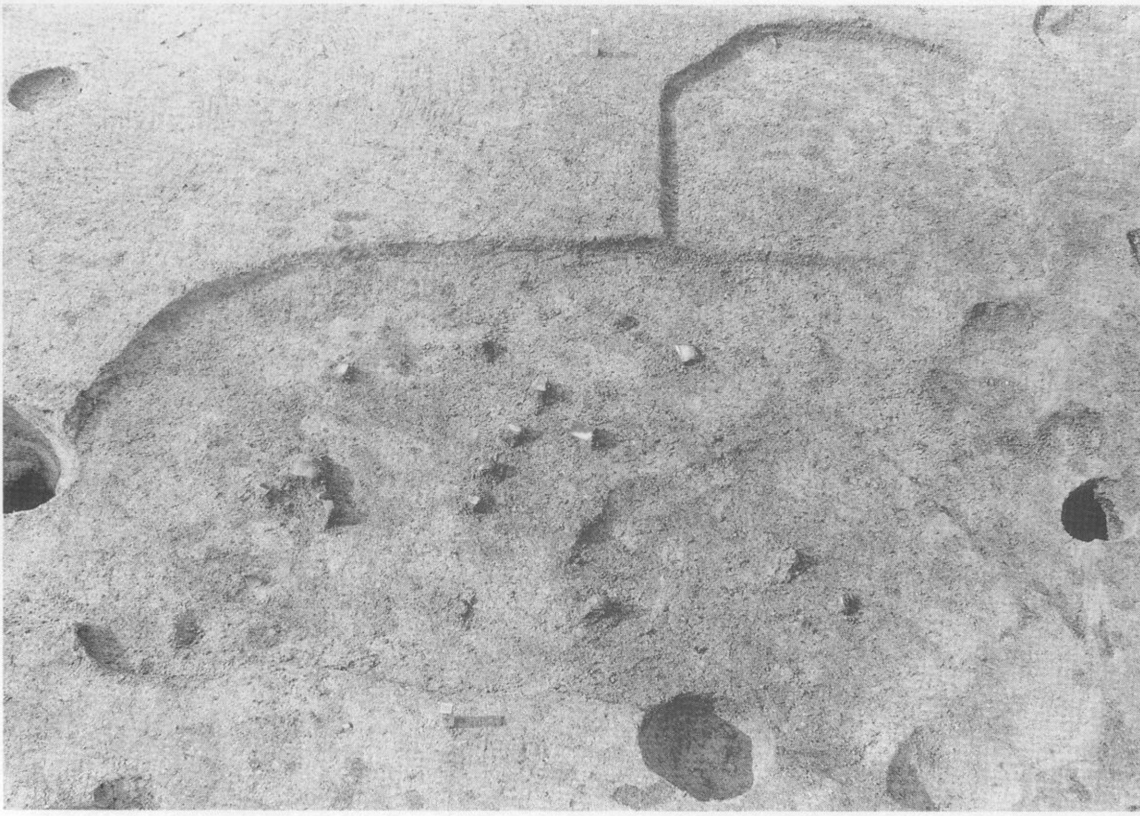
1SK006

1SK007

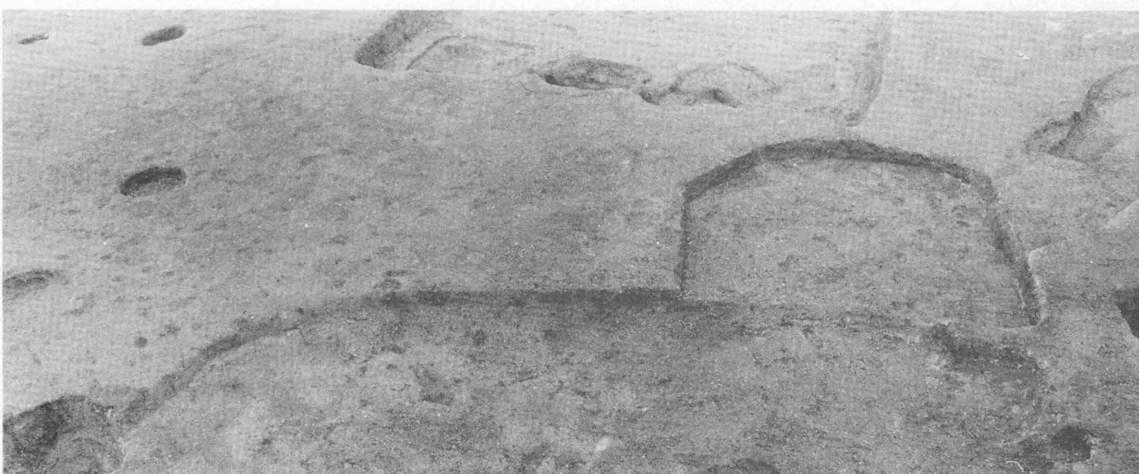
1SK010

1SK015

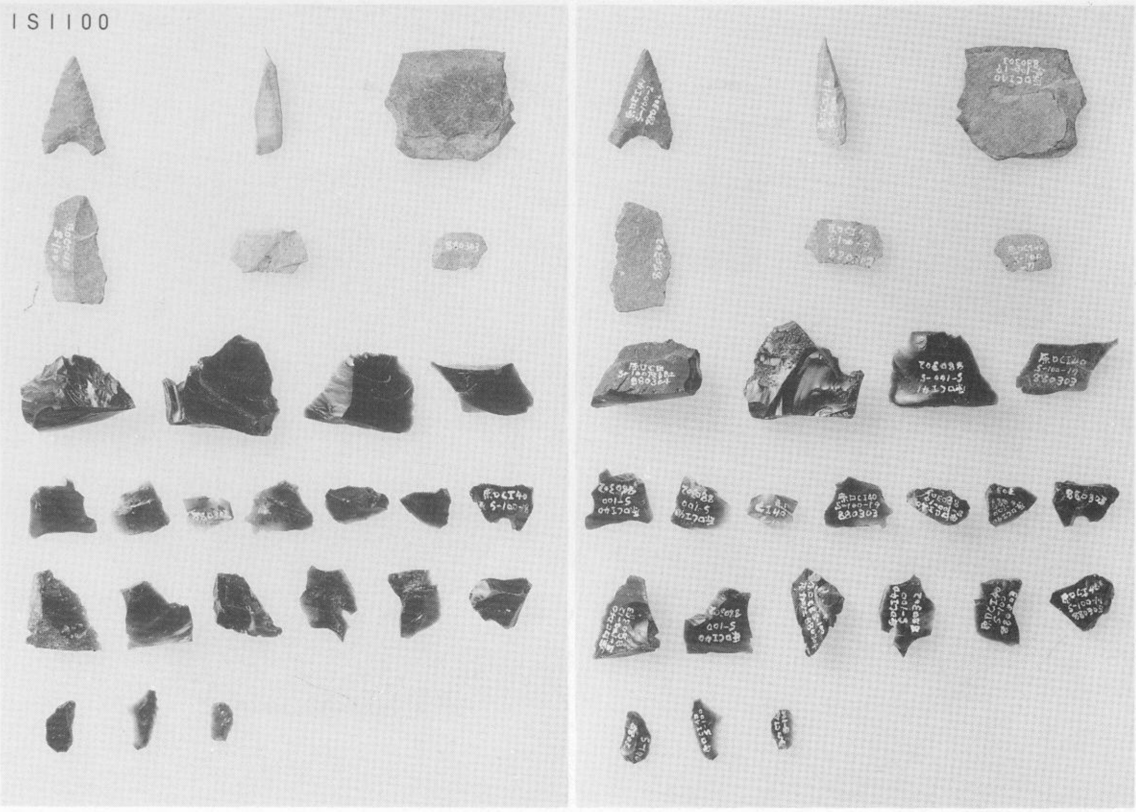
1SK018



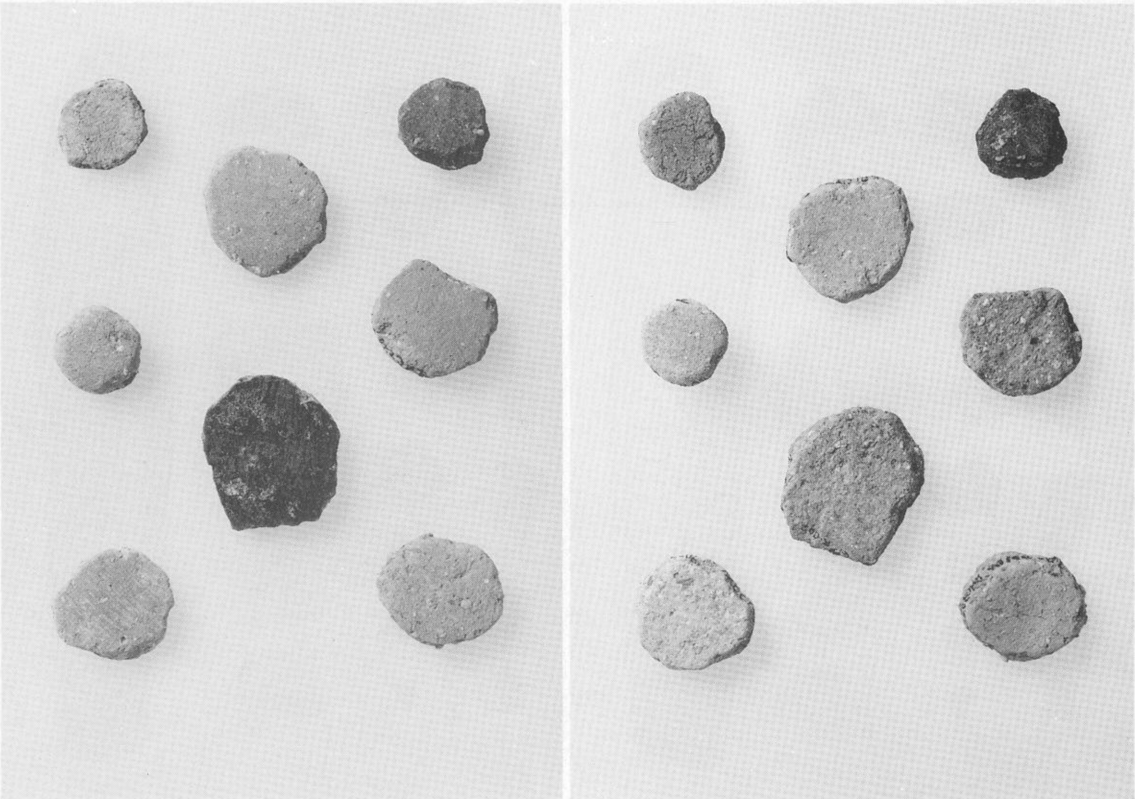
1SK020遺物検出状況



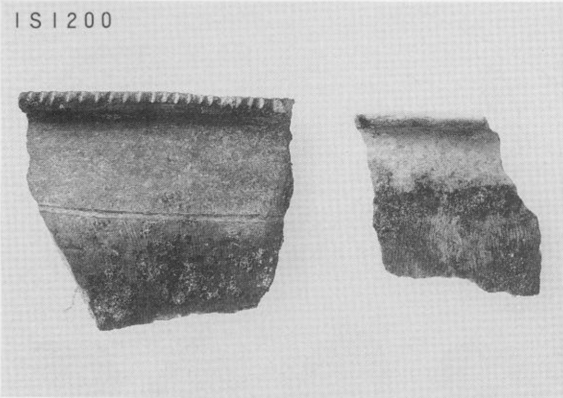
1SK020完掘状況

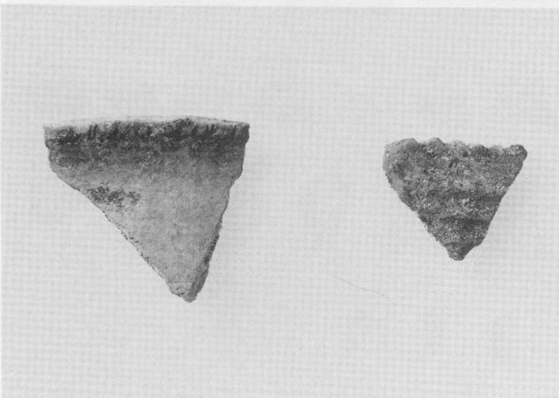


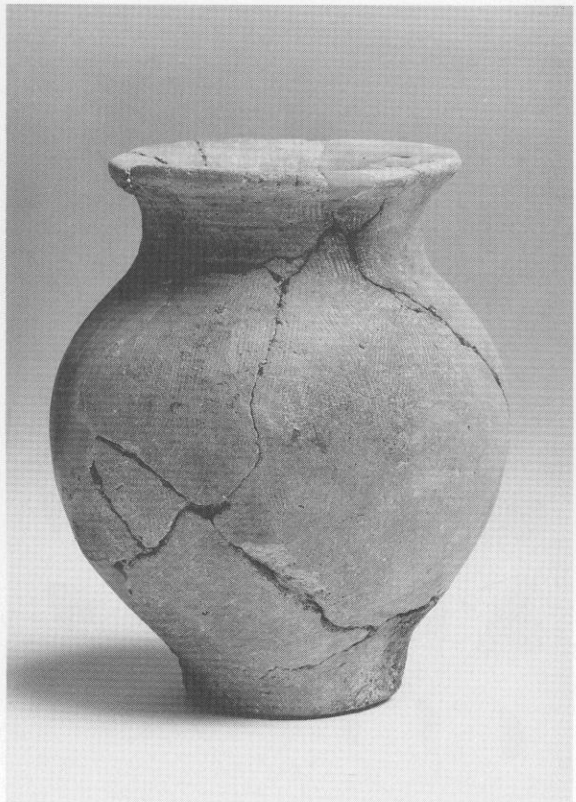
1SI100出土石器

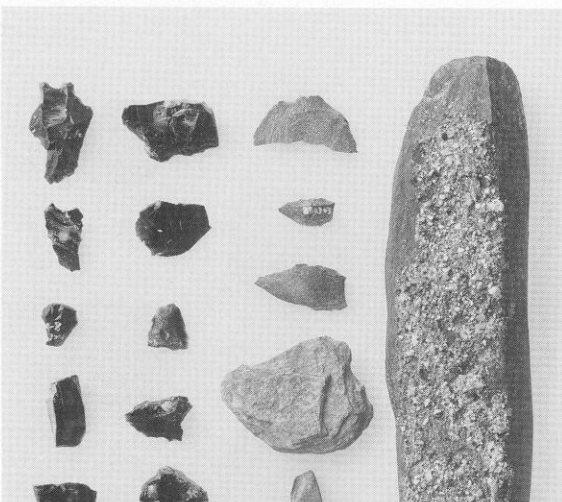


1SI100出土土器片加工品



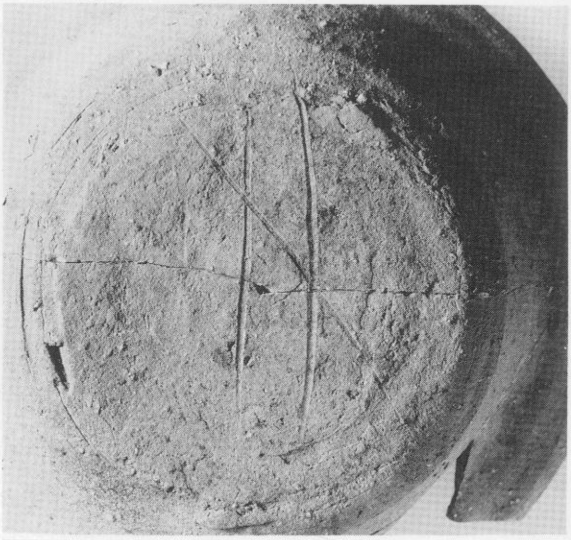


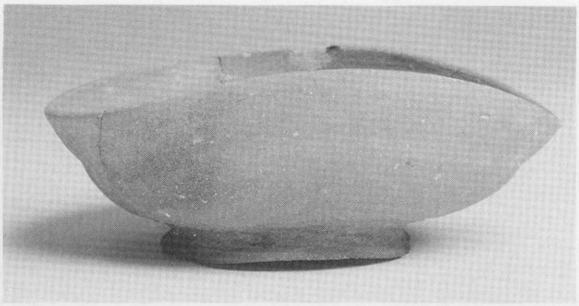


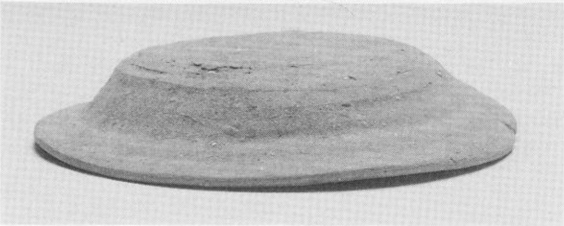


1SI200 出土土器、石器

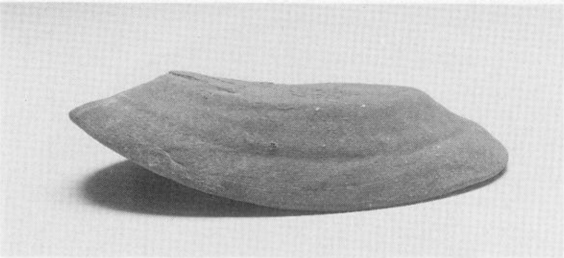
1SI030



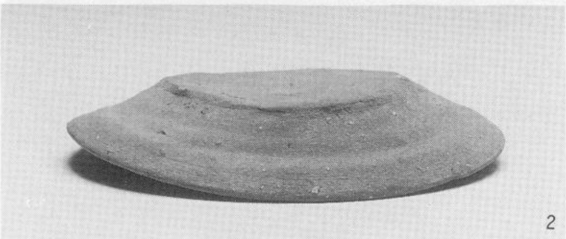




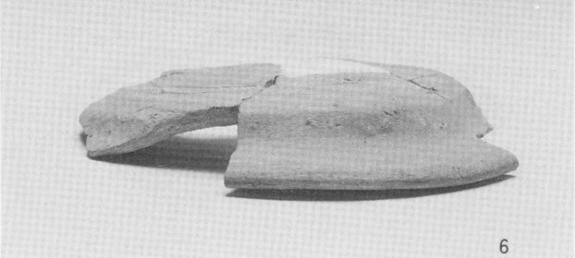
1SI040



3



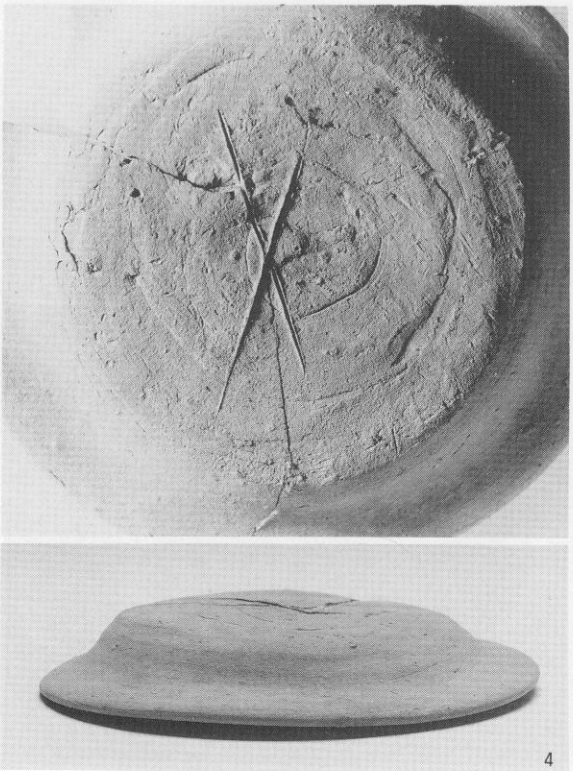
2



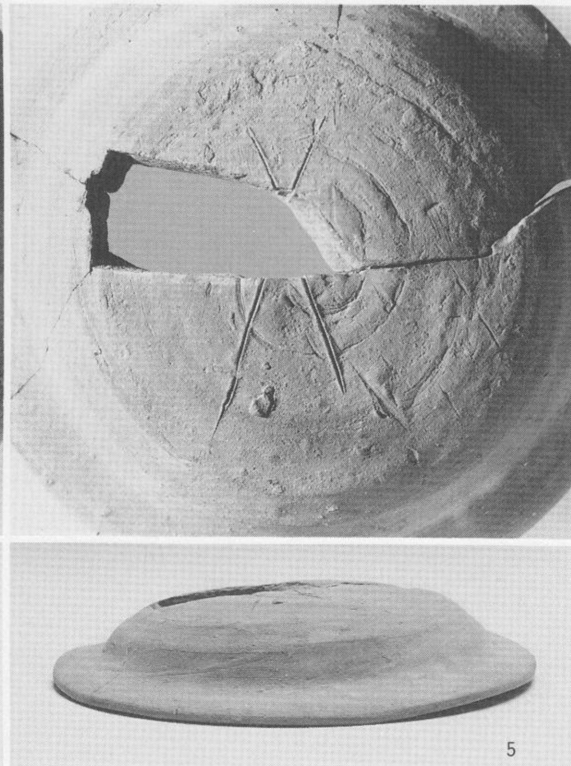
6

1SI030、040出土土器

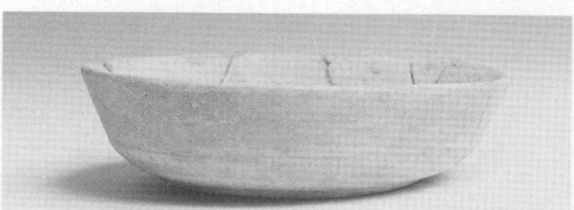
1SI040



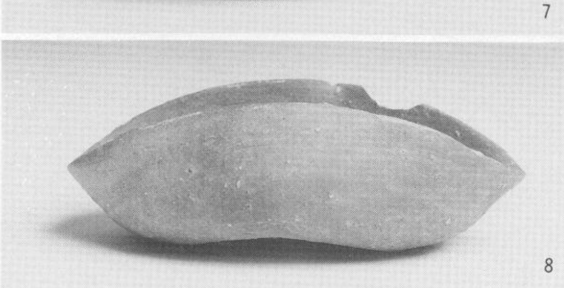
4



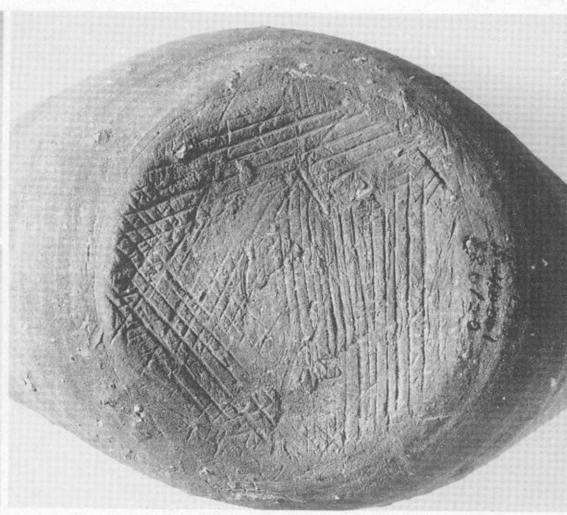
5



7

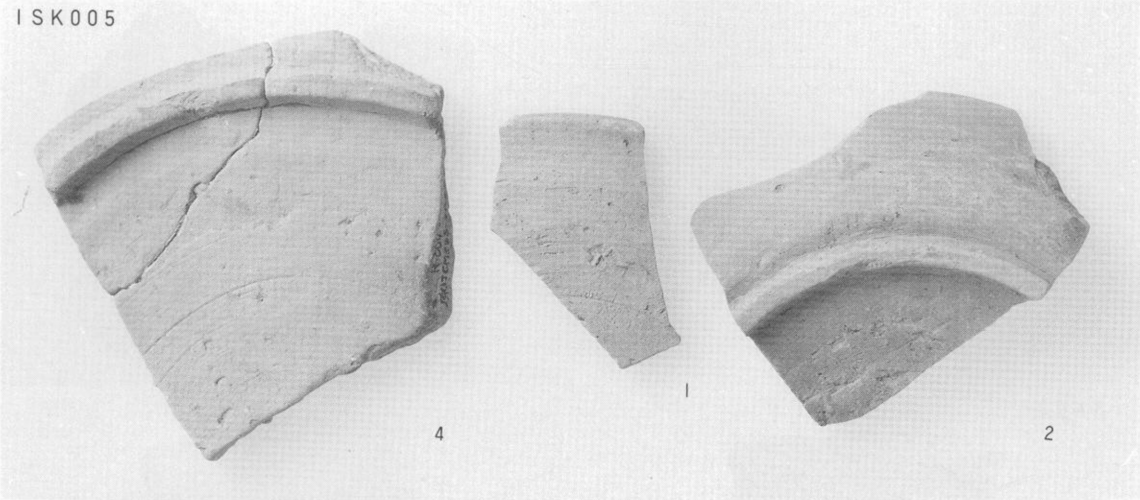


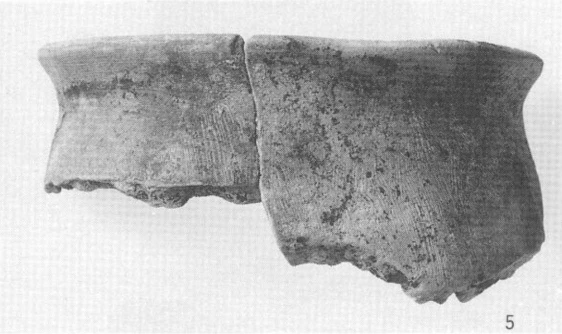
8



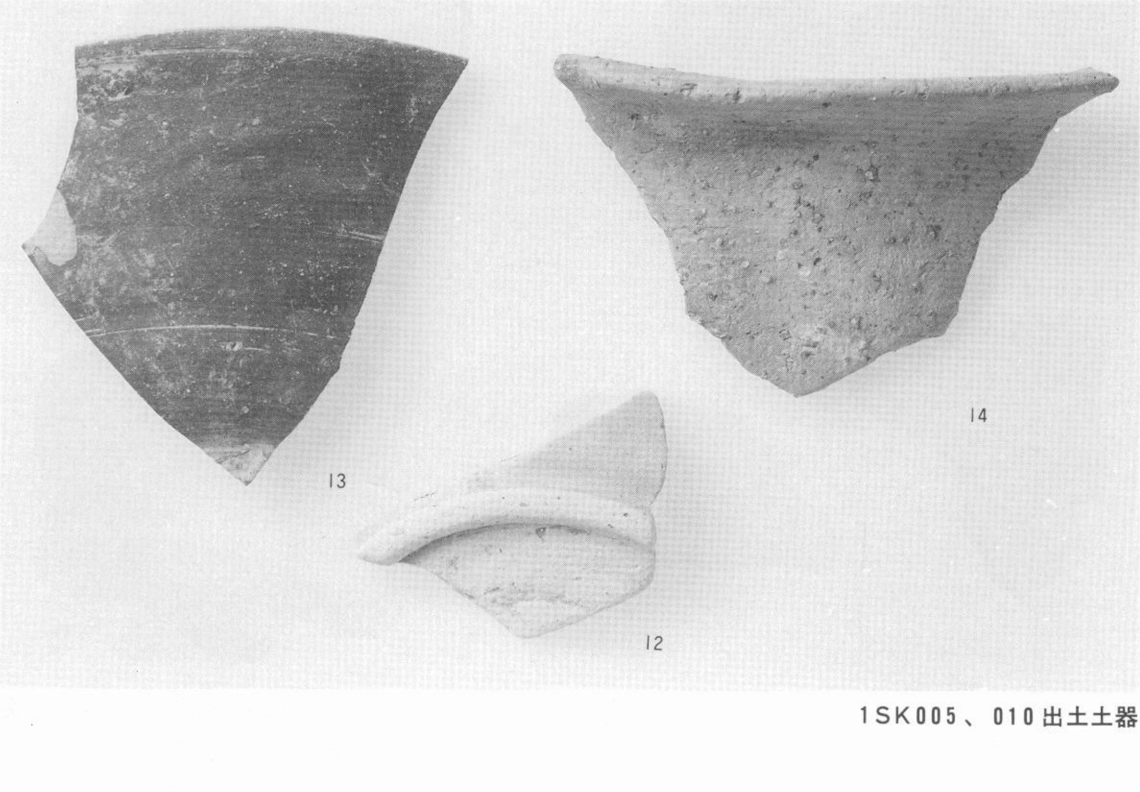
1SI040出土土器

ＩＳＫ００５

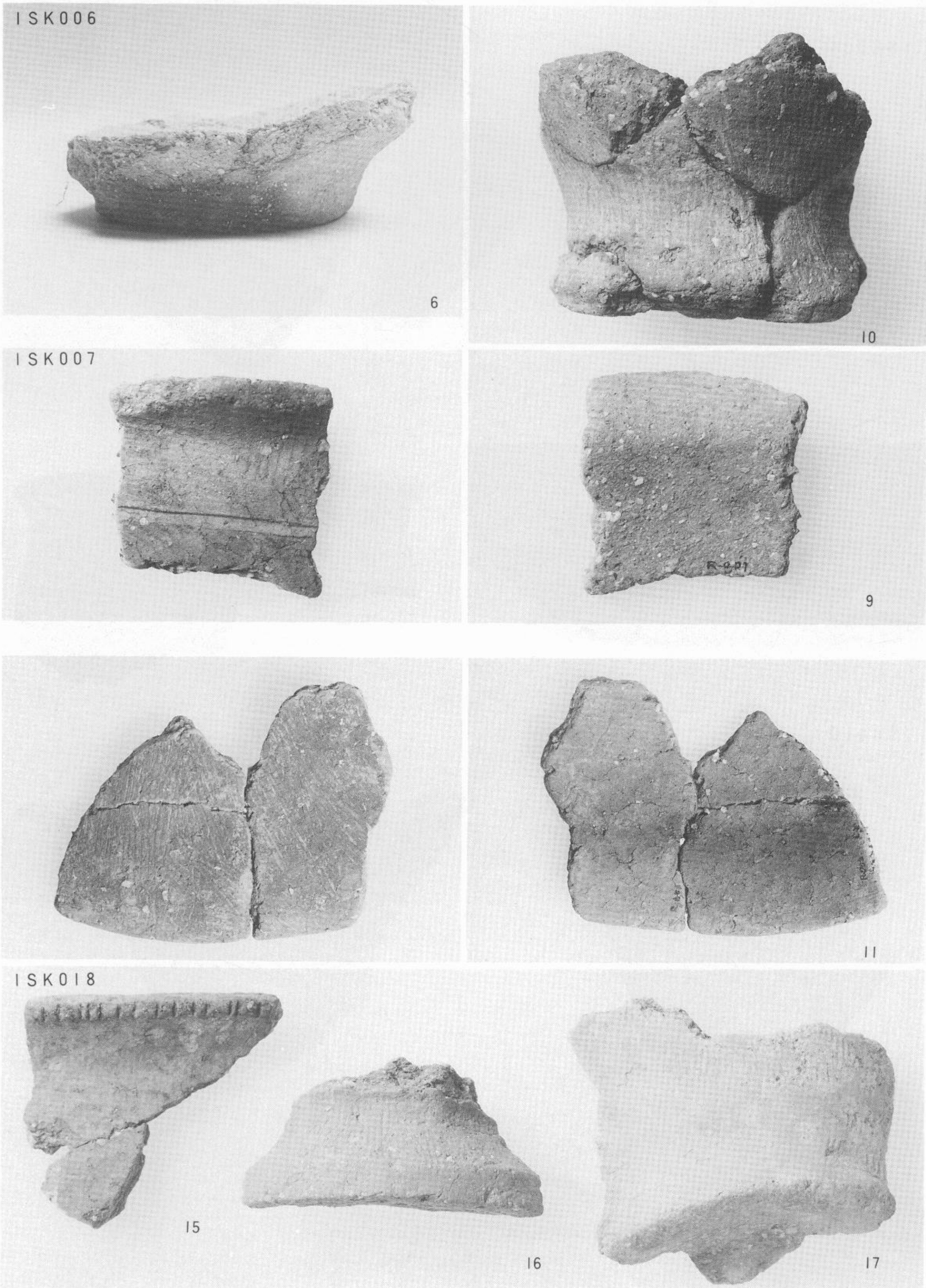




ＩＳＫ０１０

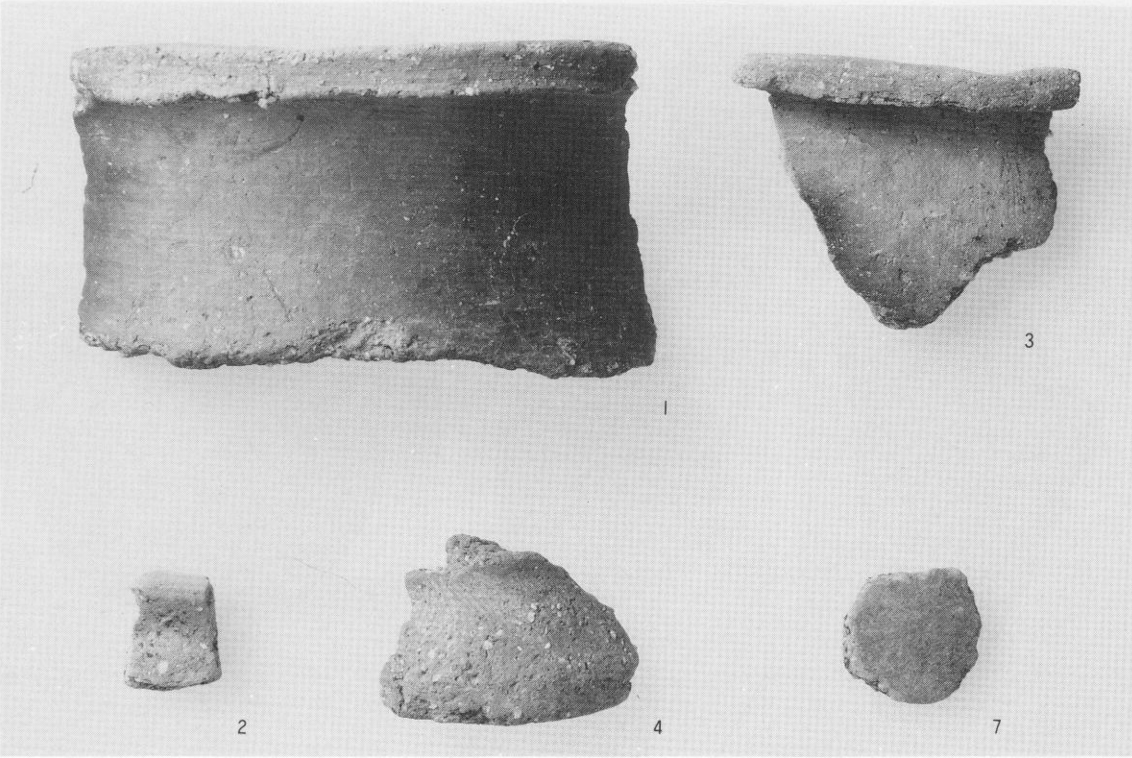


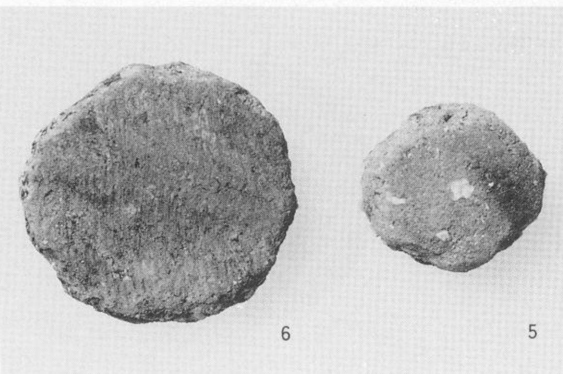
1SK005、010出土土器



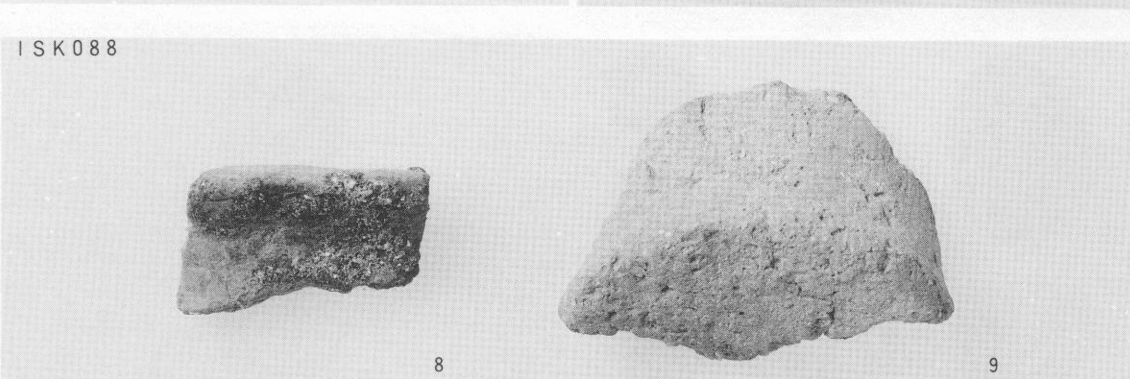
1SK006、007、018出土土器

ISK020

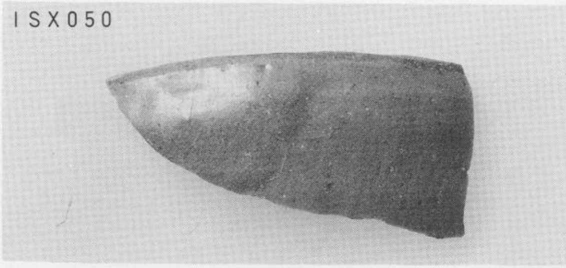


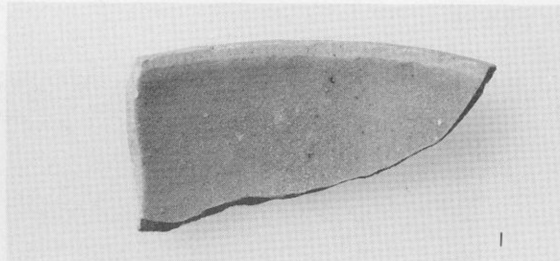


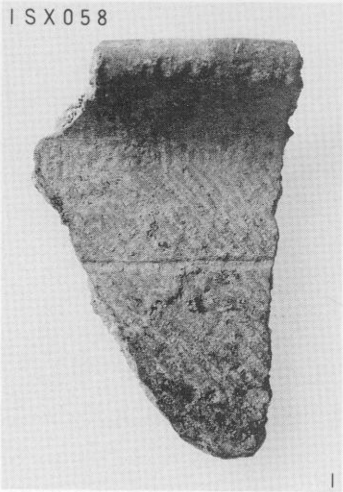
ISK088

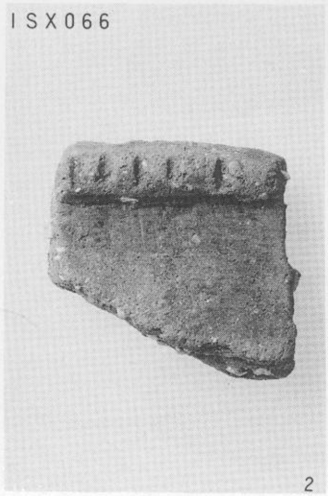


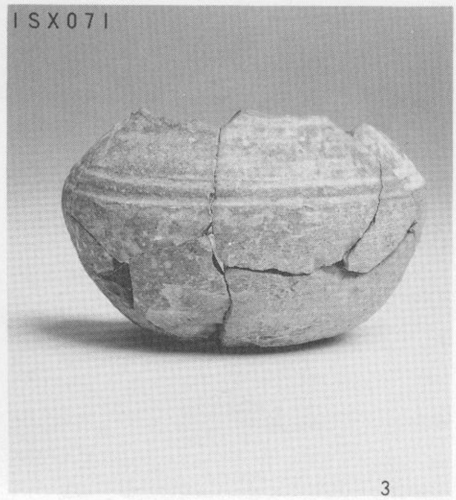
1SK020、088出土遺物

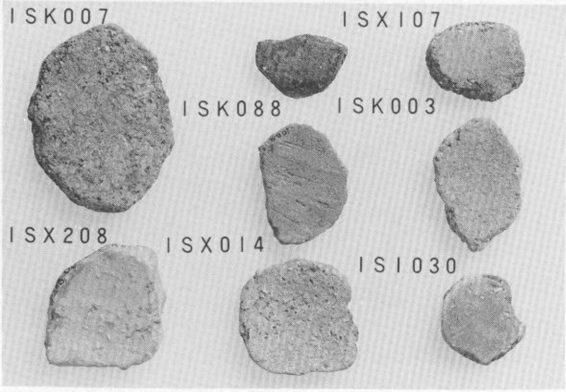

ISX050

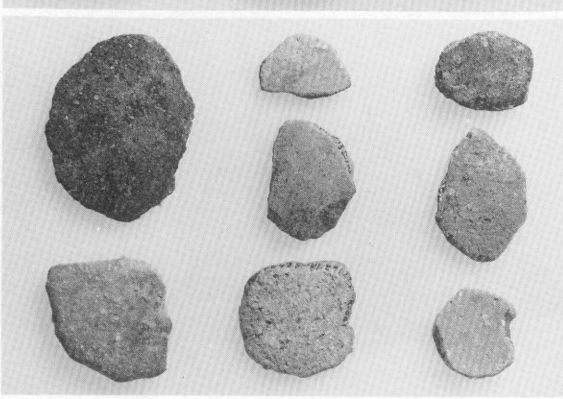

1


ISX058
1


ISX066
2

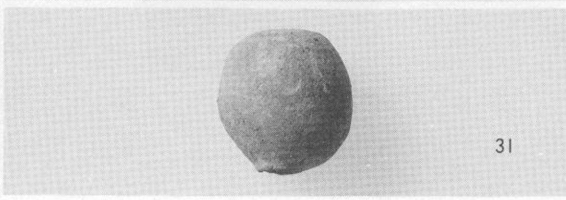

ISX071
3

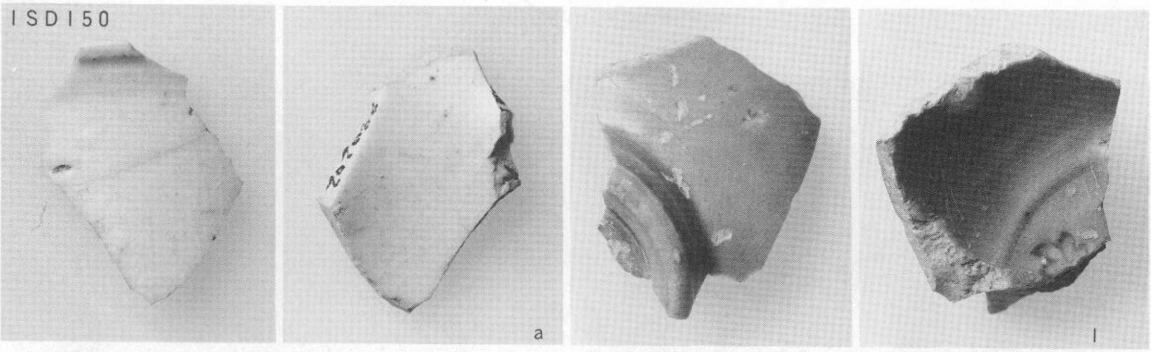

ISK007
ISX107
ISK088
ISK003
ISX208
ISX014
ISI030

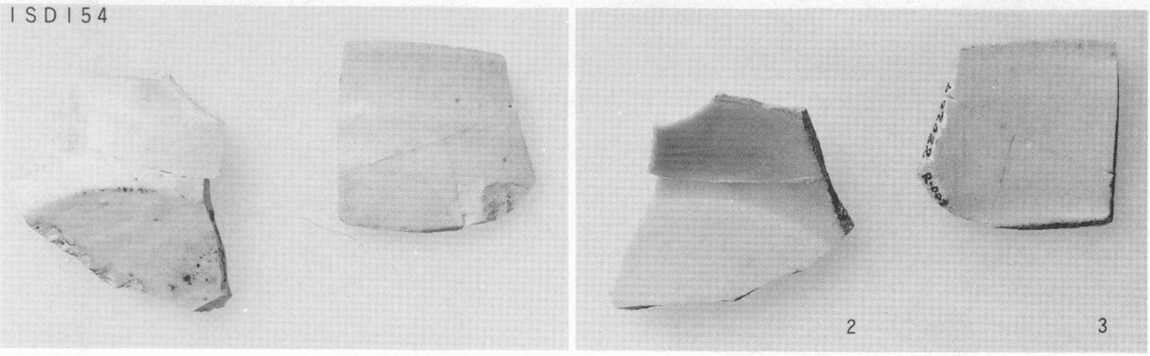


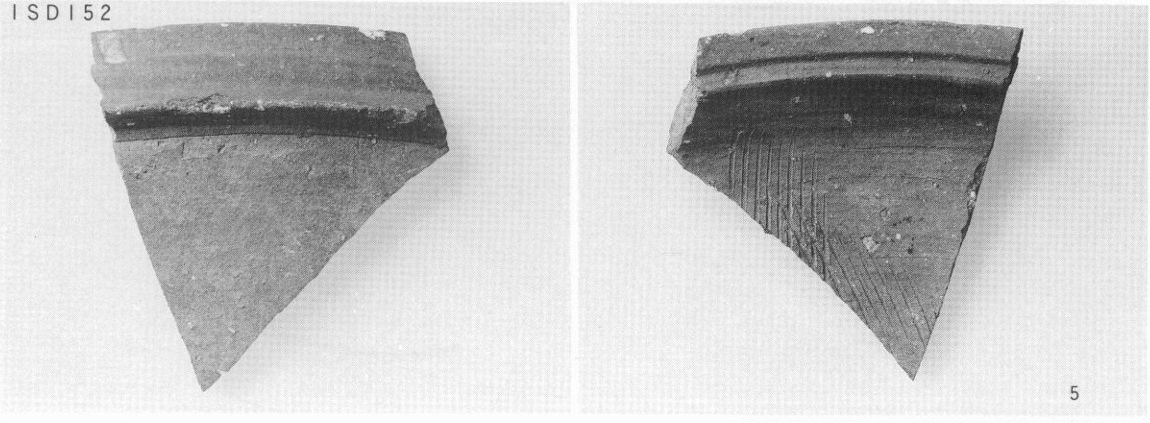

ISX036
32


ISX208

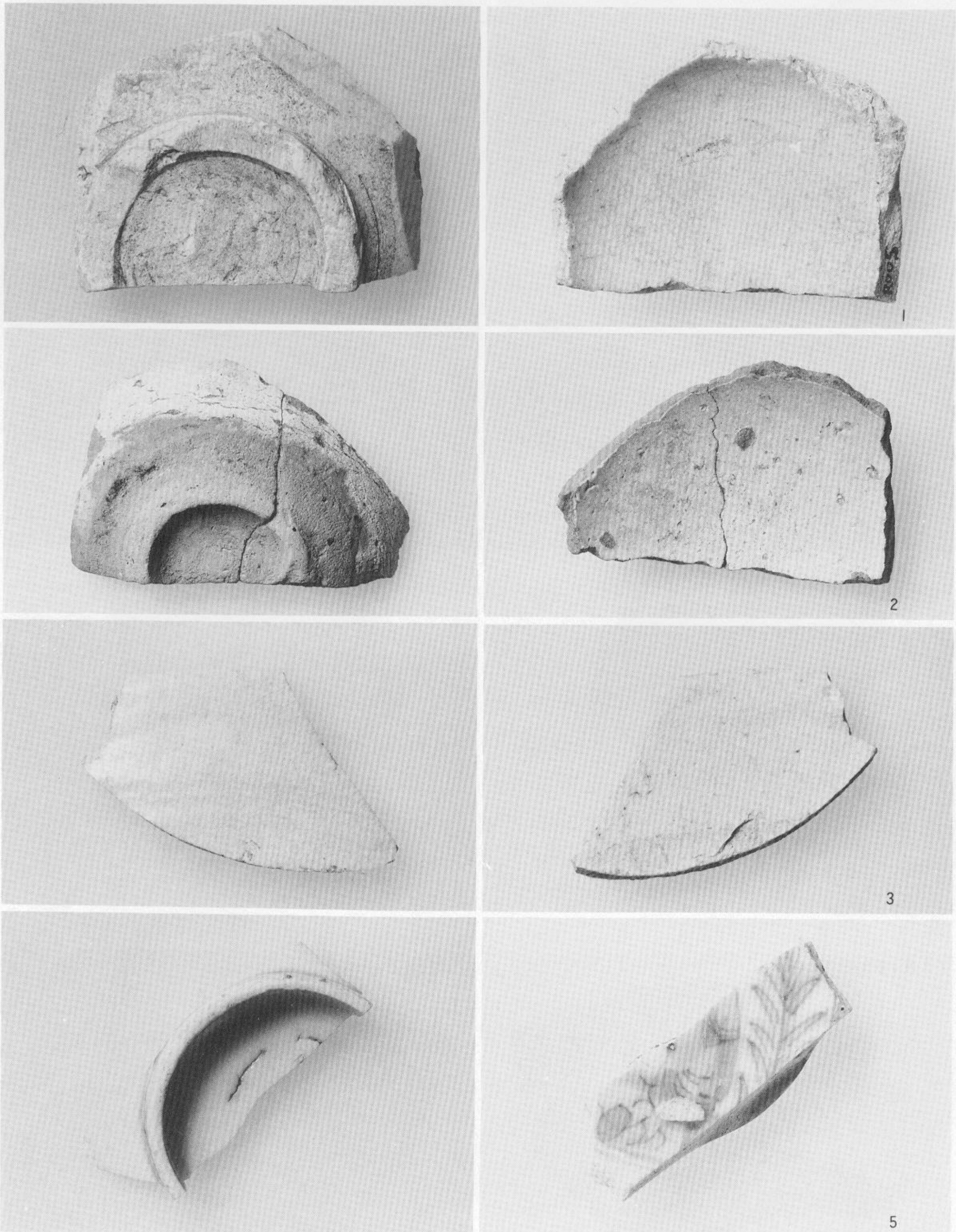

31







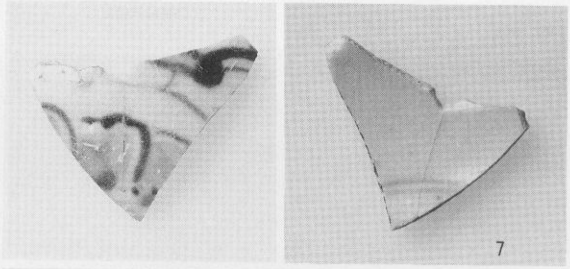
各溝出土遺物



A区灰色土出土陶磁器

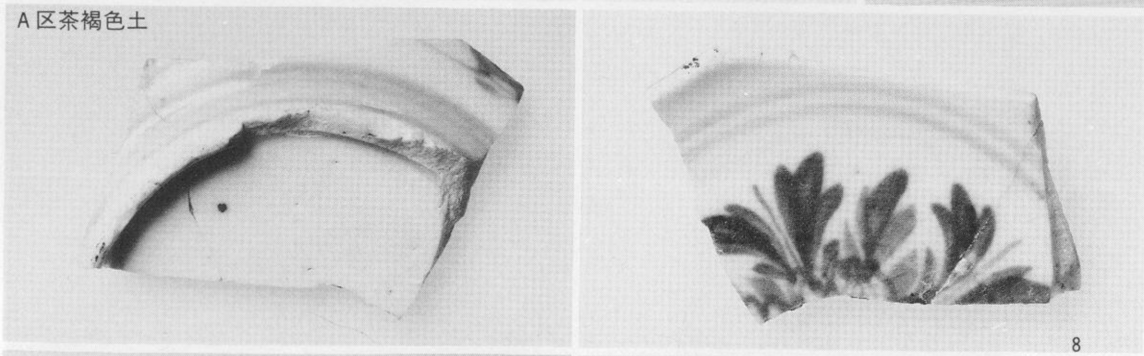
B区灰色土

6



7

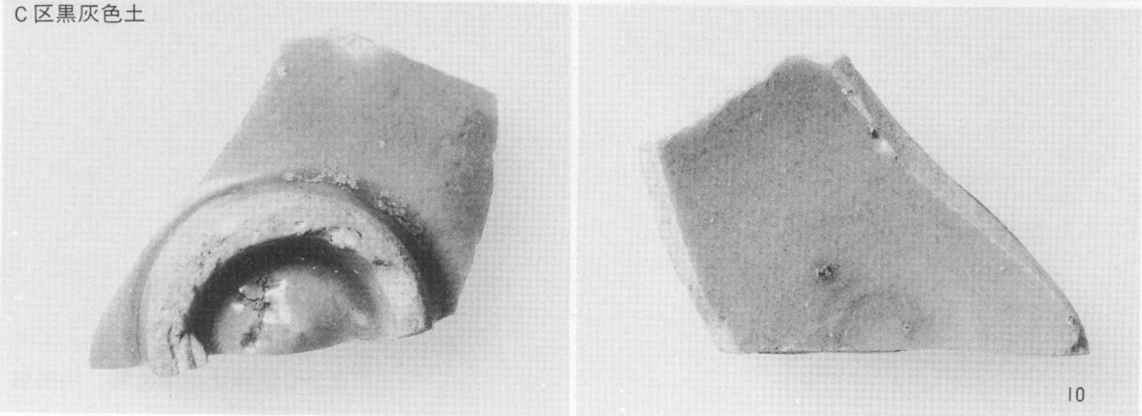
A区茶褐色土



8

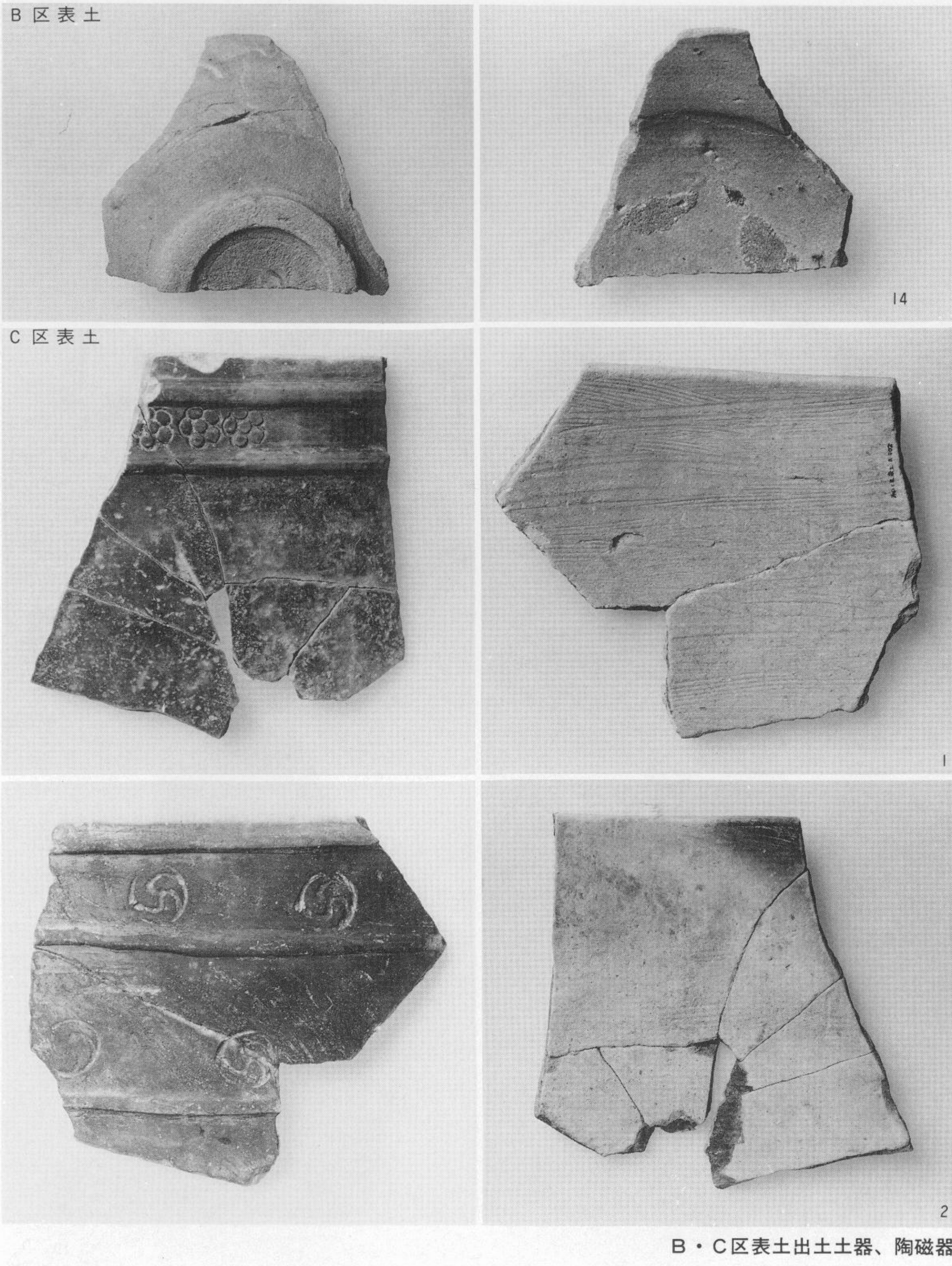
9

C区黒灰色土

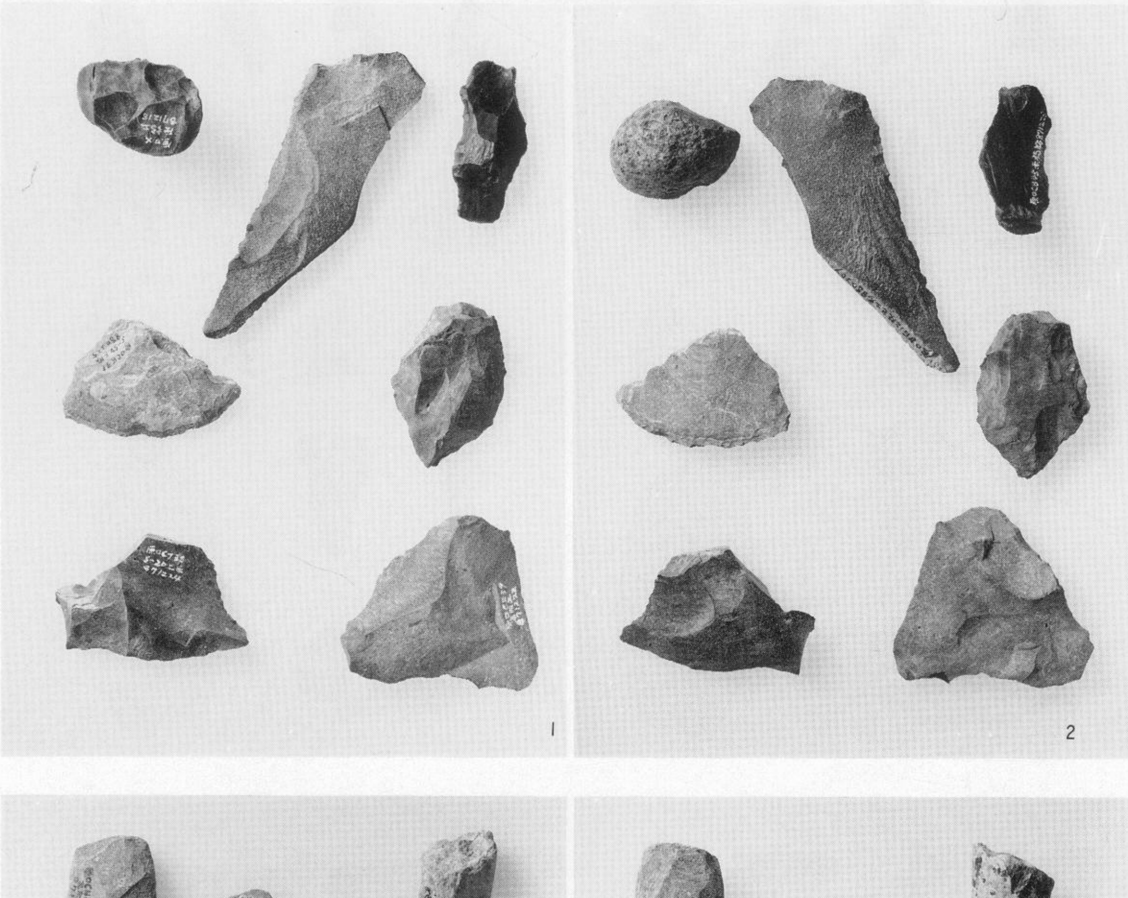


10

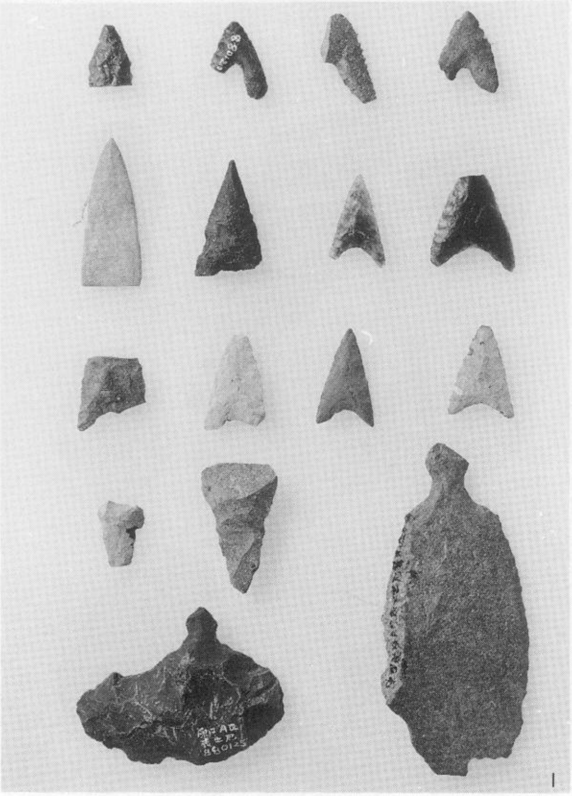
各層出土土器・陶磁器



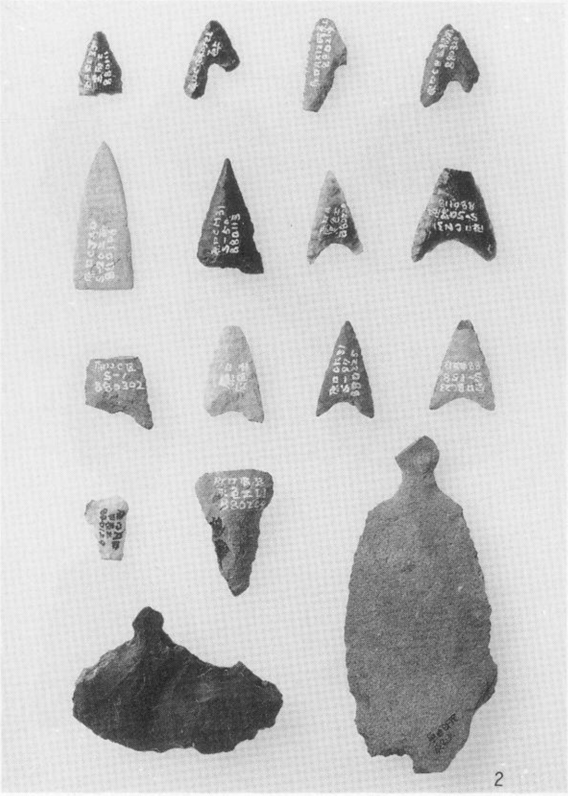
B・C区表土出土土器、陶磁器



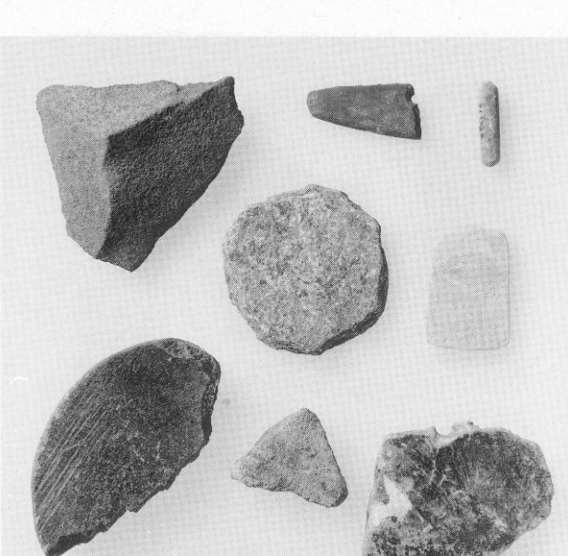
原口遺跡出土石器



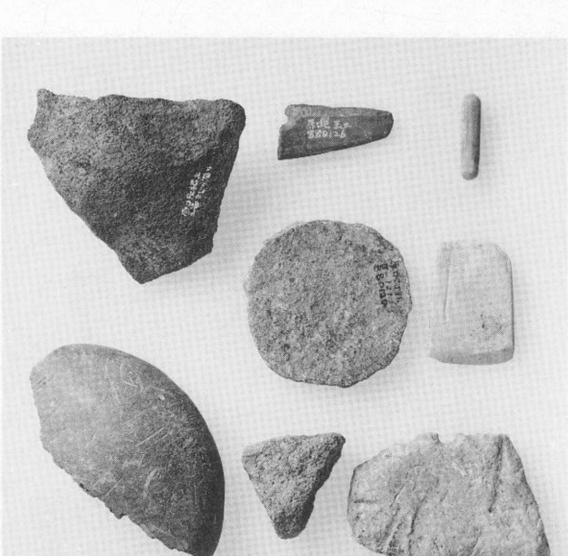
1



2



3



4

原口遺跡出土石器

太宰府・佐野地区遺跡群 I

－ 向佐野・原口遺跡 －

太宰府市の文化財　第14集

1989. 3. 28

編　集　太宰府市教育委員会
発　行　太宰府市大字観世音寺86番地

印　刷　青柳工業株式会社
福岡市中央区渡辺通2丁目9-31

太宰府・佐野地区遺跡群 I

ー向佐野・原口遺跡ー

太宰府市教育委員会

向佐野　原口遺跡

撮影　昭和63年　月
測図　昭和63年　月　オートグラフA7，ステレオプロッターA8
座標系　第Ⅱ系
等高線間隔　25cm